静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第52集

椿　野　遺　跡

平成４年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設促進工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

静　岡　県　教　育　委　員　会
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第52集

椿　野　遺　跡

平成４年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設促進工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

静　岡　県　教　育　委　員　会
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

椿野遺跡は、昭和57～59年に当研究所において調査を行い、弥生時代と中世の非常に大きな集落遺跡である事が確認されている。

弥生時代の集落跡は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が環濠によって区画され、その西側には方形周溝墓が連接して構築されていた。

中世の集落跡は、南北の溝状遺構に区画されているかのような状況で、多くの掘立柱建物跡や井戸跡が発見されている。

今回の調査区は、堤防法面部分の調査ということで、非常に細長く、遺構の性格など不明瞭な点もあるが、前回の調査区の北隣に位置しており、前回の調査成果と併せて参考にしていただきたい。

出土遺物には多量の弥生土器があり、都田川流域の弥生文化を理解していく上で、欠かすことのできない資料となるであろう。また、銅鏃も出土しており、前回の調査時に出土したものと合わせて10点が発見されたことになる。この時代の銅製品の出土量の多さは、県内では他にあまり例がなく、椿野遺跡の重要性が再認識された調査でもあった。

調査の実施及び本書の刊行にあたっては、静岡県浜松土木事務所を始めとする関係各位の深い御理解と御協力があったことに敬意を表したい。また、調査において適切な指導助言にあたられた静岡県教育委員会、浜松市教育委員会に深謝するとともに、事業に参加された多くの方々に感謝したい。

平成5年9月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1．本書は、静岡県浜松市都田町に所在する椿野遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、平成４年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設促進工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課が発掘調査を行い、次いで平成５年度、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が資料整理、報告書作成を行った。

3．現地発掘調査は、平成４年12月から平成５年３月まで行い、ひき続き平成５年４月から一部現地補足調査と整理作業を平成５年９月まで行った。

4．調査体制は次のとおりである。

平成４年度	教育長	大野　忠
	文化課長	高橋　璋
	指導主事	五島康司
	調査員	柴田　睦（静岡県埋蔵文化財調査研究所嘱託）
平成５年度	所　長	斎藤　忠
	常務理事	鈴木　勲
	調査研究部長	植松章八
	調査研究三課長	佐野五十三
	調査研究員	柴田　睦

5．本書の執筆は第２章第１節を五島が、その他を柴田が当たり、遺物写真撮影は、図版15－21を除き、楠本真紀子氏（楠華堂）が行った。

6．本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

7．発掘調査資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

8．発掘調査に当たっては、浜松市教育委員会と細江町教育委員会から御協力を賜り、地学的検討については、静岡大学名誉教授加藤芳朗氏に依頼し、玉稿を賜った。その他、多くの方々にお世話になった。ここに記してお礼申し上げる。

向坂鋼二・川江秀孝・柴田　稔・鈴木敏則・佐藤由紀男・栗原雅也・松井一明・清水　尚
後藤健一・久野正博・小林久彦・加藤理文・服部　郁・小長谷正治・上敷領　久・杉本　良
国見　徹・柳井章宏・高崎直哉・斉藤　新・森原明廣・高橋　和・青木　司・加納俊介
林　弘之・原田　幹・鈴木　徹・贄　元洋・村上吉正・柏木善治・宮内友行・尾崎光伸
（敬称略、順不同）

凡　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1．遺構番号は、現地調査時に使用したものと本書で用いたものは異なるため、その対応関係を遺構観察表に示した。

2．図面の縮尺は、平面図と土層断面模式図を1/90、遺物出土状況図を1/40、土器実測図を1/3、その他の遺物実測図を1/2と1/4に統一をはかった。別図の全体図は1/200である。

3．遺構平面図は、第1～4調査面に分けて掲載しているが、各面は同一層位で確認されたものではない。なお、平面図は高低差を示したもので、新旧関係を示してはいない。

4．平面図に示した座標値は、第Ⅷ系国土座標値である。

5．遺構の標記は次のとおりである。
SD：溝状遺構、**SE**：井戸跡、**SF**：土坑、**SX**：その他、**SP**または**P**：小穴

6．平面図のスクリーントーンは焼土跡を示す。

7．土層断面模式図は、湾曲した堤防法面部分の土層図であり、正確な断面図となっていないため、模式図として掲載した。

8．遺物の標記及び記号は次のとおりである。
Pまたは●：土器、**S**または○：礫または石製品、▲：杭（土器または礫が多量に出土している場合は、どちらかの略号を測量図から省略）

9．出土遺物観察表の胎土については、次のとおり略号を用いている。
白：白色石英（角張った礫）、**黒**：微細黒雲母、**橙**：微細橙色粒子、**大橙**：橙色粒子、**赤**：赤チャート、**砂**：粗砂、**石**：微細石英、**礫**：小礫、◎：多量、○：普通、△：微量、精選：胎土の精良なもの

目　次

序
例言
凡例

第1章　地理的・歴史的環境
　第1節　地理的環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 1
　第3節　土層について …… 6
第2章　調査の概要
　第1節　調査に至る経過 …… 8
　第2節　椿野遺跡のこれまでの調査 …… 11
　第3節　調査範囲と調査方法 …… 11
　第4節　調査の経過 …… 11
第3章　発見された遺構
　第1節　弥生～古墳時代前期の遺構 …… 13
　第2節　平安時代～中世の遺構 …… 15
　第3節　近世以降の遺構 …… 17
第4章　出土した遺物
　第1節　弥生～古墳時代前期の土器 …… 42
　第2節　平安～江戸時代の土器 …… 45
　第3節　石製・土製・金属製品 …… 46
第5章　まとめ
　第1節　弥生～古墳時代前期の集落跡 …… 91
　第2節　中世の集落跡 …… 93
特論　椿野遺跡の土層と環境の地学的検討　　加藤芳朗（静岡大学名誉教授） …… 95

挿表目次

表－1　周辺遺跡地名表 …… 4
表－2　溝状遺構観察表 …… 19
表－3　土坑観察表 …… 20
表－4　井戸跡観察表 …… 20
表－5　小穴観察表（1） …… 21
表－6　小穴観察表（2） …… 22
表－7　小穴観察表（3） …… 23
表－8　小穴観察表（4） …… 24
表－9　小穴観察表（5） …… 25
表－10　出土土器観察表（1） …… 47

表－11　出土土器観察表（2）…… 48
表－12　出土土器観察表（3）…… 49
表－13　出土土器観察表（4）…… 50
表－14　出土土器観察表（5）…… 51
表－15　出土土器観察表（6）…… 52
表－16　出土土器観察表（7）…… 53
表－17　出土土器観察表（8）…… 54
表－18　出土土器観察表（9）…… 55
表－19　出土土器観察表（10）…… 56
表－20　出土土器観察表（11）…… 57
表－21　出土土器観察表（12）…… 58
表－22　出土土器観察表（13）…… 59
表－23　出土土器観察表（14）…… 60
表－24　出土土器観察表（15）…… 61

挿図目次

第1図　上：周辺古環境復元図（小林久彦『椿野遺跡』1985年より転載、一部改図）、下：調査区位置図 … 2
第2図　周辺遺跡分布図（上：弥生時代、中：古墳時代、下：古墳、『静岡県文化財地図』1989年を参考に作成）…… 3
第3図　周辺遺跡分布図（古墳～近世、『静岡県文化財地図』1989年を参考に作成）…… 4
第4図　第1調査面遺構平面図 …… 26
第5図　第2調査面遺構平面図（1）…… 27
第6図　第2調査面遺構平面図（2）…… 28
第7図　第3調査面遺構平面図（1）…… 29
第8図　第3調査面遺構平面図（2）…… 30
第9図　第3調査面遺構平面図（3）…… 31
第10図　第4調査面遺構平面図（1）…… 32
第11図　第4調査面遺構平面図（2）…… 33
第12図　東西土層模式図（1）…… 34
第13図　東西土層模式図（2）…… 35
第14図　SD 407～409・412、SF 414遺物出土状況図 …… 36
第15図　SD 413～416、SF 416遺物出土状況図 …… 37
第16図　SD 420、SF 404・418・419遺物出土状況図 …… 38
第17図　SX 301・301東側・302、SF 403遺物出土状況図 …… 39
第18図　SD 212・301・302・310下層、SX 201遺物出土状況図 …… 40
第19図　SE 1・6、SD 102遺物出土状況図 …… 41
第20図　出土遺物実測図（1）…… 62
第21図　出土遺物実測図（2）…… 63
第22図　出土遺物実測図（3）…… 64
第23図　出土遺物実測図（4）…… 65

第24図　出土遺物実測図（5）…… 66
第25図　出土遺物実測図（6）…… 67
第26図　出土遺物実測図（7）…… 68
第27図　出土遺物実測図（8）…… 69
第28図　出土遺物実測図（9）…… 70
第29図　出土遺物実測図（10）…… 71
第30図　出土遺物実測図（11）…… 72
第31図　出土遺物実測図（12）…… 72
第32図　出土遺物実測図（13）…… 74
第33図　出土遺物実測図（14）…… 75
第34図　出土遺物実測図（15）…… 76
第35図　出土遺物実測図（16）…… 77
第36図　出土遺物実測図（17）…… 78
第37図　出土遺物実測図（18）…… 79
第38図　出土遺物実測図（19）…… 80
第39図　出土遺物実測図（20）…… 81
第40図　出土遺物実測図（21）…… 82
第41図　出土遺物拓影図 …… 83
第42図　出土遺物実測図（22）…… 84
第43図　出土遺物実測図（23）…… 85
第44図　出土遺物実測図（24）…… 86
第45図　出土遺物実測図（25）…… 87
第46図　出土遺物実測図（26）…… 88
第47図　出土遺物実測図（27）…… 89
第48図　出土遺物実測図（28）…… 90
第49図　椿野遺跡遺構配置概念図 …… 92
別図　椿野遺跡全体図（第1～4調査面）

図版目次

図版1　遺跡周辺の現状（北西から）　第1調査面全景（南西から）
図版2　第2調査面全景（東から）　SD102遺物出土状況（南西から）
第2調査面東側全景（西から）　SP2001～2004（南東から）
SP2004西側古銭出土状況（西から）
図版3　第2調査面中央東側小穴群（東から）　SP2034～2038（南東から）　SX202（南西から）
SD212遺物出土状況（南東から）　第3調査面全景（北西から）
図版4　第3調査面東側全景（北東から）　第3調査面西側全景（北東から）
図版5　SX201遺物出土状況（南西から）　SD301～303（南東から）
第3調査面中央東側小穴群（南東から）　第3調査面SD304東側小穴群（南西から）
SD304（南東から）　SE1遺物出土状況（南から）　第3調査面西側全景（南東から）

SD 306～310遺物出土状況（南東から）
図版 6　第 3 調査面 SE 6 東側小穴群（南東から）　第 3 調査面西端小穴群（南東から）
SX 301東（礫集中地点）・302（南西から）　SX 302遺物出土状況（南西から）
第 4 調査面全景（北東から）
図版 7　第 4 調査面東側全景（北西から）　第 4 調査面西側全景（北東から）
図版 8　第 4 調査面東端（南東から）　第 4 調査面東側（南西から）　SX 401（南西から）
SP 4001鉄製品出土状況（北から）　SP 4010鉄製品出土状況（北東から）
SF 403・404遺物出土状況（南西から）　SD 403（南東から）
SX 301銅鏃出土状況（北西から）
図版 9　第 4 調査面中央東側小穴群（東から）　第 4 調査面中央東側小穴群（南西から）
SP 4030～4037（北から）　SF 410遺物出土状況（北から）
SD 407～409遺物出土状況（南西から）　SF 413～415（南から）　SD 412（南から）
SD 412土層断面（北から）
図版10　SD 412遺物出土状況（南西から）　SF 418・419遺物出土状況（西から）
図版11　SD 413～416遺物出土状況（南東から）　SD 413～416（南西から）
SD 414～416遺物出土状況（南から）　SD 414下層砥石出土状況（北西から）
SF 418、SD 420遺物出土状況（南から）　SD 419・420（南東から）
SP 4148～4152（南東から）　SD 421～423（南から）
図版12　1．SD 412集合　2～5．SD 412
図版13　6～12．SD 412
図版14　13～18．SD 412
図版15　19～22．SD 412　23．SF 418・419集合
図版16　24～31．SF 418・9
図版17　32～38．SF 418・9
図版18　39～45．SF 418・9
図版19　46～49．SF 419　50．SX 302集合
図版20　51～56．SX 302　57．SF 404　58．SF 404
図版21　59～62．SF 404　63．SF 406　64．SF 406　65．SF 407
図版22　66～68．SF 410　69～73．SF 416　74．SD 408周辺
図版23　75．SD 408周辺　76．SF 413　77．SD 407　78．SF 415　79・80．SF 413　81．SD 407
82．SD 408周辺
図版24　83～88．SD 413　89．SD 414　90．SD 414上層
図版25　91．SD 414　92・93．SD 415　94～98．SD 416
図版26　99・100．SD 416　101・102．SD 420　103・104．SD 423　105．SP 3151下層
図版27　106～110．SX 201　111・112．SD 310　113．SD 308　114．SD 310上層
115～118．SD 310
図版28　119．SD 308　120．SD 210下層　121．SD 210　122・123．SE 1
124．第 2 調査面西端　125．SX 301下層出土銅鏃　126．上　SP 4010　中　SP 4100
下　SP 4002　127．上　SF 403出土土玉　中　SX 301上層出土石製紡錘車
下　SF 413下層出土土製紡錘車　128．古銭
図版29　129．各遺構出土土錘　130．砥石、大・中　SD 414、小　SD 307　131．SD 414出土底部

第１章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

都田川は静岡・愛知県境の鶯ノ巣山付近に源を発し、引佐町渋川、久留米木などの渓谷を経て、浜松市都田町に至り、細江町中川の低地中央部を大きく弧を描きながら細江町気賀において浜名湖へと流入する。

浜名湖へと注ぐ都田川は、肥沃な沖積平野を形成している。当遺跡は、その都田川の下流域に位置し周囲は三方原台地や丘陵に囲まれた小盆地状を成しており、コンパクトにまとまった地形環境の中に存在している。多種多様な資源を利用し生活する上では、恵まれた環境条件下にあり、当遺跡の発展の基盤がそこに内在していたものと思われる。

引佐山地からは、石器用の石材としてチャートや輝緑凝灰岩などの良質の礫がとれ、また、川原石も豊富である。付近の森林は木材に利用され、周辺からは土器製作用の良質の粘土もとれる。

食料資源は、湖、山や川の幸に恵まれ、狩猟、漁撈、採集や栽培などの方法を用いて、四季折々の食料を獲得していたものと考えられる。また、都田川の運ぶ肥沃な土砂により、米の生産量も比較的高かったものと推測される。

同様の遺跡には、細江町の祝田遺跡や川久保船渡遺跡などがあり、弥生～古墳時代と中世の比較的大きな集落跡として著名である。これらの遺跡も都田川に面しており、その盛衰は、時代的にかなり共通する部分が多く、それらの集落は都田川の流れにかなり左右されていたものと考えられる。

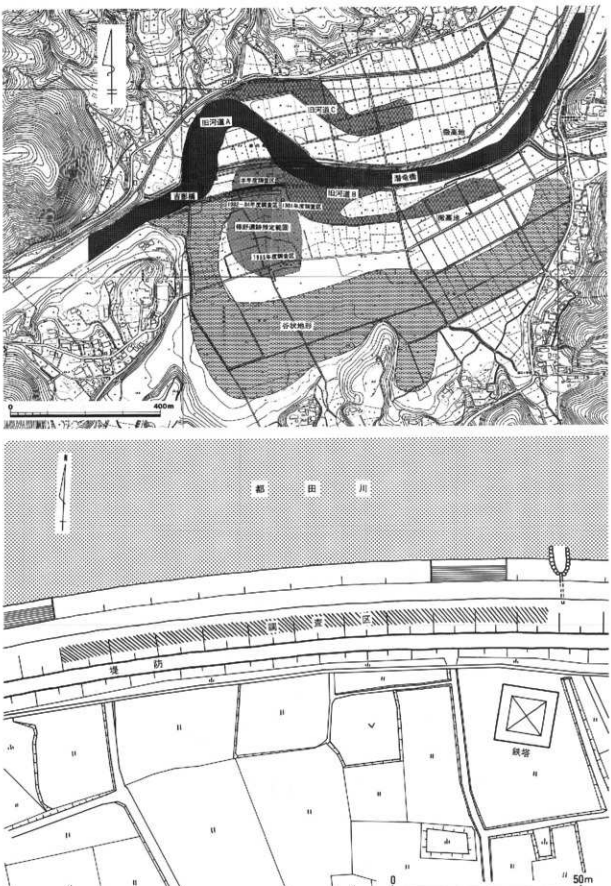
都田川の旧河道は、小林久彦氏により地形図からの復元が試みられており（第１図）、旧河道Ａは遺跡を東西に横断する現代の流路に造り替えられる近代まで、遺跡が存在する微高地の北側を迂回して流れていたようである。旧河道Ｂの左岸には、現在も堤防状の畦道が残っており、比較的新しくまで続いた流路のようである（小林1985）。今回の調査の土層断面（第12図）では、攪乱などにより、堤防状の痕跡は確認できなかったが、不純物をあまり含まないシルト質の粘土が厚く堆積していた。また、その下層では、灰釉陶器を出土した溝状遺構の下から旧河道が確認されている。西側は攻撃面となり深く抉られ、覆土はシルト質で、青灰色に還元されていた。これは、旧河道の形成が案外古くまで遡ることを示しているのかもしれない（加藤芳朗先生は浅い浸食谷であろうとされている）。遺跡西側の谷状地形の部分の土層は、不純物を含まない黄褐色のシルト質粘土が厚く堆積しており、下層土は緑灰色に還元されていた。

明治30年代には、気賀の落合から本村の藤瀬まで、荷物を運ぶ小船が通っていたようである（富田1981再）。それ以前においても、船運により、人の往来や物資の輸送が頻繁に行われていたものと推測され、浜名湖を介した遠隔地との交流も活発に行われていたものと考えられる。

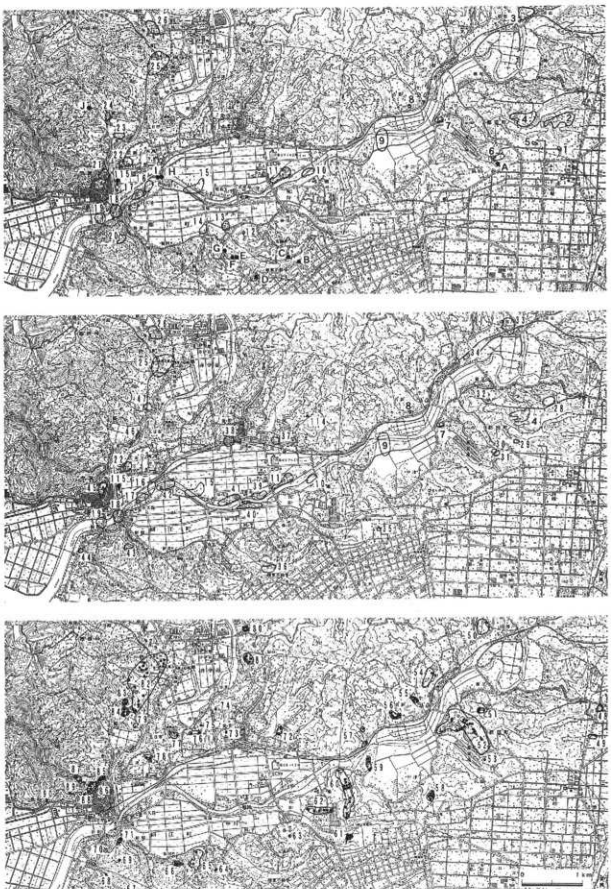
第２節　歴史的環境

当遺跡に人々の活動の痕跡が認められるようになるのは、弥生時代以降であるが、周辺の台地上には、縄文時代以前の遺跡も多く発見されている。とくに、東方の三方原台地上では、都田地区のテクノポリス開発事業に伴い、広範囲に及ぶ調査が行われている。

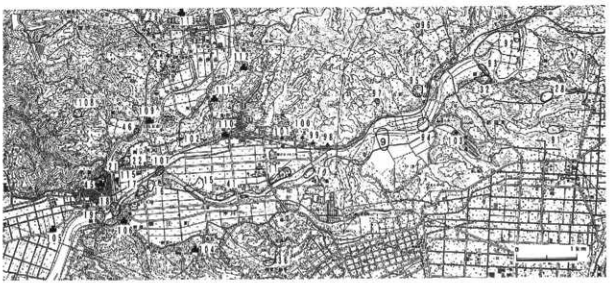
前平Ⅲ遺跡からナイフ形石器が、前平Ⅶ遺跡からは細石刃核が出土しており、旧石器時代の集落の存在が予想される。



第１図　上：周辺古環境復元図（小林久彦『梅野遺跡』1985年より転載、一部改図）、**下：調査区位置図**



第 2 図　周辺遺跡分布図（上：弥生時代、中：古墳時代、下：古墳、『静岡県文化財地図』1989年を参考に作成）



第３図　周辺遺跡分布図（古代－近世、『静岡県文化財地図』1989年を参考に作成）

表－１　周辺遺跡地名表

1．白昭　Ⅰ	2．沢上　Ⅰ	3．川山	4．前平	5．前原　Ⅶ
6．前原　Ⅷ	7．向山	8．片瀬	9．椿野	10．青木
11．祝田	12．障子ヶ谷	13．岡の平	14．宿名	15．茂塚
16．川久保渡船	17．川久保	18．市場	19．曳船	20．猿平
21．上平	22．広岡	23．永田	24．小野	25．正楽寺
26．天白	27．都田山十三　Ⅲ	28．松田谷	29．前原　Ⅲ	30．前原　Ⅴ
31．前原　Ⅵ	32．本村	33．須部　Ⅰ	34．クマ平	35．坂上
36．天満平	37．南屋敷	38．本屋敷	39．田米寺	40．船畑
41．堤花	42．森	43．猿平南	44．山後	45．気賀陣屋
46．本屋敷	47．正楽寺岡	48．沢上Ａ古墳群	49．沢上Ｂ古墳群	50．須部Ｂ古墳群
51．見徳古墳群	52．谷上古墳群	53．前原古墳	54．中野古墳群	55．吉影Ａ古墳群
56．吉影Ｂ古墳群	57．吉影Ｃ古墳群	58．郷ヶ平古墳群	59．一色古墳群	60．恩塚山古墳群
61．都田山古墳群	62．陣内平古墳群	63．蜂前古墳	64．宿名古墳	65．陣平古墳
66．陣座ヶ谷古墳群	67．中平古墳群	68．狐塚古墳	69．油田４号墳	70．油田３号墳
71．油田古墳群	72．石岡古墳群	73．稲荷山古墳	74．谷津古墳	75．坂田古墳
76．五日市Ａ古墳群	77．五日市Ｂ古墳群	78．五日市Ｃ古墳群	79．風呂ノ入古墳群	80．一ノ沢古墳群
81．馬場平古墳群	82．白山古墳群	83．高辺山古墳群	84．小野古墳群	85．上平古墳群
86．上町古墳群	87．橋山古墳群	88．片町古墳	89．妙見寺跡裏古墳	90．呉石古墳
91．沢上　Ⅱ	92．須部　Ⅱ	93．貴元寺東	94．安穴	95．須部神社西
96．フルカヤ	97．吉影八幡神社	98．平石古窯	99．宝林寺境内古窯	100．釜下古窯
101．平屋敷古窯	102．中尾	103．鴨ヶ谷古窯	104．刑部砦	105．堀川城
106．刑部城	107．三和	108．小野山	109．今城	110．金指陣屋
111．谷津砦	112．上野砦	113．井伊谷城	114．出ヶ谷古窯	115．井通（範囲確認中）

Ａ．前原銅鐸　Ｂ．滝峯才四郎谷銅鐸　Ｃ．穴ノ谷銅鐸　Ｄ．不動平銅鐸　Ｅ．滝峯七曲り１号銅鐸
Ｆ．滝峯七曲り２号銅鐸　Ｇ．悪ヶ谷銅鐸　Ｈ．船渡１号銅鐸　Ｉ．船渡２号銅鐸　Ｊ．小野銅鐸
（銅鐸の●は三遠式、■は近畿式）

※●　◐◀…古墳、▲…窯跡、▟…城館・砦跡

縄文時代の遺跡もそれほど多くは発見されていないが、前平Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ遺跡からは、竪穴住居跡が確認され、前平Ⅲ遺跡では、中期後半の環状集落が発掘され、黒耀石の原石、石核や剝片が石鏃と共に多量に出土している。前平Ⅳ遺跡からは、石錘が多量に出土し、集落間における生業の違いが指摘されている（太田1989）。低地部からも、後晩期の土器片が祝田遺跡で比較的多く採集されているが、かなり深い地点での発見であり、そうした遺跡も多く存在しているものと考えられる。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては、前平Ⅷ遺跡や沢上Ⅵ遺跡から条痕文系の土器棺が発見され、川山遺跡では、大量の打製石斧と共に条痕文系土器が出土している。石斧の製作址ではないかと古くから指摘されている（松本1930）が、この時期における農耕化への移行と関連するのであろうか。遠賀川式系土器も前平Ⅷ遺跡や岡の平遺跡から微量であるが出土しており、本格的な稲作農耕が開始されたのは、前期まで遡る可能性も高いであろう。

弥生時代中期から後期初頭では、祝田遺跡や川久保船渡遺跡から土器棺が多く発見され、集落数の確認例の少なさに比して、やや特異な状況である。

弥生時代後期になると、丘陵上に小規模な集落が、低地部に大規模な集落が形成される。丘陵上の向山遺跡が前半と後半に営まれていることから、高地性集落の一種と捉えられてきたが、同様の立地の沢上Ⅰ遺跡などが調査され、その竪穴住居跡は比較的簡単なつくりで、炉跡には何枚かの間層が認められている。季節的なものかもしれないが、その立地を考慮すると、焼畑などの畑作を生業とした村ではなかったかと推定されており（太田1990）、丘陵上の集落を一面的に解釈することはできなくなってきている。

後期後半になると、居住域は拡大し、周辺の遺跡数が増し、都田川の自然堤防上には、当遺跡や祝田遺跡で環濠が確認され、拠点的な集落がつくられる。これらの集落は、周辺の小規模な集落と有機的な関係をもち、銅鐸祭祀などを通じて、宗教的な共通の観念によってまとまっていたのではないかと思われる（第２図上）。

都田川下流域では、銅鐸を始めとする銅製品が多く出土している。これらは、西方からの製品や素材の流通経路がある程度確立されていたことを示しているものと思われ、西方との密接な交流があったものと推測される。また、銅鐸には、製品の移入だけでなく、それに伴う儀礼的、宗教的要素も導入されたものと思われる。

古墳時代になると、井伊谷川流域に北岡大塚古墳（前方後方墳）や馬場平１号墳が築かれる。当遺跡では、古墳時代前期以降には集落規模が縮小する。おそらく北岡大塚古墳の築造を契機として集落の再編成が行われたのではないかと想定される。

古墳時代中期になると、当遺跡、川久保遺跡や祝田遺跡から、遺物は少量ながら出土しているが、集落の様相はほとんどわかっていない。この傾向は当地域に限られたことではなく、普遍的な傾向であろう。一般的に言われているのは、この時期は政治的な安定と各世帯層の成長により、集落が散村化し、遺構が発見されにくいのではないかとされている。また、生産構造の特殊化と複合化が同時に進行した時期でもあり、一般的な集落では分村が進み、園宅地の発生や生産物の私有化傾向が強まったことも、一つの要因であるかもしれない。この時期の都田川流域の丘陵上には、陣座谷古墳、恩塚山将軍塚古墳や都田山１号墳が築かれている。これらの背景には、小地域における首長層の成長があったものと考えられている（向坂1968）。

古墳時代後期になると、当遺跡周辺の丘陵上には、北に吉影古墳群、西に一色および恩塚山古墳群、南に郷ヶ平古墳群、西には谷上古墳群といった多くの群集墳が築かれている。これら多くの古墳に比較して、被葬者が居住していた集落については、あまりよくわかっていないのが現状である。この時期の集落としては、向山遺跡や沢上遺跡などの丘陵上の集落の様相は解明されつつあるが、低地における集

落の内容については不明な点が多い（第２図中・下段）。当遺跡からは、この時期の遺物は少量出土しているが、それに伴う遺構については発見されなかった。

奈良・平安時代についても、当遺跡では前時期と同様な様相を示しているが、川久保船渡遺跡からは、土馬や手捏ね土器などの祭祀遺物と共に、多量の奈良時代の土器が出土し、特殊な集落の存在が予想される。また、東方には、灰釉陶器や山茶碗を焼成した鴨ケ谷古窯があり、すでに消滅しているが、２基以上の窯跡が存在していたとされ、当遺跡から出土した土器の多くのものが、この窯の製品の可能性もあろう。

中世になると前時期とは大きく様相が異なり、当遺跡や祝田遺跡では、多くの小穴（掘立柱建物跡）や井戸跡などが広範囲から発見され、かなり、大規模な集落を形成している。古くから言われていることであるが、都田御厨との関係も指摘されている。西方には、初山宝林寺の周辺に約10基の窯跡があり、大窯期の製品が焼かれている。周辺の集落から初山古窯の製品が出土しており、多くは日常雑器として使用されていたのではないかと思われる。その他、台地上では多数の炭焼窯の跡が発見されている（第３図）。

第３節　土層について

今回の調査区は、遺跡の東西を横断している堤防法面に沿った部分にあたる。そのため遺跡は現代の攪乱を受けないで、良好な状態で地中に保存されていた。

そうした状況下にあることは、調査の当初から指摘され、土層についてもできる限りの範囲を記録保存するとの前提で調査が進められた。

土層は堤防造成時の盛土により、多少圧縮されている可能性もあるが、およそ50年程では、それほど影響がないものと思われる。

土層図（第12・13図）は、遺跡の範囲とその周囲の一部を堤防法面に沿って東西に作成した。この土層図は、法面部分を垂直図に、曲線的部分を直線的に人力により図化しているため、細部については正確な測量図とはなっていない。そのため、模式図として掲載した。

堆積した土壌は、総体的にはシルト質の粘土で、かなり分層が困難であった。西側は、灰白色粘土の含有量の多寡などにより、比較的層位的把握が可能であるが、東側は堆積した土壌が薄く、また、高位置にあり、人為的な攪乱が著しいことなどに起因し、分層は非常に難しかった。

調査当初は、層位的な把握ができなかったため、上層から遺構が確認された面を順次調査しており、実際には、東側と西側の調査面が同一層であるという保証はない。土層図中には、スクリーントーンで層位を示しているが、これは、単に土壌の質が類似しているものをまとめたものである。

土層は、中央部の比較的層位的な把握が可能であった地点を基本土層とし、１～12層に分層した。１層土は堤防盛土で、12層土はベースの黄褐色シルト質粘土層である。２～11層土は、大きくは２層にまとめることができ、２～５層土は黄色の強いシルト質粘土層で、６～11層土が褐色の強いシルト質粘土層で、遺物や炭化物を多く包含していた。ここで、標記が煩雑になるため、呼称をⅠ～Ⅲ層に再整理すると、Ⅰ層土が２～５層土に、Ⅱ層土が６～11層土に、Ⅲ層土を12層土とまとめることができる。

調査対象面は、第１調査面がⅠ層下位に、第２調査面がⅡ層上位に、第３調査面がⅡ層中位に、第４調査面をⅢ層上面におよそ対応させることができる。

調査区東側では、Ⅱ層土中にかなり多量の小礫が包含されている。これについては、加藤先生から、自然に堆積したものではなく、持ち込まれている可能性が高いとの御指摘をいただいている。第３調査面で確認された古墳時代前期の配石状の遺構（第17図）などと関連するものと思われる。

引用・参考文献

1．辰巳和弘「"井のクニ"の盛衰」『引佐町史』上巻　1991　引佐町教育委員会
2．静岡県『静岡県史』資料編１・２　1991
3．浜松市役所『浜松市史　一』1968
4．細江町教育委員会『細江町史』資料編六　1986
5．栗原雅也『川久保船渡遺跡』1993　細江町教育委員会
6．佐野五十三『祝田遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1984　駿府博物館付属静岡県埋蔵文化財調査研究所
7．富田準作『都田村郷土誌』1981再版　雄林堂書店復刊
8．太田好治『都田地区発掘調査報告書　上巻』1989　（財）浜松市文化協会
9．太田好治『都田地区発掘調査報告書　下巻』1990　（財）浜松市文化協会
10．川江秀孝他『椿野遺跡』1982　浜松市遺跡調査会
11．足立順司『椿野遺跡Ⅰ』1984　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
12．佐藤由紀男・小林久彦『椿野遺跡』1985　浜松市遺跡調査会
13．佐野五十三「椿野遺跡」『年報１』1985　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
14．向坂鋼二『川山遺跡発掘調査報告書』1991　浜松市教育委員会
15．松本吉治「静岡県引佐郡都田村川山遺跡遺物に就いて」『史前学雑誌』第８巻第６号　1930　史前学会
16．漆畑敏『向山・谷上古墳群発掘調査概報』1982　浜松市教育委員会
17．栗原雅也『初山焼釜下古窯発掘調査報告書』1985　細江町教育委員会
18．静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡』1989
19．向坂鋼二「古墳時代」『浜松市史一』1968　浜松市役所

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

椿野遺跡は、三方原台地北縁部を流れる都田川の吉影橋付近より西側の自然堤防上に立地して広がる（浜松市都田町917番地他）弥生時代から古墳・奈良・平安・中世・近世と続く複合遺跡である。

１　これまでの調査

（１）分布調査

昭和54年の都田川防災工事計画策定（昭和49年７月の七夕豪雨により都田川堤防が決壊し、洪水による被害が出たことによる。）に伴って県教育委員会文化課によって分布調査が実施された。その結果、浜松市内では、椿野遺跡・安六遺跡。細江町内では、市場遺跡などの他７遺跡の存在が確認された。

これらの調査結果に基づき県教育委員会文化課と浜松土木事務所との協議が実施され、昭和55年に、細江町教育委員会が主体者となり、川久保、森、茂塚、祝田地区で確認調査が実施されている。

（２）椿野遺跡に係わる発掘調査

これまでに、椿野遺跡に係わる開発行為に伴い、以下のような発掘調査が実施されている。

昭和56年

中部電力の鉄塔工事に伴う発掘調査

230㎡

浜松市遺跡調査会

昭和57～59年

都田川河川改修に伴う新堤の盛土工事に伴う発掘調査（上流部、東端より調査）

57年　700㎡（長さ70m）

58年　600㎡（長さ60m）

59年　600㎡（長さ60m）

静岡県埋蔵文化財調査研究所

昭和60年

静岡県湛水防除事業、浜松市市道建設事業、学校法人常葉学園大学建設事業に伴う発掘調査

浜松市遺跡調査会

新堤の遺跡残存調査

排土の埋め立て地全景

重機による埋め立て地の調査

遺物の採集調査

2　椿野遺跡の破壊

（1）新堤建設に伴う発掘調査

昭和57年に新堤の建設が計画され、椿野遺跡範囲であることから静岡県知事名による法57条－3の通知（浜土1005号）の提出があり、昭和57年から昭和59年にかけて新堤施工範囲の発掘調査が実施された。

その際、今後の遺跡の取扱いについても協議され、旧堤部分の掘削など新堤部分以外の工事を実施する場合、事前の発掘調査が必要であることが確認された。

（2）旧堤掘削に伴う遺跡破壊

平成3年度に至り、浜松工事事務所は埋蔵文化財の取扱いについて教育委員会との協議のないまま、旧堤部分の掘削工事及び新堤の護岸工事を実施した。

このため、旧堤部分に存在した遺物包含層が破壊され、椿野遺跡のうち幅13m、長さ150m、面積1950㎡が消滅した。

浜松市教育委員会から県教育委員会文化課に椿野遺跡内の都田川の旧堤部分に掘削が及んでいるとの連絡が12月6日に入った。このため文化課は現地確認を実施。旧堤部分は、すでに掘削工事が終了し、現況をほとんど残していない状況であった。ここから、掘削搬出された多量の土の搬出地を確認したところ、ローリングされた状態で遺物（土器片）が散乱していることが判明した。

県教育委員会文化課は重大な事態であるとの認識から、県土木都河川課及び浜松土木事務所に対し工事の停止及び現地の現況保全を求めるとともに今回の破壊に至った経緯の聴取及び、今後の処置について緊急協議を実施した。

その結果、県土木都河川課及び浜松土木事務所に対し、県教育長名で今回の埋蔵文化財の破壊について「厳重注意書」を送付し「工事内容報告書」と「始末書」の提出を求めることとした。

＜工事内容報告書＞　浜松土木事務所提出

工事名	平成3年度　住宅宅地公共施設整備促進（中小）浜松第一工区工事（浜松テクノ）
工事箇所	浜松市　都田地先
工　期	着手　平成　3年8月9日
	完成　平成　4年3月15日
工事区間	吉影橋より上流へ720mの左岸護岸。8月上旬第一工区として吉影橋より潜竜橋までの区間472mを発注。

「厳重注意書」として、県教育委員会教育長名、県土木部長宛て平成4年2月6日付　教文第500号で「静岡県土木都所管の公共土木工事における浜松市都田町所在椿野遺跡の破壊に関する措置について」を通知した。

平成3年度住宅関連公共施設整備促進事業（浜松テクノ）に伴う河川改修工事において、浜松市都田町に所在する椿野遺跡が広範囲にわたり未調査のまま破壊されたことは文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財の取扱いに関する勧告に反した行為となり、誠に遺憾であり、今後、再びこのようなことのないよう事前の調整が十分はかられるよう関係機関への指導を徹底するよう求めたものである。

内容としては、（1）事業計画にあたって、埋蔵文化財の所在の有無について教育委員会に照会すること。（2）埋蔵文化財の所在している場合は県及び市町村教育委員会と協議すること、工事中に発見された場合、工事を一時中断して県及び市町村教育委員会と協議すること。（3）事業が数年にわたる場合、年度ごとに協議する事。（4）事業を円滑に進めるため教育委員会との連絡を密にすること。の4項目である。

このことについて、浜松土木事務所長から破壊に至る経緯と陳謝として平成４年４月10日付浜土第2717号で「静岡土木部所管の公共事業における浜松市都田町所在椿野遺跡の破壊に関する措置に付いて」（通知）が県教育委員会教育長ならびに、浜松市教育委員会教育長宛て提出された。

椿野遺跡を破壊した事実については、誠に不本意なことであり、深く陳謝の意を表し、県土木部長宛て平成４年２月６日付　教文第500号通知を遵守していく所存であるとの内容であった。

また今回の件については、前回調査完了期から７年が経過し、担当者は５人が交替するなかですべての範囲が調査済との誤認があったことや、施工業者に対して遺跡の指導が十分でなかったことからこのような事態になったとの報告であった。

3　破壊状況の調査及び残存遺跡の取扱いについて

県教委による緊急の現地調査で新堤下部に遺物包含層が残存する可能性があることが分かり、12月19日から21日にかけて新堤の法面の調査を実施した。その結果、新堤が旧堤に重ねられて構築されているため旧堤の一部が新堤の河川側法面に残されていることが確認された。

旧堤を構成していた土は、今回の工事によって椿野遺跡の南西500ｍの谷に搬出され、この土の中からも遺物（土器片）が確認されたため、遺物の包含状況を把握するための調査を平成４年１月に実施した。

搬出された土は30,000㎥にものぼり、廃土場はすでに水田とするため面整備がされていた。廃土場全域に重機でトレンチ状に溝を縦横に掘って作業員による遺物の採集を試みたが、土が搬出された際にローリングされていることや、粘質土壌のため大変困難な作業であった。５日間にわたる調査で３箱程度の土器が採集されたが、全域にわたる調査は不可能であり、廃土場でのこれ以上の搬出土の調査は断念せざるを得なかった。

4　今回の発掘調査

新堤防の河川側法面の護岸工事は実施されていなかったため、遺跡が残存する部分の調査につい土木事務所と協議を行なった。平成３年度のこれ以上の工事は延期することが決まった。新堤防の河川側法面の護岸工事部分について、４年度に発掘調査を実施することになった。

新堤防の中に一部分残された旧堤防に遺物包含層（遺跡）が存在しているが、今回の発掘調査は新堤防の内側を削ってコンクリート護岸を築く工事に伴うものである。工事によって削る厚さは60cm程であるが、斜面部分の調査のため平面では100cm～150cmの調査面となった。

5　県営事業と埋蔵文化財の保護について

文化財との調整・協議のなされないまま都田川の旧堤防部分の掘削工事が進められ、椿野遺跡が破壊されたことは文化財保護行政をすすめている上で衝撃的な事であった。

静岡県では、平成元年度から県営公共事業について県の事業部局・課、出先事務所すべてを対象として「開発関係部局と文化財との連絡会」を実施し文化財の保護と周知化を図ってきた。この連絡会では文化財保護の理念・文化財保護法・発掘調査の実際などの研修や、次年度以降の事業の聴取を行なってきた。今回の事態は、新堤の発掘調査から何年もたって、担当者も替わるなかで旧堤部分もすでに発掘調査が済んでいると勘違いしたものであるが、今後、このような問題を起こさないための調整システムをさらに強化・確立しなくてはならない。

平成４年３月18日付けで河川課長名で各土木事務所長宛てで文化財保護を再度徹底するよう「河川工事にともなう遺跡調査について」の文書が出され、事業部局からも文化財保護の周知徹底がいわれるようになってきている。　（五島）

第2節　椿野遺跡のこれまでの調査

椿野遺跡はこれまでに、大きく分けて3度の調査が行われている（第1図）。調査地点としては、巨視的にみて、遺跡の北側と南側の2地点が調査されている。両地点で確認された内容については、おおよそ類似しており、弥生時代後期から古墳時代前期の基域を含む集落跡と中世の集落跡が発見されている。とくに、弥生時代と中世では、その範囲が200m以上に及ぶ大集落を形成していたことになる。

1981年5・6月には、浜松市遺跡調査会により、弥生時代の溝状遺構や焼土、古墳時代以降の小穴、溝状遺構と井戸跡が調査されている。

1982年12月～1984年には、静岡県埋蔵文化財調査研究所により、弥生～古墳時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構、小穴、土坑や方形周溝墓、奈良時代の溝状遺構、平安時代末以降の竪穴状遺構、溝状遺構、土坑、小穴や井戸跡が調査されている。

1985年2～6月には、浜松市遺跡調査会により、弥生時代の方形周溝墓と溝状遺構、古墳時代の溝状遺構、小穴や土坑、平安時代から江戸時代の掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、小穴や井戸跡が調査されている。

その他の時代に属する遺物や遺構も多少ではあるが確認されており、当遺跡には弥生時代以降、人々が連綿と歴史を刻んできたことが窺われる。

第3節　調査範囲と調査方法

今回の調査は、新堤の造成時に露出した遺跡部分に護岸ブロックを設置することになり、その工事に先立ち、遺構の確認された部分を調査することになった。その調査範囲については、およそ20m間隔で左岸堤防北側法面に土層観察帯を設定し、遺構の存在を確認した。新堤造成時に削られた堤防法面には、すでに大量の遺物の出土が認められ、その範囲は、浜松市遺跡調査会が1981年に調査した鉄塔の北側から西へおよそ170mに及んでいたが、土層の状態から、遺構が存在したのは、鉄塔からおよそ135mであった。

発見された遺物の多くは弥生土器の破片であるが、古墳時代から中世にかけての土器の破片も少なからず出土していた。また、当初は確認された遺構も3面に及び、第1面はおよそ80mの範囲で、第3面はおよそ130mの範囲で確認された。第2面については、層位的な把握がやや困難であったが、古墳時代以降の遺物がおよそ135mの範囲に比較的多く出土していたため、その範囲を調査対象とした。

その後、第2面については、調査を進めてゆく段階で新たにもう1面が下部から確認され、最終的には合計4面（中間層を除く）を調査することになった。

調査方法については、堤防法面に対して垂直に60cmの深度（水平幅135cm）で掘削する部分を調査することとなり（階段設置部分については垂直に85cm、水平幅で190cm）、堤防を法面に平行して、同様の深度で盛り土と中間層の除去を重機で行い、その後、遺構の確認を人力で行う平面調査を実施した。

第4節　調査の経過

平成4年12月1～16日　現地調査を行うにあたっての打ち合せ及び発掘資材の集積などの事前準備作業を行った。

平成4年12月17～24日　草刈り作業及び調査範囲を確定するため、およそ30m間隔で堤防法面に土層

観察帯の設定を行った。また、表土除去作業を行うにあたって、堤防法面に丁張を設置した。

平成４年12月25～28日　第１調査面まで、重機により表土除去を行った。

平成５年１月５～８日　表土除去作業を再開した。

平成５年１月11～22日　第１調査面の遺構の確認作業及び遺構の掘削を行い、南北に平行する近世以降の溝状遺構群を発見した。そして、これらの遺構及び法面から出土した遺物を測量し、写真撮影を行った。

平成５年１月26～27日　第２調査面まで、重機により中間層除去を行った。

平成５年１月28日～２月11日　第２調査面の遺構の確認及び遺構の掘削を行い、掘立柱建物跡や溝状遺構を多数発見した。そして、これらの遺構や出土した遺物を測量し、写真撮影を行った。

平成５年２月12～13日　第３調査面まで、重機により中間層除去を行った。

平成５年２月15～26日　第３調査面の遺構の確認及び遺構の掘削を行い、掘立柱建物跡、井戸跡や溝状遺構を多数発見した。そして、これらの遺構や出土した遺物を測量し、写真撮影を行った。

平成５年２月27日　第３調査面の写真測量及び写真撮影を行った。

平成５年３月１～４日　人力により、調査区の東側部分を第４調査面まで中間層除去を行い、遺構の確認及び遺構の掘削を行った。

平成５年３月５～９日　重機により、調査区の中央部及び西側部分を第４調査面まで中間層除去を行った。

３月９日には、加藤芳朗先生による地形や地質についての現地指導が行われた。

平成５年３月10～26日　第４調査面の遺構の確認及び遺構の掘削を行い、掘立柱建物跡、柵列、方形周溝墓、土坑や溝状遺構などが発見された。そして、これらの遺構や出土した遺物の一部を測量し、写真撮影を行った。

平成５年３月27日　第４調査面の写真測量及び写真撮影を行った。

平成５年３月28～30日　第４調査面の各遺構から出土した遺物を取り上げ、併せて、遺構の掘削を行い、完掘後、写真撮影を行った。

平成５年３月31日　発掘資材の整備などを行い、併せて、現地説明会の準備を行った。

平成５年４月３日　現地説明会を開催した。

平成５年４月１日～９月30日　現地での測量図や写真の資料化と出土遺物の水洗、注記、接合、復元、実測、写真撮影を行い、併せて実測図や写真はカード化した。そして、これらの資料を一般に公開するために発掘調査報告書とした編集を行った。

参考文献

川江秀孝他『椿野遺跡』1982　浜松市遺跡調査会
足立順司『椿野遺跡Ⅰ』1984　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
佐藤由紀男他『椿野遺跡』1985　浜松市遺跡調査会
佐野五十三「椿野遺跡」『年報１』1985　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

第３章　発見された遺構

遺構の細かな計測値については、表－２～９に示していることから、ここでは発見された遺構の性格、配置や時期的問題について主に述べる。その際の記述は時代を追って述べることにする全体図は、別図として巻末に付した。

第１節　弥生～古墳時代前期の遺構

第４調査面の平面図（第10・11図）に示した遺構のほとんどが、その出土遺物から弥生～古墳時代前期に属するものと考えて良いであろう。一部、SD 401・404・410とSE ９は出土遺物や層位的な関係から平安時代以降のものと考えられる。古墳時代前期の遺物は少量であり、第４調査面からはSD 407から出土したのみで、第３調査面のSX 301・302から多量の土器が出土しており、やや標高の高い東側に古墳時代前期の遺構が存在し、調査地点では、集落域の規模が縮小しているようである。

発見された遺構には、小穴、溝状遺構、土坑や焼土跡などがあるが、調査範囲が狭いため、その性格は不明な点が多く、小穴などは掘立柱建物跡になるかは疑問も多いと思われるが、建物跡の柱穴になるものが多いと推定して記述している。

（１）掘立柱建物跡

柱穴は、標高値の低い中央部のSD 412～416の周辺を除く調査区全域に存在し、黄褐色シルト質粘土層上面でプラン確認され、覆土には暗褐色粘土がつまっていたが、比較的大型の柱穴の覆土は黄褐色が強く、プランの確定がやや困難であった。

柱穴の形態には、大きく分けて、大型と小型のものが混在している。大型例の平面形態は、（長）方形と楕円形で、深く、小型例は円形で浅い、少数ではあるが、方形のものもある。大型例は、小型例の柱の抜き取り痕とも考えられるが、深さが深く、柱痕も確認される例があり、当初から大きく掘削されたものと理解される。また、大小の差は、平面形態に顕著に表れており、掘削道具の差がそうした形態差になっている可能性がある。基本的には、大型例は柱を頑丈に据えることを目的としていると思われ、上屋の構造やその用途の差が形態差に反映しているものと考えられ、大型例は重量物を収納する高床式倉庫の柱穴になるものが多いのではないかと推定される。

以下に、大小の例に分けて、掘立柱建物跡となる可能性の高い小穴群をまとめ、その桁行の柱間間隔と棟方位を示す。なお、P 4097～4100とP 4102～4105は東西に直線的に配置されており、柵列になる可能性もある。

＜東群＞

１：P 4030～4033（柱穴大型）	1.60－1.89－1.96	（柱間平均 1.82）	N－85°－E
２：P 4034～4037（柱穴大型）	1.42－1.40－1.44	（柱間平均 1.42）	N－69°－E
３：P 4057～4060（柱穴大型）	1.05－1.24	（柱間平均 1.15）	N－15°－E
４：P 4093～4096（柱穴大型）	1.70－1.36－1.68	（柱間平均 1.58）	N－86°－E
５：P 4046～4048（柱穴小型）	1.40－1.24	（柱間平均 1.32）	N－47°－E
６：P 4050～4052（柱穴小型）	1.59－1.50	（柱間平均 1.55）	N－87°－E
７：P 4073～4076（柱穴小型）	1.62－1.32－1.82	（柱間平均 1.59）	N－84°－E
８：P 4078・4079・4081（柱穴小型）	1.66－1.64	（柱間平均 1.65）	N－85°－E
９：P 4097～4100（柱穴小型）	1.52－1.12－1.68	（柱間平均 1.44）	N－89°－E

10：P4101～4105（柱穴小型）　1.46－1.55－1.40－1.77（柱間平均 1.55）　N－89°－E

＜西群＞

11：P4148～4152（柱穴大型）　1.52－1.47－1.47－1.44（柱間平均 1.48）　N－68°－E

12：P4158～4161（柱穴大型）　1.20－1.11－1.21　（柱間平均 1.17）　N－72°－E

13：P4127・4129・4130（柱穴小型）1.79－1.32　（柱間平均 1.56）　N－52°－E

14：P4139～4141（柱穴小型）　1.60－1.50　（柱間平均 1.55）　N－60°－E

15：P4142～4144（柱穴小型）　1.09－1.32　（柱間平均 1.21）　N－85°－E

16：P4153～4155（柱穴小型）　1.00－1.23　（柱間平均 1.12）　N－71°－E

1～10は集落の東側に位置し、棟方位はN－85°－E付近にまとまりがあり、1・4・6～9は近い時期に建てられた可能性がある。

11～16は西側に位置し、棟方位はN－65°－E付近にまとまりがあり、11・12・14・16は位置も近接しており、時期的に限定できるものと考えられる。ちなみに、それらの棟方位は、方形周溝墓の周溝の方位と一致している。

桁行の柱間の間隔は、2mを超えるものはないが、まとまりに欠け、柱穴が小型の建物跡は、柱間平均が1.5～1.6mの付近にまとまる傾向はある。

（2）竪穴住居跡

調査範囲が狭く、明瞭にその構造の理解できる例はないが、東端部で確認されたSX401（旧SX501）は、硬化面が面的に広く熱を受けて赤化しており、周囲は部分的に細溝（SD402）によって囲まれており、焼失した竪穴住居跡になるものと考えられる。床面上からは弥生時代後期の土器片が少量出土した。

調査区中央部と西端部からは焼土跡が発見され、SX402は26×13cmの楕円形で、SX403は32×26cmの楕円形を呈しており、炉跡になる可能性もあるが、周囲の施設は発見できなかった。

その他、周溝かと思われるような細溝も何条か発見されているが、確定できるまでにはいたらなかった。とくに、SD403・417・419は弧状であるが、周溝にしては幅が広く、別の遺構になるものと考えられる。

（3）環濠

調査区の中央部で、南北方向に走るV字溝（SD412）が発見された。幅は191cmで、深さ74cmと大型の溝状遺構で、その形状や、その東西の遺構の在り方から判断して環濠と考えられる。

最下層土は、青灰色に還元されており、遺物はほとんど出土しなかったが、1点大型の壺（第31図－1）が出土した。

中層からの遺物も少なく、上層からは炭化物と共に多量の弥生時代後期中葉の土器が出土した（第14図下段）。完形に復元された土器なども出土しているが、それらは割れた状態で散在して出土している。

西側上部にはテラスがあり、上層の状態（第12図）からすると再掘削されている可能性もある。

（4）方形周溝墓

調査区中央部のやや西寄りに、東西方向に平行して走る溝状遺構が4条発見されている（SD413～416）。昭和58年度の南隣の調査時には3基の方形周溝墓が連接して確認されており、それらに連続する周溝部と考えられる。

SD413とSD414は連接しており、そのコーナー部は不明であるが、コーナーが接するように復元すると、SD413は北側へ、SD414は南側へと折れるようである。SD415はSD416よりも古く、SD414に関連する施設の可能性もある。SD414は北側中段にテラスがあり、SD415はその続きとも考えられる。西側にはSF416の上層からは壺がまとまって出土しており（第15図）、周溝墓に関連した施設となるかもしれない。

周溝の断面形態は逆台形を呈するものが多く、覆土には炭化物を多く含み、SD 413～415からは土器片が部分的に集中して出土し、SD 414の底面からは大型の礫石が出土している。SD 416からは完形に近い穿孔された土器が、方台部から転落したかのように、横位または逆位の状態で出土している（第15図）。

環濠と方形周溝墓は、位置的にみて重複していたものと推定でき、出土遺物からすると、周溝墓は弥生時代後期後半とやや新しいが、周溝墓は環濠に沿うように構築されており、環濠が完全に埋没しきらないような状態の時に周溝墓が形成されたのではないかと思われる。

（5）溝状遺構

多数の溝状遺構が発見され、多くのものは南北方向に走っているが、その性格など不明な点が多い。そのため、ここでは主な例のみ取り上げる。

SD 407～409からは多量の土器が出土（第14図上段）したが、プランが不明瞭で、底面で確認された落ち込みを溝状遺構と報告している。SD 407からは古式土師器が出土しており、SF 413→SD 408→SD 407の順になるものと思われる。

SD 420の上層からは弥生時代後期の土器がまとまって出土（第16図上段）しており、断面形は逆台形を呈し、SD 419→SD 420の順に掘削されている。

西端部のSD 421～423も断面形態は逆台形を呈しており、SD 422は直角に曲がっている。

（6）土坑

調査区の東側から多くの土坑が発見されている。形態的には様々なものがあるが、平面形態は楕円形や不整形で、浅く丸底状で、弥生時代後期の土器片が少量出土する例が多い。その他、溝状のもの（SF 409・412）、大型で深いもの（SF 410・413・418）、底面が平坦で、壁が直立するもの（SF 402・415・417）などがある。

SF 404・418・419からは多量の弥生時代後期の土器が出土し（第16図）、第3調査面の東端部では、プランは不明瞭であったが、SX 301・302から古墳時代前期の土器が多量に出土している（第17図上段）。

土坑の覆土は暗褐色の強い有機質土で、SF 402・407からは骨片が出土している。

土坑の性格については不明な点が多いが、集落内での多くの場合は、廃棄坑（祭祀土坑を含む）、貯蔵穴、土器焼成坑、調理施設、墓坑などが考えられる。発見された土坑の多くは、建物跡の集中域に存在し、熱も受けた痕跡は認められないことから、浅いものの多くは廃棄坑になるものと思われる。SF 410はかなり深く、貯蔵穴に、SF 417は方形周溝墓に近接しており、墓坑になる可能性もある。

（7）その他の遺構

第3調査面の東端部のSX 301の東側から、敷石状の遺構が発見されている（第17図下段右）。拳大の礫がほぼ水平に敷かれ、少量の土器片が礫の間から出土した。SX 301・302とほぼ同一レベルで確認されており、古墳時代前期に属するものと思われる。

第2節　平安時代～中世の遺構

古墳時代中期～奈良時代の遺物は、微量出土しているが、遺構としては確認できなかった。

平安時代の遺構には、SX 201がある。底面は平坦で浅く、竪穴状遺構になるかもしれない。灰釉陶器、土師器や土製支脚が炭化物と共に多く出土している（第18図下段右）。

第2・3調査面の平面図（第5～9図）に示した遺構の多くと第4調査面の遺構の一部が、溝状遺構などから出土した遺物から中世に属するものが多いと考えられる。発見された主な遺構には、小穴、溝状遺構、井戸跡などがある。小穴については、柵列になるものも多いと思われるが、弥生～古墳時代の遺構と同様に柱穴になるものが多いと推定して記述している。

（1）掘立柱建物跡

第2調査面からは、中央やや東寄りの部分に集中し、第3調査面では、東側を除く全域から発見されている。

柱穴の覆土は、灰褐色の粘土で、比較的プラン確認が容易であった。柱穴の大きさは様々であるが、それほど大小の明瞭な差はない。平面形態は、円形のものが多いが、（長）方形のものも一部ある。

以下に、掘立柱建物跡となる可能性の高い小穴群をまめ、その柱間間隔と棟方位を示す。

1：P2005～2007・3006　1.31－1.51－1.91　（柱間平均 1.58）N－58°－E
2：P2009～2013　（方形少）1.34－1.31－1.14－1.54　（柱間平均 1.33）N－39°－E
3：P2016～2019　（方形多）2.20－2.07－1.66　（柱間平均 1.98）N－78°－E
4：P2020～2024・3005・3006　1.54－1.28－1.21－1.51－1.60　1.46（平均 1.43）N－81°－W
5：P2034～2038　（方形少）1.26－1.25－1.17－1.23　（柱間平均 1.23）N－68°－E
6：P3014～3016　（柱穴小型）1.47－1.48　（柱間平均 1.48）N－84°－E
7：P2046・3019～3021　1.46－1.52－1.49　（柱間平均 1.49）N－87°－E
8：P2031・2045・2048・3022～3024　（柱穴小型、方形少）1.06－1.04－0.95－0.82－1.21　（柱間平均 1.02）N－72°－E
9：P2049・2053・3032・3033　1.16－1.09－1.45　（柱間平均 1.23）N－33°－E
10：P3037～3040　1.00－0.74－1.16　（柱間平均 0.97）N－64°－E
11：P3052～3055　1.03－0.66－0.97　（柱間平均 0.89）N－81°－W
12：P3057～3059　（柱穴大型）1.94－1.86　（柱間平均 1.90）N－87°－E
13：P3070～3074　（方形）2.44－2.04－1.74－2.28　（柱間平均 2.13）N－83°－E
14：P3077～3080　（柱穴大型）2.29－1.79－1.52　（柱間平均 1.87）N－75°－E
15：P3081～3085　（柱穴小型）1.24－1.41－1.30－1.05　（柱間平均 1.25）N－90°－E
16：P3090～3093　（柱穴小型）1.50－1.52－1.17　（柱間平均 1.40）N－55°－E
17：P3109～3113　1.34－1.13－1.10－0.98　（柱間平均 1.14）N－72°－E
18：P3126・3128・3130・3132・3133　（柱穴小型）1.62－1.62－2.26－1.71　（柱間平均 1.80）N－80°－E
19：P3112・3134～3137（柱穴大型）1.40－1.23－1.19－1.03　（柱間平均 1.21）N－87°－E
20：P3147～3149　（柱穴大型）2.10－2.26　（柱間平均 2.18）N－88°－W

柱穴の大きさが大きいものほど、柱間の間隔が広い傾向はあるが、全てにあてはまることではない。棟方位は東西方向を向くものがほとんどで、その他はまとまりに欠け、東側（北優先）に少しずつ振れている。東西棟の建物跡は、南北方向の溝状遺構に直交しており、そうした溝状遺構に囲まれていたものと考えられる。

（2）溝状遺構

第2調査面のSD207・212～214は近世以降に属するものと考えられ、次項で述べることにする。その他の溝状遺構の多くは、出土遺物から中世に属するものと考えられるが、SD205・211・212は層位的な関係からすると比較的新しいが、以下にまとめて述べる。

第4調査面のSD401は、旧河道の左岸肩部に位置し、底面は凹凸が著しく、覆土は青灰色に還元されている。SD404は幅が約2.4mと広く、断面形態はU字形を呈し、覆土には、黄褐色土と灰白色土のブロックが含まれ、人為的に埋め戻されている。出土遺物には、山茶碗などがあり、規模からすると居館の周溝となる可能性もある。SD410の覆土は褐灰色土で、中世に属する可能性が高い。

第3調査面では、SD304を除き、南北方向の溝状遺構群が30～50m間隔で発見され、その間に小穴群

がまとまっている。出土遺物には、中世の遺物が多い。

調査区の東側に、SD 301～303があり、SD 302→301の順に掘削され、SD 301は別の溝状遺構と重複している。SD 302は断面形態が逆台形を呈し、上層から拳大の礫や土器片がまとまって出土しており（第18図左上）、下層の覆土は青灰色に還元されていた。SD 303も断面形態は逆台形で、灰釉陶器や土師器が少量出土している。

調査区の中央やや東寄りにSD 304・305があり、断面形態はU字形で、SD 304は、南側の法面部分に拳大の礫が集中しており、陶器が出土した。SD 305からは山茶碗が出土している。

調査区中央やや西寄りには、SD 306～310が集中しており、SD 310は断面形態が逆台形で深く、多量の炭化物と共に山茶碗や土鍋が出土している（第18図左下）。その他は、断面形態はU字形に近く、何度か再掘削されているようである。SD 306の肩部には杭列が並び、拳大の礫が多量に出土している。SD 307・308からも山茶碗や古瀬戸と共に拳大の礫が多く出土した。

第2調査面では、東端部でSD 201～205が発見されている。SD 203・204は断面形態は逆台形で、覆土は暗褐色土で、比較的古いものと思われる。SD 205は幅が約3.5mと広く、底面は平坦である。層位的にはかなり新しいものである。

SD 206からは拳大の礫が多量に出土し、SD 208は、SD 301などと重複しており、プランが不明瞭であった。SD 209も重複しており、そのプランは不明瞭であったが、SD 303→SD 209→SD 210→SD 102の順に掘削されたようである。

SD 210は比較的幅広く、底面は平坦で、覆土には焼土、炭化物や礫を多量に含み、古瀬戸や土鍋が多く出土している。SD 211からは、礫や山茶碗が少量出土した。

（3）井戸跡

井戸跡は9基が発見されたが、SE 2～5・8は法面にその下部のみが残ったため、層位的な確認ができなかった。出土遺物は、中世の土器が多いが、SE 1・8からは近世の土器が、SE 6からは古墳時代後期の土器が出土している。SE 1・6・7・9は調査区が狭く、完掘できなかったが、法面の井戸跡の底からは曲物が出土する例が多かった。

井戸跡は、SE 1・3～5・9とSE 6～8のようにまとまって発見されており、2基が近接している例も多い。また、井戸跡は平行して直線的に配列している。調査地点は、標高4m前後に湧水点があり、土層の状態からすると、周辺は井戸の設置場所には困らなかったであろうと思われる。しかし、調査範囲内に、井戸跡は計画的に設置されたかのように配置されている。そうした状況からすると、これらの井戸跡は、ある程度の時間幅の中で連続的に設置されたものと考えられ、出土遺物などからすると中世以降のものである可能性が高い。SE 1については後述するが、その他の井戸跡には枠などの施設はなく、SE 6の上層から大型の礫が出土したのみであった（第19図下段）。平面形態は、ほとんどが楕円形であるが、SE 3のみ長方形であった。

第3節　近世以降の遺構

確実に時代を決定できる根拠は乏しいが、第2調査面で確認された遺構内から、中世でも比較的新しい時期に属する土器が多く出土していることから、第1および第2調査面（第4～6図）で確認された遺構が近世以降に属するものと理解される。発見された遺構には、溝状遺構、井戸跡や溜池状遺構などがある。

（1）溝状遺構

第2調査面では、出土遺物や層位的な検討からSD 207・213・214が近世以降と考えた。SD 207・213・

214の断面形態はV字状を成し、SD213・214はかなり深く、SD213の上層部からは礫が多量に出土し、暗渠となっていたものと思われる。SD212からも多量の拳大の礫が出土し（第18図右上）、同様に暗渠と考えられる。

第1調査面には、南北方向のSD102～113があり、SD102を除く溝状遺構群は、幅約50cm、深さ約15cmで、断面形態は逆台形もしくはU字形を成し、各々は約1.5m間隔で、N－10°－W付近で平行している。これらの溝状遺構の在り方は、現代の畑で見られる畝間と類似している。東側のSD102からは、拳大の礫が上層から出土した（第19図中段）。その形態は不明瞭な点が多いが、配置から推測すると暗渠として機能していたものと思われる。

東西方向のSD101は、南北方向の溝状遺構群より層位的に下位に位置し、断面形態はU字形で、中央部にはテラスを有し、杭列が確認された。

（2）井戸跡

第2調査面中央部からSE1が発見された。形態は円形に近く、埋没した後に周囲を囲んでいた石組が内部に落ち込んでいる（第19図上段）。礫には拳から人頭大の大きさのものがあり、円礫や角礫（チャート）がある。それらの礫に混じって、天目茶碗や尾呂型茶碗などが出土している。

（3）溜池状遺構

第2調査面中央部からSX202が発見された。SE1よりも新しく、深さは65cmで、側面と底面に保水のために灰白色粘土が貼られており、溜池状の施設と考えられる。底面は幅約1mの長方形に区切られ、西端部からは多数の杭？が発見されている。覆土は単一で、人為的に埋め戻されているものと考えられる。

表－2　溝状遺構観察表

単位はcm、（ ）は推定値

遺構名	旧遺構名	幅	深さ	方　位	遺構名	旧遺構名	幅	深さ	方　位
SD 101	SD 8	76	37	N－79°－E	SD 305	SD 406	77	20	N－ 2°－W
SD 102	SD 9	218	80	N－ 6°－W	SD 306	SD 407 A	180	37	N－10°－E
SD 103	SD 10	66	21	N－10°－W	SD 307	SD 407 B	166	16	N－ 3°－W
SD 104	SD 11	53	17	N－ 5°－W	SD 308	SD 408 A	137	24	N－ 2°－W
SD 105	SD 12	51	12	N－ 9°－W	SD 309	SD 409 A	125	33	N－ 2°－E
SD 106	SD 13	55	13	N－ 9°－W	SD 310	SD 409 B	122	39	N－ 5°－W
SD 107	SD 14	48	13	N－13°－W	SD 311	SD 410	128	40	N－12°－W
SD 108	SD 15	47	14	N－13°－W	SD 401	SD 601	228	93	N－21°－W
SD 109	SD 16	53	14	N－14°－W	SD 402	SD 502	30	23	N－89°－E
SD 110	SD 17	55	17	N－11°－W	SD 403	SD 503	46~59	32	東西弧状
SD 111	SD 18	57	16	N－10°－W	SD 404	SD 501	239	49	N－62°－E
SD 112	SD 19	63	14	N－ 4°－W	SD 405	SD 505	25	16	N－36°－E
SD 113	SD 20	42	12	N－15°－W	SD 406	SD 507	83	12	N－ 7°－W
SD 201	SD 201	132	33	N－ 7°－W	SD 407	SD 509	106	35	N－34°－W
SD 202	SD 202	132	22	N－16°－W	SD 408	SD 525	149	34	N－ 9°－E
SD 203	SD 203	60	45	N－31°－W		SF 510			
SD 204	SD 204	50	17	N－19°－W	SD 409	SD 510	59	20	N－29°－E
SD 205	大溝	350	67	N－11°－E	SD 410	－	37	34	N－79°－E
SD 206	SD 208	60	30	N－15°－W	SD 411	－	24	7	N－60°－E
SD 207	－	25	11	N－14°－W	SD 412	SD 512	191	74	N－16°－W
SD 208	SD 205	116	18	N－12°－W	SD 413	SD 513 B	－	35	N－68°－E
SD 209	SD 9	178	60	N－ 6°－W	SD 414	SD 513 A	100	72	N－74°－E
SD 210	SD 206	166	75	N－18°－W	SD 415	SD 522	－	28	N－70°－E
	SD 403				SD 416	SD 523	65	41	N－65°－E
SD 211	SD 207	54	50	N－16°－W	SD 417	SD 515	50	18	東西弧状
SD 212	SD 210	215	35	N－ 5°－W	SD 418	SD 524	29	55	N－76°－E
SD 213	SD 211	53	20	N－ 6°－W	SD 419	SD 516	30~76	33	東西弧状
SD 214	SD 212	74	50	N－ 7°－W	SD 420	SF 525	80	48	N－ 8°－W
SD 301	SD 401	218	29	N－11°－W	SD 421	SD 517	45	22	N－18°－W
SD 302	SD 401 B	121	102	N－11°－W	SD 422	SD 518	148	52	コーナー
SD 303	SD 402	105	57	N－13°－W	SD 423	SD 519	96	38	N－31°－W
SD 304	SD 405	82	27	N－73°－E					

表－3　土坑観察表

単位はcm、（ ）は推定値

遺構名	旧遺構名	形　態	長径	短径	深さ	備　　考
SF 401	SF 519	－	89	50以上	40	法面
SF 402	SF 501	－	133	65以上	26	壁面直立、北側消滅
SF 403	SF 516	不整形	206	42以上	22	土坑重複？、北側消滅
	SF 517					
SF 404	SF 502	不整形	(258)	138	34	土坑重複？
SF 405	SF 526	長方形	95	68	39	法面
SF 406	SF 507	楕円形	(169)	124	26	SF 406→SD 404
SF 407	SF 508	楕円形	222	136	47	溝？、SF 408→SD 404
SF 408	SD 504	－	234以上	34以上	15	
SF 409	SD 506	楕円形	(226)	116	21	
SF 410	SF 511	楕円形	177	130	88	壁面直立
SF 411	SF 509	楕円形	109	84	23	
SF 412	SD 514	楕円形	(240)	74	11	
SF 413	SD 509	－	255以上	172	76	北側消滅
SF 414	SF 512	楕円形	84	(60)	20	
SF 415	SF 520	不整形	東西150	－	40	別遺構重複？、壁面直立
SF 416	SF 524	－	－	－	備考	北15南30、溝、土坑重複
SF 417	SF 522	長方形？	東西130	－	43	壁面直立
SF 418	SD 520	不整形	300	160	74	土器多量出土
SF 419	SD 520 B	－	－	－	3	

表－4　井戸跡観察表

底面高は標高値（m）、その他はcm、（ ）は推定値

遺構名	旧遺構名	形　態	長径	短径	底面高	備　　考
SE 1	SD 209	－	300	－	－	未完掘、円形？、周囲石組
SE 2	SE 8	円　形	77	74	3.27	法面、亀出土
SE 3	SE 5	長方形	112	75	3.72	法面
SE 4	SE 6	楕円形	89	68	4.09	法面
SE 5	－	楕円形	114	93	4.38	法面
SE 6	SE 401	楕円形	189	154	－	未完掘、SE 6→SE 7
SE 7	SE 402	楕円形	(194)	(168)	－	未完掘、SE 6→SE 7
SE 8	SE 403	楕円形	124	109	3.88	法面
SE 9	SE 410	楕円形	97	88	－	未完掘

表－5　小穴観察表(1)

底面高は標高値（m）、その他はcm、（ ）は推定値

小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考	小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考
P 2001	楕円形	26	23	7.45	旧 P 3	P 2037	楕円形	29	26	7.06	旧 P 39
P 2002	楕円形	25	20	7.45	旧 P 2	P 2038	円形	26	26	6.78	旧 P 40・41・418
P 2003	方形	26	25	7.46	旧 P 1	P 2039	円形	22	21	6.98	旧 P 40
P 2004	円形	18	17	7.45	旧 P 4	P 2040	円形	19	18	7.15	旧 P 38
P 2005	円形	28	27	7.00	旧 P 5	P 2041	円形	24	22	7.21	旧 P 37
P 2006	円形	28	26	6.88	旧 P 6・403	P 2042	楕円形	40	35	6.87	旧 P 32
P 2007	円形	26	26	6.92	旧 P 9・404	P 2043	円形	21	20	7.20	旧 P 33
P 2008	楕円形	26	23	7.23	旧 P 7	P 2044	不整形	73	45	6.96	旧 P 35、複数穴？
P 2009	方形	28	26	7.25	旧 P 8	P 2045	円形	36	36	6.50	旧 P 61・414
P 2010	円形	21	21	7.16	旧 P 10	P 2046	長方形	51	18	6.77	旧 P 48・415、段
P 2011	方形	34	34	7.01	旧 P 51、下部円形	P 2047	楕円形	27	22	7.06	旧 P 47
P 2012	楕円形	25	22	7.21	旧 P 14	P 2048	楕円形	36	29	6.82	旧 P 46
P 2013	楕円形	38	22	7.13	旧 P 16	P 2049	楕円形	50	44	6.93	旧 P 42、段
P 2014	方形	25	22	7.02	旧 P 12	P 2050	円形	29	26	6.91	旧 P 43
P 2015	長方形	41	31	6.99	旧 P 11・407	P 2051	楕円形	32	26	6.95	旧 P 44
P 2016	楕円形	35	32	7.15	旧 P 13、段	P 2052	楕円形	31	23	6.82	旧 P 60
P 2017	長方形	32	26	7.13	旧 P 18	P 2053	円形	37	34	6.94	旧 P 45・419
P 2018	楕円形	37	25	7.07	旧 P 23	P 2054	円形	24	24	6.90	
P 2019	方形	38	36	6.94	旧 P 25、柱材有	P 2055	円形	26	24	6.89	
P 2020	楕円形	24	20	7.22	旧 P 15	P 3001	円形	22	20	6.97	旧 P 401
P 2021	円形	29	27	7.04	旧 P 17	P 3002	長方形	(45)	(32)	6.95	旧 P 401・4Ⅰ、柱痕16×10
P 2022	方形	26	26	7.15	旧 P 19	P 3003	楕円形	24	20	6.95	旧 P 405
P 2023	円形	28	28	7.09	旧 P 26	P 3004	楕円形	24	18	7.03	
P 2024	円形	29	29	7.10	旧 P 28、柱痕径14×12	P 3005	円形	19	19	6.98	
P 2025	円形	22	22	7.26	旧 P 21	P 3006	円形	19	17	7.42	
P 2026	円形	27	25	7.07	旧 P 20、柱痕径13	P 3007	円形	30	28	7.28	旧 P 408
P 2027	楕円形	33	28	7.12	旧 P 22、柱痕径14	P 3008	楕円形	28	18	7.08	
P 2028	円形	26	25	6.95	旧 P 24	P 3009	円形	18	16	7.04	
P 2029	楕円形	22	18	7.27	旧 P 27	P 3010	楕円形	25	20	7.08	
P 2030	円形	22	22	7.18	旧 P 50	P 3011	楕円形	31	27	6.82	旧 P 409
P 2031	円形	28	26	7.04	旧 P 49	P 3012	楕円形	38	32	6.86	
P 2032	円形	27	(24)	7.27	旧 P 30	P 3013	円形	28	27	6.96	
P 2033	楕円形	24	19	7.23	旧 P 29	P 3014	楕円形	20	17	6.82	
P 2034	円形	27	27	7.05	旧 P 31	P 3015	楕円形	23	20	6.89	
P 2035	方形	36	36	7.02	旧 P 34	P 3016	円形	21	19	6.84	旧 P 416
P 2036	方形	31	31	7.01	旧 P 36						

表－8　小穴観察表(2)

底面高は標高値（m）、その他はcm、（ ）は推定値

小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考	小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考
P 3017	楕円形	33	29	6.77	旧 P 413	P 3056	円形	19	17	6.55	
P 3018	長方形	19	15	6.88		P 3057	楕円形	50	46	6.67	旧 P 425、柱痕径26
P 3019	楕円形	40	35	6.87	旧 P 32	P 3058	楕円形	41	36	6.83	
P 3020	円形	21	21	7.02		P 3059	楕円形	33	29	6.83	
P 3021	楕円形	28	26	6.99		P 3060	円形	30	29	6.89	
P 3022	長方形	(30)	22	6.79	旧 P 411	P 3061	楕円形	34	30	6.76	旧 P 426
P 3023	円形	21	20	7.01		P 3062	楕円形	19	16	6.71	
P 3024	楕円形	35	28	6.65		P 3063	円形	23	23	6.84	旧 P 427
P 3025	長方形	41	31	6.56	旧 P 412	P 3064	円形	22	21	6.57	
P 3026	円形	22	20	7.00		P 3065	円形	28	27	6.50	旧 P 428
P 3027	円形	18	18	7.01		P 3066	楕円形	27	23	6.50	
P 3028	円形	19	17	6.96		P 3067	円形	23	23	6.68	
P 3029	楕円形	30	26	6.76	旧 P 417	P 3068	円形	27	26	6.52	
P 3030	楕円形	27	23	7.16		P 3069	円形	28	26	6.54	
P 3031	楕円形	32	26	7.05		P 3070	長方形	49	34	6.62	
P 3032	楕円形	35	29	6.99		P 3071	方形	34	31	6.60	旧 P 431
P 3033	円形	31	30	6.80		P 3072	長方形	29	25	6.57	
P 3034	方形	(31)	29	6.94		P 3073	楕円形	25	20	6.55	
P 3035	楕円形	25	20	6.93		P 3074	楕円形	30	25	6.70	旧 P 438
P 3036	円形	23	20	6.85		P 3075	長方形	21	16	6.57	
P 3037	円形	26	25	6.81		P 3076	円形	22	22	6.52	
P 3038	楕円形	23	20	6.93		P 3077	楕円形	51	(37)	6.51	
P 3039	楕円形	40	35	6.74	旧 P 420 柱痕径16	P 3078	楕円形	45	34	6.56	
P 3040	円形	16	16	6.91		P 3079	円形	31	31	6.54	旧 P 436
P 3041	楕円形	45	35	6.82	旧 P 421	P 3080	円形	26	24	6.61	
P 3042	円形	34	31	6.87	旧 P 422	P 3081	円形	21	21	6.63	
P 3043	楕円形	43	38	6.85	段有	P 3082	円形	19	18	6.67	旧 P 430
P 3044	方形	27	27	6.88		P 3083	円形	25	25	6.63	
P 3045	円形	24	23	6.90		P 3084	円形	25	23	6.55	
P 3046	円形	29	28	6.88		P 3085	楕円形	52	23	6.43	柱痕径19
P 3047	楕円形	32	(29)	6.92		P 3086	円形	16	16	6.64	
P 3048	円形	29	28	6.84		P 3087	楕円形	29	25	6.55	
P 3049	円形	27	25	6.74	旧 P 424	P 3088	円形	27	26	6.61	
P 3050	楕円形	25	22	6.75		P 3089	円形	22	22	6.51	
P 3051	円形	34	31	6.99		P 3090	円形	21	20	6.83	
P 3052	円形	32	31	6.82	旧 P 423	P 3091	楕円形	(28)	24	6.39	旧 P 429
P 3053	円形	24	24	6.77		P 3092	円形	(25)	25	6.48	
P 3054	円形	23	22	6.89		P 3093	楕円形	21	16	6.59	
P 3055	円形	21	20	6.86		P 3094	円形	21	20	6.60	

表－7　小穴観察表(3)

底面高は標高値（m）、その他はcm、（ ）は推定値

小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考
P 3095	楕円形	28	20	6.53	
P 3096	方形	24	23	6.56	旧 P 432
P 3097	楕円形	22	18	6.40	旧 P 433
P 3098	楕円形	25	20	6.63	
P 3099	円形	21	21	6.66	旧 P 435
P 3100	長方形	20	16	6.61	旧 P 437
P 3101	楕円形	17	14	6.63	
P 3102	楕円形	16	14	6.74	
P 3103	長方形	21	18	6.60	
P 3104	円形	39	37	6.55	
P 3105	長方形	35	25	6.70	
P 3106	円形	20	18	6.73	旧 P 439
P 3107	円形	18	16	6.53	旧 P 440
P 3108	楕円形	29	26	6.86	旧 P 442
P 3109	円形	36	35	6.47	旧 P 441
P 3110	方形	29	(27)	6.57	
P 3111	楕円形	32	25	6.58	旧 P 447
P 3112	円形	49	49	6.60	旧 P 449
P 3113	楕円形	38	32	6.80	
P 3114	円形	24	24	6.68	
P 3115	円形	32	30	6.83	
P 3116	方形	22	21	6.42	旧 P 443
P 3117	方形	21	20	6.61	旧 P 444
P 3118	方形	19	19	6.57	旧 P 445
P 3119	長方形	37	24	6.56	
P 3120	楕円形	30	22	6.85	旧 P 448
P 3121	楕円形	27	24	6.83	
P 3122	楕円形	32	27	6.89	
P 3123	方形	25	24	6.55	
P 3124	円形	23	22	6.73	
P 3125	楕円形	46	39	6.62	
P 3126	楕円形	25	22	6.66	
P 3127	円形	20	19	6.84	
P 3128	円形	18	17	6.64	
P 3129	楕円形	31	29	6.55	
P 3130	円形	17	16	6.66	
P 3131	楕円形	42	34	6.56	柱痕径14
P 3132	円形	22	21	6.56	
P 3133	円形	20	19	6.42	
P 3134	鍵穴形	61	32	6.43	

小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考
P 3135	円形	46	46	6.63	柱痕径23
P 3136	円形	53	52	6.58	旧 P 457、柱痕径24
P 3137	楕円形	66	(51)	6.34	
P 3138	円形	17	16	6.53	
P 3139	円形	22	22	6.53	
P 3140	楕円形	36	25	6.51	段有
P 3141	楕円形	44	34	6.75	
P 3142	円形	29	29	6.72	
P 3143	不整形	54	(33)	6.47	
P 3144	円形	29	28	6.47	
P 3145	不整形	47	28	6.57	旧 P 452、小穴重複
P 3146	楕円形	39	31	6.54	
P 3147	円形	40	40	6.47	旧 P 453
P 3148	円形	35	32	6.38	旧 P 454
P 3149	楕円形	57	48	6.23	旧 P 536
P 3150	楕円形	24	21	6.61	
P 3151	方形	74	71	6.27	旧 P 455・535
P 3152	円形	20	19	6.54	
P 3153	円形	24	23	6.56	旧 P 456
P 4001	方形	(68)	(61)	6.48	旧 P 502
P 4002	楕円形	58	(43)	6.64	旧 P 501
P 4003	長方形	26	18	6.84	旧 P 516
P 4004	楕円形	37	29	6.82	旧 P 517
P 4005	長方形	39	30	6.95	旧 P 518
P 4006	長方形	23	18	6.90	
P 4007	楕円形	26	24	6.98	
P 4008	楕円形	36	(32)	6.92	
P 4009	長方形	50	(34)	6.89	旧 P 504
P 4010	楕円形	37	30	6.95	旧 P 503
P 4011	－	－	80	6.83	旧 P 519・SF 518
P 4012	長方形	25	20	6.75	
P 4013	方形	24	22	6.70	
P 4014	長方形	25	20	6.95	
P 4015	長方形	37	26	6.97	旧 P 520
P 4016	円形	21	21	7.00	旧 P 521
P 4017	方形	54	50	6.96	旧 P 515
P 4018	方形	49	38	6.78	柱痕径20

表－8　小穴観察表(4)

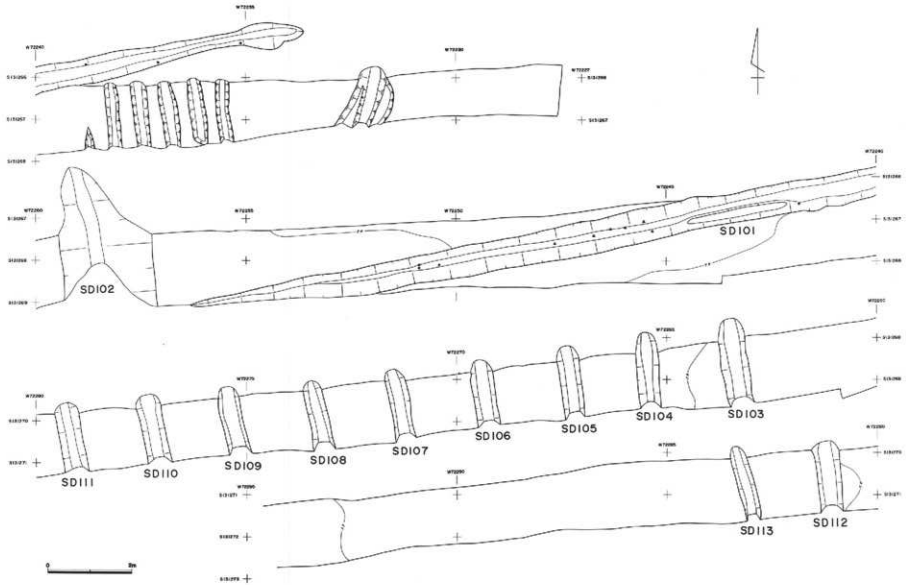
底面高は標高値（m）、その他はcm、（ ）は推定値

小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考	小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考
P 4019	円形	24	23	6.87	旧 P 522	P 4057	鍵穴形	50	39	6.47	旧 P 514、段
P 4020	不整形	41	34	6.81	旧 P 575、柱痕径15	P 4058	不整形	66	51	6.36	柱痕径14
P 4021	楕円形	35	27	6.92		P 4059	鍵穴形	71	34	6.38	旧 P 556、段
P 4022	不整形	93	34	6.37	旧 SF 527	P 4060	楕円形	45	40	6.36	旧 P 508
P 4023	楕円形	60	41	6.96	旧 P 574	P 4061	楕円形	31	25	6.57	
P 4024	方形	23	22	6.91		P 4062	楕円形	30	25	6.59	
P 4025	円形	22	21	6.94		P 4063	円形	18	18	6.75	
P 4026	楕円形	27	(20)	6.92	旧 P 523	P 4064	円形	18	17	6.65	
P 4027	方形	26	24	6.45		P 4065	長方形	81	40	6.32	旧 P 568
P 4028	長方形	(36)	29	6.71	旧 P 573	P 4066	円形	20	19	6.62	
P 4029	円形	(30)	27	6.95	旧 P 505	P 4067	鍵穴形	71	31	6.15	旧 P 509
P 4030	長方形	36	29	6.82	旧 P 506	P 4068	楕円形	44	37	6.39	旧 P 551
P 4031	長方形	58	32	6.61	旧 P 512	P 4069	楕円形	46	42	6.54	
P 4032	長方形	(45)	38	6.63	旧 P 555	P 4070	楕円形	19	17	6.48	
P 4033	長方形	49	40	6.24	旧 P 553	P 4071	長方形	－	26	6.44	旧 P 510
P 4034	長方形	62	48	6.29	旧 P 511、柱痕径18	P 4072	方形	16	16	6.22	旧 P 550
P 4035	楕円形	81	46	6.37	旧 P 554	P 4073	円形	23	22	6.09	
P 4036	楕円形	66	42	6.18	旧 P 513	P 4074	楕円形	28	22	6.25	旧 P 565
P 4037	長方形	60	41	6.24	旧 P 571	P 4075	円形	30	29	6.24	
P 4038	円形	21	21	6.58	柱痕径13	P 4076	楕円形	55	44	6.15	旧 P 526
P 4039	円形	18	17	6.78	旧 P 4 H	P 4077	長方形	37	30	5.95	旧 P 563
P 4040	円形	26	24	6.77		P 4078	方形	25	24	6.26	旧 P 562
P 4041	円形	31	31	6.77		P 4079	方形	29	27	6.11	
P 4042	円形	32	30	6.70		P 4080	楕円形	27	22	6.38	旧 P 566
P 4043	楕円形	50	43	6.63	旧 P 572	P 4081	円形	39	37	6.03	旧 P 564
P 4044	楕円形	27	23	6.72		P 4082	楕円形	53	(42)	6.29	
P 4045	楕円形	(42)	20	6.51	旧 P 507	P 4083	楕円形	(77)	55	6.27	
P 4046	円形	24	24	6.42		P 4084	楕円形	18	15	6.32	
P 4047	楕円形	28	20	6.49		P 4085	方形？	30	－	6.31	
P 4048	楕円形	36	31	6.62		P 4086	楕円形	(32)	(22)	6.24	旧 P 523、柱痕径16
P 4049	楕円形	47	32	6.14	旧 P 570	P 4087	楕円形	(42)	27	6.40	
P 4050	楕円形	31	28	6.64		P 4088	楕円形	34	30	6.36	
P 4051	円形	28	27	6.70	旧 P 552	P 4089	楕円形	(31)	24	6.41	
P 4052	楕円形	30	22	6.70		P 4090	楕円形	176	(63)	6.13	旧 P 561、土坑？
P 4053	楕円形	20	16	6.47		P 4091	方形	26	25	6.20	
P 4054	円形	19	18	6.58		P 4092	－	93	－	6.14	旧 P 559、小穴重複？
P 4055	楕円形	(39)	30	6.69							
P 4056	楕円形	28	24	6.73	旧 P 513						

表－9　小穴観察表(5)

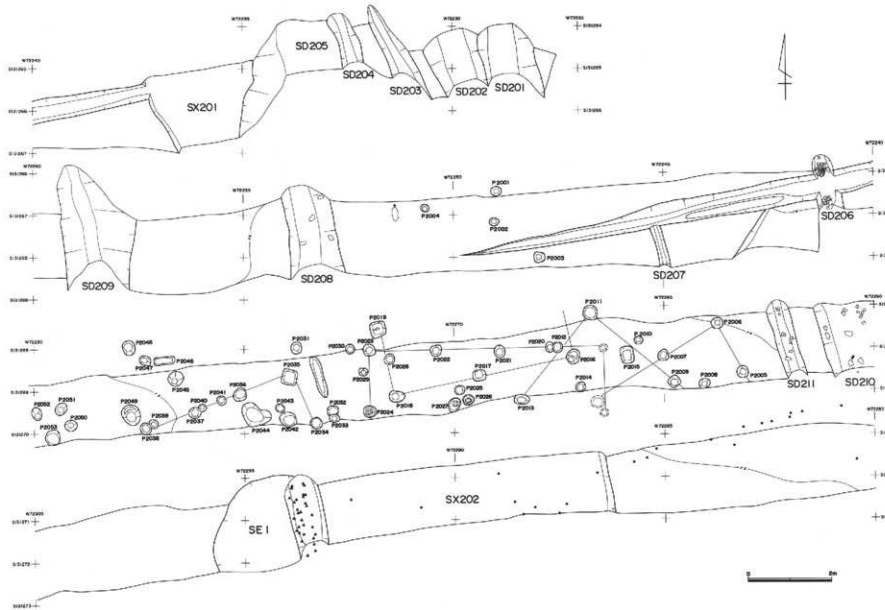
底面高は標高値（m）、その他はcm、（ ）は推定値

小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考	小穴番号	形態	大きさ 長径	大きさ 短径	底面高	備考
P 4093	楕円形	60	55	5.75	旧 P 525	P 4129	方形	32	32	6.11	
P 4094	楕円形	84	38	5.80		P 4130	円形	18	16	6.15	
P 4095	楕円形	89	53	6.18	旧 P 548、段	P 4131	長方形	27	22	6.14	
						P 4132	円形	25	24	6.18	
P 4096	不定形	80	56	6.03	旧 P 540、段	P 4133	円形	23	22	6.15	
P 4097	楕円形	42	35	6.20	旧 P 524	P 4134	不整形	82	66	6.03	旧 P 557
P 4098	円形	30	29	6.15	旧 P 527	P 4135	楕円形	46	15	5.99	
P 4099	円形	31	30	6.22		P 4136	円形	19	19	6.08	
P 4100	円形	29	27	6.13	旧 P 538	P 4137	楕円形	32	28	6.02	
P 4101	円形	32	32	6.03		P 4138	楕円形	51	32	6.18	小穴重複？
P 4102	円形	24	24	6.37		P 4139	円形	17	16	6.29	
P 4103	円形	34	31	6.13	旧 P 542	P 4140	楕円形	32	23	6.20	
P 4104	円形	50	48	6.14	旧 P 558	P 4141	円形	23	23	6.13	
P 4105	円形	32	31	6.16		P 4142	楕円形	49	35	6.03	旧 P 528、段
P 4106	—	—	—	6.31	旧 P 560	P 4143	楕円形	39	31	6.24	
P 4107	円形	27	26	6.28		P 4144	楕円形	44	35	6.19	旧 P 531
P 4108	円形	39	37	6.09	旧 P 539	P 4145	楕円形	41	35	6.17	旧 P 529、柱痕径17
P 4109	楕円形	33	28	6.27	旧 P 543	P 4146	円形	25	25	6.27	
P 4110	方形	42	41	6.20	旧 P 549、柱痕径15	P 4147	方形	24	22	6.21	
P 4111	長方形	26	13	6.23		P 4148	方形	66	60	6.00	旧 P 530
P 4112	長方形	—	61	6.31	旧 P 537	P 4149	長方形	70	53	5.83	柱痕径17
P 4113	円形	(34)	33	6.22		P 4150	長方形	72	57	5.91	柱痕径11、段
P 4114	楕円形	31	27	6.29		P 4151	長方形	61	53	5.92	柱痕径18
P 4115	楕円形	(30)	(28)	6.42		P 4152	方形	57	52	5.86	旧 P 532、基礎石
P 4116	長方形	55	41	6.14		P 4153	楕円形	30	22	5.99	
P 4117	長方形	(28)	24	6.30	旧 P 541、基礎石	P 4154	円形	21	16	6.08	
P 4118	方形	22	21	6.36		P 4155	方形	30	28	6.14	旧 P 577、柱痕径11
P 4119	円形	36	32	6.18		P 4156	円形	26	25	6.07	
P 4120	円形	26	25	6.34	旧 P 545	P 4157	方形	40	38	6.12	
P 4121	楕円形	52	42	6.12	旧 P 544、段	P 4158	長方形	(64)	42	6.05	旧 P 576
P 4122	円形	24	23	6.35	旧 P 546	P 4159	楕円形	(53)	(47)	5.94	
P 4123	円形	26	26	6.19	旧 P 547	P 4160	楕円形	44	39	6.05	旧 P 534
P 4124	方形	36	32	6.12	旧 P 578	P 4161	楕円形	42	38	6.26	
P 4125	円形	26	26	5.93		P 4162	円形	21	19	6.38	P 3148、旧 P 454
P 4126	方形	20	20	6.19		P 4163	円形	25	24	6.10	旧 P 533
P 4127	長方形？	38	—	5.97		P 4164	円形	12	12	6.30	
P 4128	方形	23	23	6.21							



第4図　第1調査面遺構平面図

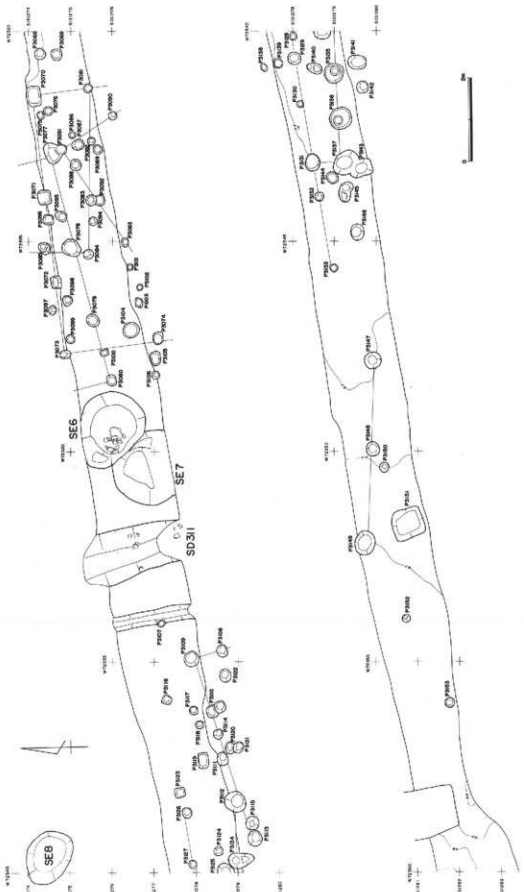
第5図　第2調査面遺構平面図（1）



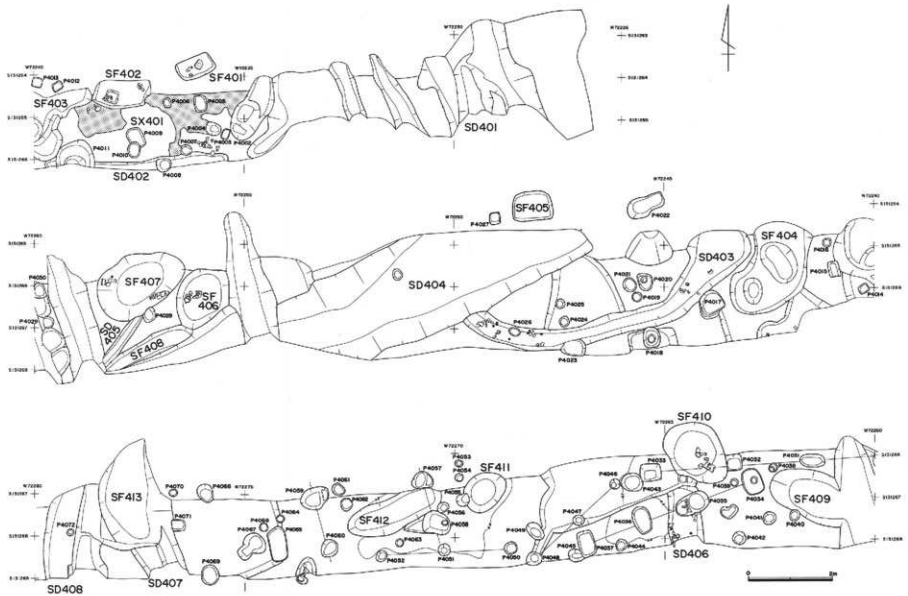
第6図　第2調査面遺構平面図（2）

第7図　第3調査面遺構平面図（1）

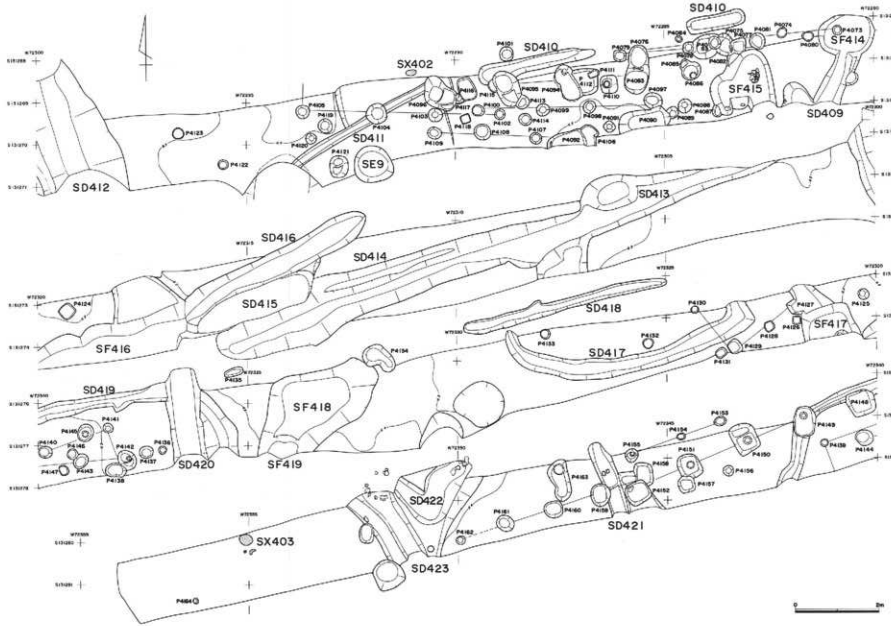
SE 3
SE 4
SE 5
SD304
SD305
SD306
SD307
SD306
SD309
SD310
P5045
P5047
P5048
P5049
P5050
P5051
P5052
P5053
P5054
P5055
P5056
P5057
P5058
P5059
P5060
P5061
P5062
P5063
P5064
P5065
P5066
P5067
P5068
P5069
P5070
P5071
P5072
P5073
P5074
P5075
P5076
P5077
P5078
P5079
P5080
P5081
P5082
P5083
P5084
P5085
P5086



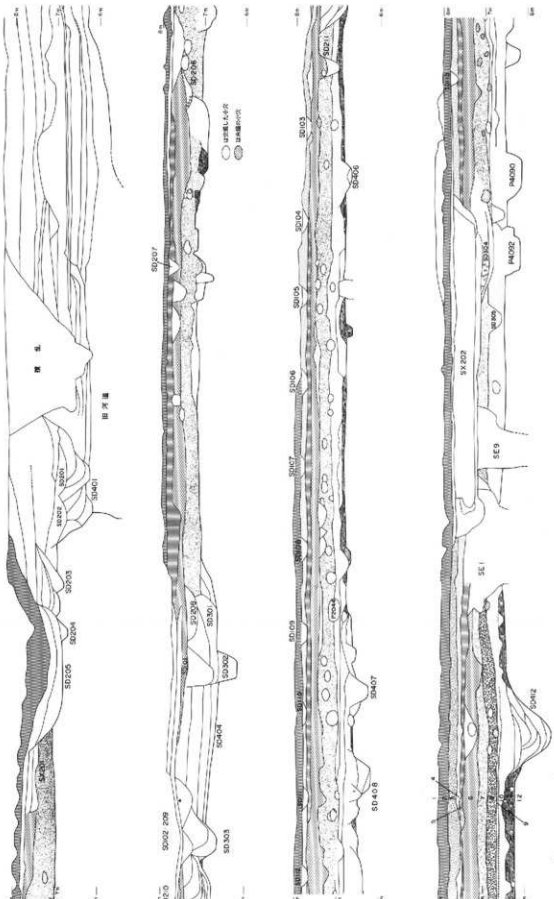
第9図　第3調査面遺構平面図（3）

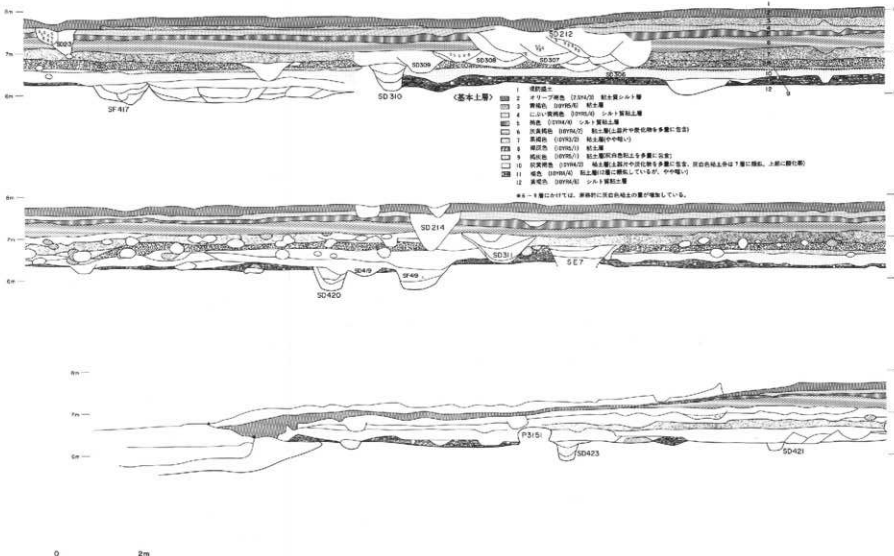


第10図　第４調査面遺構平面図（１）

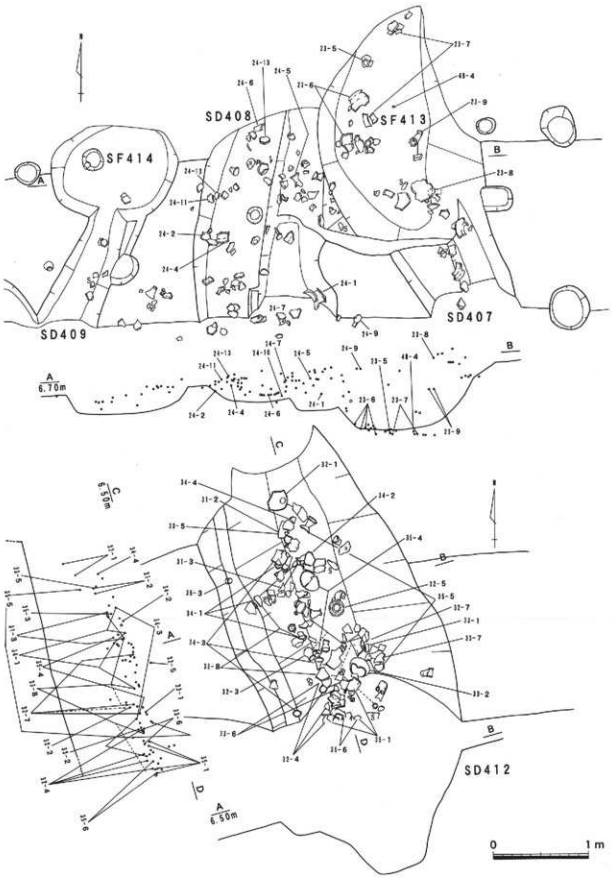


第11図　第４調査面遺構平面図（２）

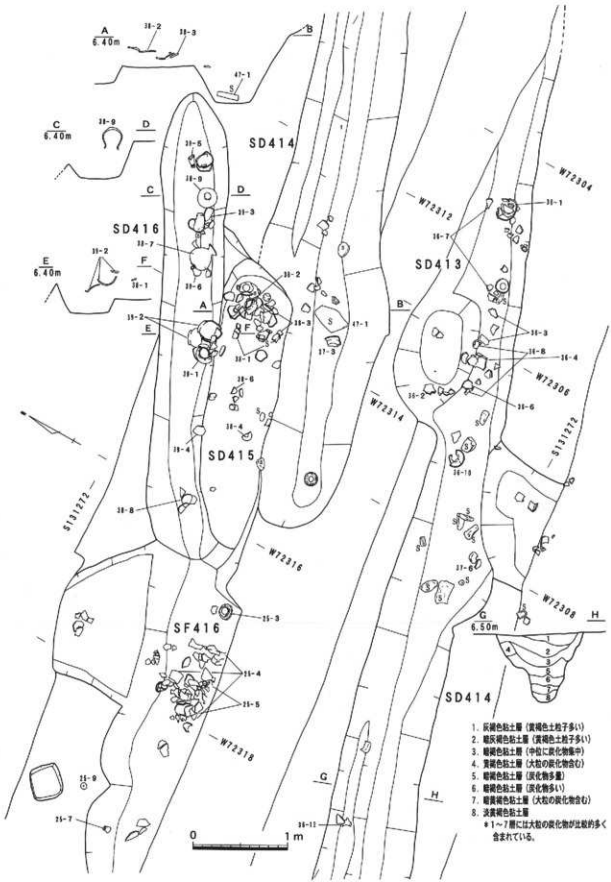

SD201
SD202
SD203
SD204
SD205
SD206
SD207
SD208
SD209
SD210
SD211
SD212
SD213
SD214
SD215
SD216
SD217
SD218
SD219
SD220
SD221
SD222
SD223
SD224
SD225
SD226
SD227
SD228
SD229
SD230
SD231
SD232
SD233
SD234
SD235
SD236
SD237
SD238
SD239
SD240
SD241



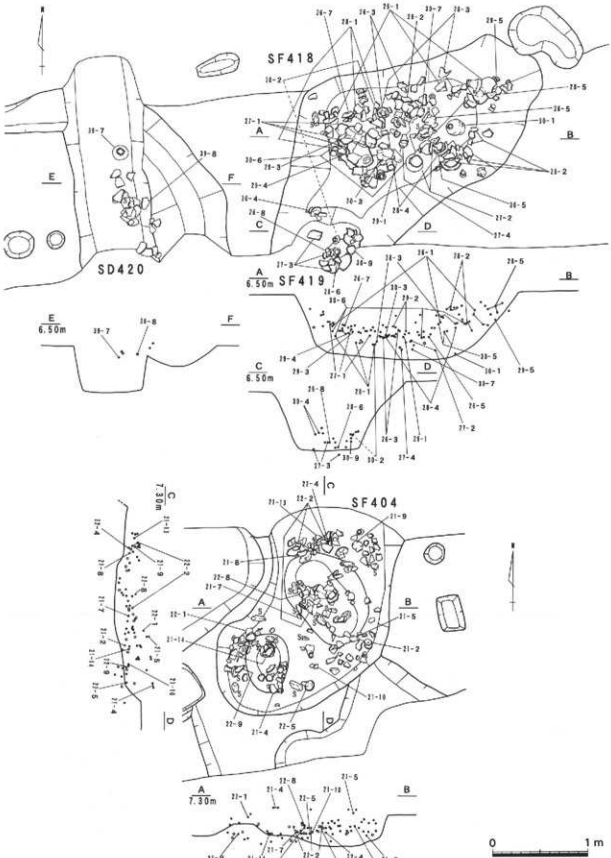
第13図　東西土層模式図（2）



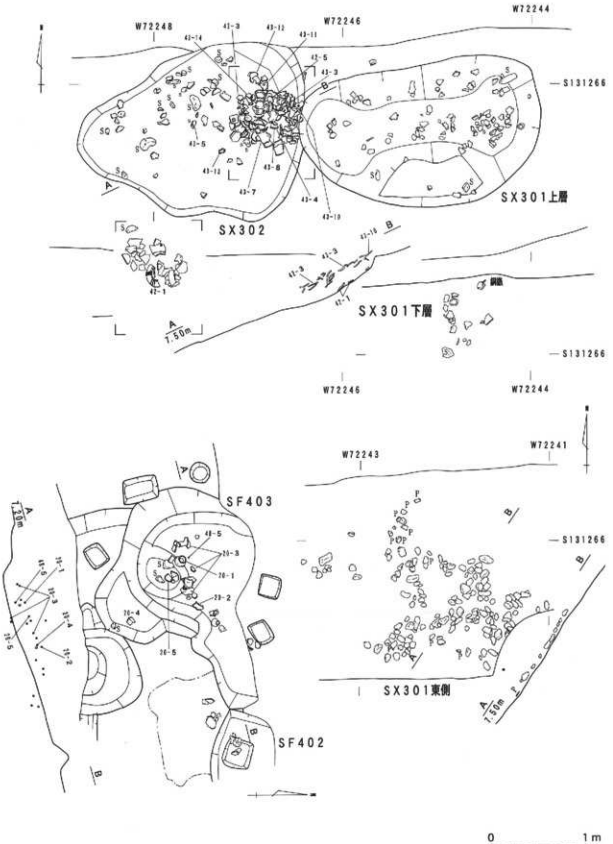
第14図　SD407～409・412、SF414遺物出土状況図



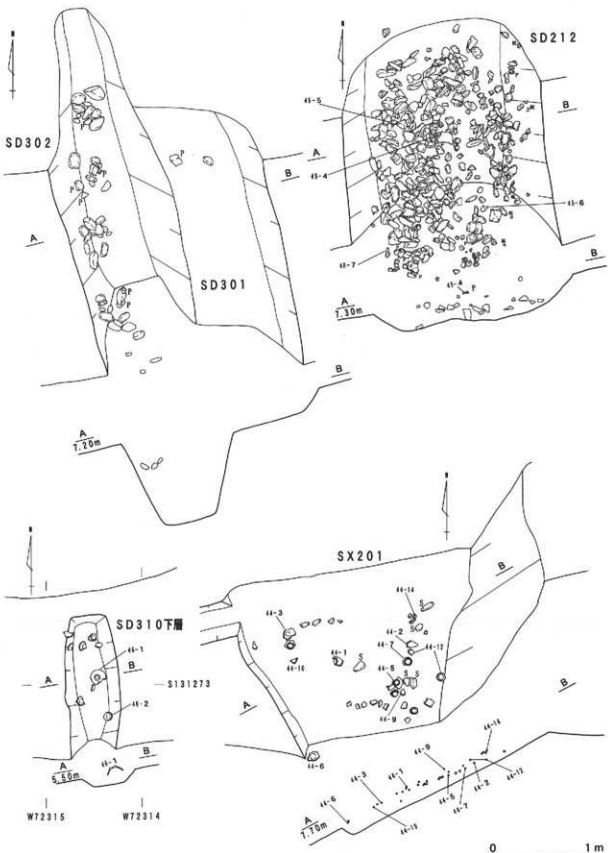
第15図　SD413～416、SF416遺物出土状況図



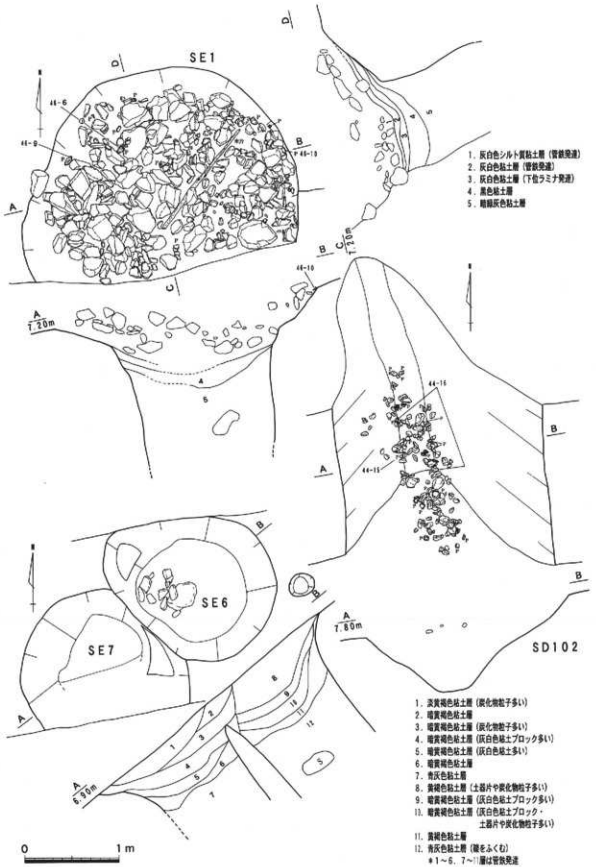
第16図　SD420、SF404・418・419遺物出土状況図



第17図　SX301・301東側・302、SF403遺物出土状況図



第18図　SD212・301・302・310下層、SX201遺物出土状況図



第19図　SE１・６、SD102遺物出土状況図

第4章　出土した遺物

出土遺物は、実測・拓影図を第20～48図に掲載し、詳細については表－10～24に示しているため、ここでは、主な遺物について、弥生時代から時代を追って述べる。

第1節　弥生～古墳時代前期の土器

今回の調査で出土した最古の土器には、第41図－11のような弥生時代中期の土器片が微量ではあるが出土しており、遺構は確認されていないが、当遺跡において稲作農耕が開始されたのは、その時期以前と考えても良いのではないかと思われる。

出土した土器の約8割が弥生時代後期の土器で、第20～41図に掲載した土器の多くが後期に属するものである。

当地域における弥生～古墳時代前期の土器編年は確立されていない。今回の調査では編年を組むだけの資料に恵まれなかったこともあり、既成の編年を応用して簡単にまとめてみたい。西遠江地域は巨視的にみれば、伊勢湾沿岸地域の土器とかなり共通点があり、1つの分布圏として捉える考え方もある（鈴木敏1987）。器種組成や細部の技術的な相違はあるが、形態や製作技術は、基本的には伊勢湾沿岸地域と共通しており、従来の山中式→欠山式→元屋敷式（大参1968）という呼称を用いる。従来の編年については、様々な批判（加納・都築1984他）があり、新たな様式論的編年案（赤塚1990）も提出されているが、ここでは、段階論的・系統論的な考え方で、従来の呼称を用いる。そして、尾張地域の土器の変遷を念頭に置いた、西遠江地域の編年案（鈴木1991、久野1991）を参考に、各段階内での時間軸の問題についてふれてみたい。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、S字甕の多量出土だけでなく、神奈川県神崎遺跡、東京都下戸塚遺跡、山梨県住吉遺跡など弥生時代後期の東海系土器がその分布圏外から多量に出土する例が報告されており（東海埋蔵文化財研究会1991）、この時期は土器の移動が激しく、各遺跡（地域）単位で、使用された土器が異なる場合が想定される。外来系土器の質的、量的問題や土器の製作技術に関する情報の流れなどを考える上では、各遺跡出土土器の差別化を図り、それらを時空的問題に還元しながら考えてみることも必要であろうと思われる。

当遺跡で、比較的まとまって多くの土器が出土した遺構には、SF404・418・419、SD412・413～416、SX302などがあり、これらを中心に気付いた点を列記してみたいと思う。

SF404（第21～22図）からは、壺は口縁部が直線的に開くものと内彎しているものがある。甕は胴部が張るものとそうでないものがあり、胴部が張るものは口縁部の内外面を横ナデしている。甕部と台部の接合部に粘土紐を巻いたものも存在する。高坏には口縁部が外反するものと内彎するものがあり、脚部は高いものと低いものがあり、裾部は外反するもの、直線的なもの、内彎するものがある。

SF404は山中式段階と欠山式段階の土器が混在しているようである。

SF418・419は、当初1つの遺構として調査したため、第26～30図に示したものはどちらの土坑に帰属するかは不明な土器がある。しかし、調査面積からすると、ほとんどの土器はSF418出土資料と考えて良く、明らかにSF419出土のものは、第26図－8～10、第27図－3、第28図－6、第30図－2・4・9である。これらは、甕の口縁部にキザミがなく、内外面横ナデされているものがあり、SF418よりは後出的である。第30図－4の高坏は胎土が精選され、接合部が厚く、異質である。

SF418からは、欠山式段階の中葉の土器がまとまって出土している。壺は複合口縁、折り返し口縁、

内彎した単純口縁があり、胴部は下膨れ形を成すものが多い。複合口縁では、口縁部外面に櫛刺突文を施すものや棒状浮文や凸帯を巡らすもの（第26図－3）がある。肩部の文様は、櫛描横線文と櫛刺突文が交互に施文されている例が多い。甕には、口縁部が「く」字状に開くものと直立的に立ち上がるものがあり、両者共にキザミがあり、横ナデされるものもある。胴部は長胴のものと球胴のものがある。変わった例として、焼成前に乾燥時のひび割れを補強したもの（第29図－3）も出土している。高坏は、坏部が深く内彎気味に開くもので、口唇部は面取りされている。脚部も内彎しているが、直線的に開くものもある。その他、皿が1点出土した。

SF 418・419からは、甕に口縁部が短く直立気味に立ち上がる例が比較的多く出土している。SF 418の時期には、受口甕（S字甕を含む）が存在しても良いのであるが、都田川流域ではわずかな受口状の甕が認められる程度である。沿岸部では、中村遺跡（後藤1990）、大平遺跡（鈴木1992）や山の神遺跡（佐藤1989）で、太田川流域では土橋遺跡（永井1985）などから比較的多く出土しており、受口甕を採用した集団とそうでない集団とがあるようである。

SD 412の下層からは、大型の壺（第31図－1）が出土した。胎土や色調から搬入品と考えられ、菊川式土器の中でも、口縁部や肩部の文様に古い要素が多い。その他の土器（第31～35図）は、全て上層から出土している。

壺には、口縁部が直線的もしくは外反気味に開く例が多く、胴部は下膨れ形もしくは球形を成し肩部の文様には、櫛描横線文と波状文や刺突文が交互に施文される例、櫛刺突文や縄文が施文される例があり、菊川式系統の櫛刺突文や縄文が施文された土器の外面調整には、ハケメ痕を残すものが多い。なお、第33図－3は搬入品と思われる。

甕には、比較的大型のものが目立ち、口縁部は直立気味に開く例（第33図－5・6）もあるが、ほとんどは「く」字状に開き、胴部は球形を成す。

高坏は、脚部が外反気味に開き、口縁部が外反するものと直線的に開くものがある。その他、小型の壺も出土している。

上層遺物は、高坏からすると山中式段階であり、壺には球形胴のものも多く、従来欠山式段階とされてきたものが共伴している。

SD 413～416は、基本的には方形周溝墓に伴う土器と考えられ（第36～39図上段）、欠山式段階の土器が多い。壺は様々であり、SD 414からは肩部に櫛刺突文を有する凸帯が巡る例が多く出土し、その他、特徴的なものとして、二重口縁のもの（第37図－2）、小型例や広頸の短口縁例（第37図－4・5、第38図－9、第39図－1・2）が多く出土している。中には、焼成後穿孔されている例（第38図－7、第39図－2）もある。甕には「く」字状口縁で口唇部はキザまれ、内外面横ナデされているものが多く、胴部内面をヘラケズリしているもの（第36図－3）もある。高坏は欠山式段階の例が多い。その他、片口（第37図－9）も出土している。

SX 302からは、元屋敷式段階の土器が出土している（第42・43図）。壺には二重口縁のものと口縁部が水平に開くものがある。甕は口縁部が「く」字状に開くものが多いが、大型例は口縁部が直立気味に立ち上がっている（第43図－4・7）。平底甕で、底部をヘラケズリしているもの（第43図－9）もある。S字甕のC類（赤塚　前掲書）も出土している。高坏は、坏部がやや深いものと椀状の坏部を有する小型高坏も出土している。

S字甕の拡散の背景には、人的移動（高橋1985）を考慮する必要性もあるが、S字甕自体に単なる煮沸の用途だけでなく、古墳祭式を始めとする祭祀行為にとって必要不可欠であったため、そこには別種の価値が付加され、広域に伝播したものと考えられている。

SX 302は、東側に敷石状の遺構があり、S字甕はわずかであるが、紡錘車などの出土も含めて、祭祀

と関連するのかもしれない。

ここで、比較的多く土器を出土した遺構の器種組成についてみてみたい。個体の識別については、高坏、台付甕と器台は脚もしくは台部の接合部で、壺、平底甕、鉢、皿、片口は底部で行い、破片の残存率が100%になったものを1個体と計算している。器種の識別のつかない底部は、壺類として一括している。

SF 404	高坏23%（6.5個）	台付甕32%（9個）	壺類34%（9.5個）	小壺11%（3個）
SF 418	高坏25%（12個）	台付甕35%（17個）	壺類37%（18個）	小壺1%（0.25個）
	皿2%（1個）			
SD 412	高坏23%（15個）	台付甕43%（28個）	壺類26%（17個）	小壺8%（5個）
SD 413・4	高坏25%（13個）	台付甕22%（11個）	壺類43%（22個）	小壺8%（4個）
	片口2%（1個）			
SD 415		台付甕13%（1個）	壺類63%（5個）	小壺25%（2個）
SD 416	高坏13%（1個）	台付甕25%（2個）	壺類63%（5個）	
SX 302	高坏13%（4個）	台付甕34%（11個）	壺類28%（9個）	小壺13%（4個）
	鉢3%（1個）	器台6%（2個）	平底甕3%（1個）	

SD 413～416の方形周溝墓では壺類の比率が高い。山中・欠山式段階では高坏が25%前後であるが、元屋敷式段階では13%と低率である。また、元屋敷式段階は台付甕が34%と他器種と比較すると高率のままである。

土器が多量にまとまって出土した遺構は以上のようであるが、これらの他に特徴的なものとして、菊川式土器が比較的多く出土している。第23図－3、第26図－5、第31図－1、第33図－3、第38図－6、第42図－4などで、壺と高坏がある。第31図－1、第33図－3、第42図－3は胎土や色調から搬入品の可能性がある。

都田川流域からは、菊川式の壺や高坏が少量ではあるが出土し、川久保船渡遺跡（栗原1993）では、土器棺として利用されている状況からすると、単なる物資の移動によるものとは考えられない。しかし、多くの壺に認められる菊川式の影響は、壺自体の移動が、頻繁にあったことによるものとも考えられる。

引用・参考文献

1．鈴木敏則「欠山様式とその前後」『「欠山式土器とその前後」研究・報告編』1987　愛知考古学談話会
2．大参義一「弥生土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』ｘＬｖ11
3．加納俊介・都築みどり「愛知県」『古墳時代土器の研究』1984　古墳時代研究会
　加納俊介「東海地方」『シンポジウム月影式土器について報告編』1986　石川県考古学研究会シンポジウム実行委員会
4．赤塚次郎『廻間遺跡』1990　（財）愛知県埋蔵文化財センター
5．鈴木敏則『梶子遺跡Ⅷ』1991　（財）浜松市文化協会
6．久野正博「三河・西遠江の後期弥生土器編年と地域性」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ⅰ分冊　1991　東海埋蔵文化財研究会
7．東海埋蔵文化財研究会『東海系土器の移動とその背景』1991
8．後藤健一『吉美　中村遺跡』1990　湖西市教育委員会
9．鈴木敏則『佐鳴湖西岸遺跡群　本文編Ⅰ』1992　（財）浜松市文化協会
10．佐藤由紀男『浜松市山の神遺跡発掘調査報告書』1989　（財）浜松市文化協会
11．永井義博『上橋遺跡』1985　袋井市教育委員会
12．高橋一夫「前方後方墳の性格」『土曜考古』10　1985

第2節　平安～江戸時代の土器

古墳時代後期～奈良時代の遺物も微量出土している。その多くは包含層からの出土で、明確に遺構に伴う遺物は出土していない。

平安時代前期の遺物もほとんど出土していない。包含層から尾張産の黒笹14号窯式の灰釉陶器（第46図－23）などが出土している。

平安時代後半の遺物には、第45図－2・10・13、第46図－4・5・18・26などがある。折戸53号窯式～百代寺窯式段階の灰釉陶器や11世紀後半～12世紀初頭の玉縁状口縁の白磁碗（26）が破片であるが、わずかに出土している。その他、SX 201から比較的まとまった資料（第44図－1～14）が出土している。1～7・13が灰釉陶器で、碗の口唇部は外側へ引き出され、高台の断面形態は三角形、三日月形、矩形など様々であるが、およそ折戸53号窯式の新しい段階に位置付けられるものと考えられる。軟質のものが多く、底部は厚く、内面の重ね焼き部分が灰色を呈しているものが多く、距離的な関係も考慮すると浜北産と考えられる。8～12・14は土師器で、11・12は高台付皿で、灰釉陶器の皿を模倣しているものと思われるが、高台はかなり高い。

中世の遺物は比較的多く出土した（第44図下段、第45・46図）が、多量に遺構内からまとまって出土した例がなく、ここでは、まとめて概要を説明する。

山茶碗は比較的多く出土しており、大アラコ窯式段階から所謂漬れ高台のものまでが出土している。第45図－18は大アラコ窯式段階のもので、高台の断面形態は略台形で、やや「ハ」字状に開き、灰釉三方漬け掛けで、ヘラによる輪花が認められる。第45図－20の渥美産の大型鉢と共伴した。第45図－21は体部が直線的で、高台が小さい尾張系のもので、同一遺構内より、底部が広く、口唇部を面取りした尾張系の小皿も出土している。

山茶碗の産地については、不明な点も多いが、その形態や胎土などからすると、渥美・湖西系のものが多いと考えられ、年代は12世紀中頃から13世紀代のものが出土している。

古瀬戸は、卸皿、縁釉小皿、平碗や擂鉢などが出土している。SD 210からは、卸皿と縁釉小皿が出土した。後期後半のもので、羽釜（第44図－18・19）が伴出している。第46図－22も同様の縁釉小皿である。平碗には、第45図－16、第46図－25があり、25は体部にやや丸味を残しているが、高台脇は深く削り込まれており、後期の中頃の所産であろう。16は口縁部が肥厚しており、後出的である。擂鉢には、第46図－10・11があり、おそらく同一個体であろう。内外面には、鉄釉が掛けられ、口縁部は内側に肥厚しており、後期末のものであろう。

古瀬戸は後期でも後半のものが主体で、15世紀代の所産のものが多い。

第45図－12、第46図－8・14・17は断面形態が黒褐色で、初山窯の製品の可能性が高い。12は焼き歪みが大きく、8は底部を削り込んでいる内剝がしの丸皿、17は窯道具の匣鉢である。

初山窯の製品は大窯Ⅱ期段階に位置付けられ、16世紀の後半のものとされている。

第46図－14・15は素焼きの小皿である。

第46図－20は白磁皿で、高台は小さく削り出された輪状高台で、体部は内弯する。15世紀代の所産であろう。第46図－24は青磁碗である。

その他、尾張産の三筋壺（第45図－5）、渥美産の甕（第46図－16）や伊勢型鍋（第44図－17）、内耳鍋（第46図－27）、かわらけ（第46図－3・12）なども出土している。

出土遺物が少なく、量的保証はないが、14世紀代の遺物が相対的に少ないようである。

参考文献

1．松井一明「宮口古窯群と清ケ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡本文編』1989 静岡県教育委員会
2．後藤健一「遠美・湖西中世古窯跡群」『マージナルNo.7　山茶碗窯』1987　愛知考古学談話会
3．藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要X』1991　瀬戸市歴史民俗資料館
4．栗原雅也『初山焼釜下古窯発掘調査報告書』1985　細江町教育委員会

第3節　石製・土製・金属製品

土器以外の主な出土遺物として、石製・土製・金属製品がある。

第47図－1・2、第48図－1・2は砥石である。第47図－1はSD414の最下層から出土した（第15図）。材質は砂岩で、表裏面と直線的な1側面に使用痕があり、研磨面は平坦で、側面は一部自然面を残すが、ほとんどは割れている。大きさは、35.1×22.7×6.0cmで、かなり大型である。第47図－2はSD422から出土した。材質は砂岩で、表面の一部に平坦な使用痕があり、裏面と1側面に自然面が残るが、他は割れている。大きさは、11.9×11.3×4.5cmである。第48図－1は、P4060の南西部の落ち込みから出土した。材質は砂岩で、表裏面と直線的な1側面に平坦な使用痕があり、残りの側面は割れている。大きさは、10.4×6.2×2.4cmである。第48図－2はSD307から出土した。材質は緻密な白色の凝灰岩で、形態は柱状で、両先端部と裏面が割れているが、その他の面には、使用痕が認められる。大きさは、5.9×2.1×1.7cmである。第47図－1・2と第48図－1は弥生時代後期のもので、第48図－2は中世のものであろう。

第48図－3・4は紡錘車で、3は石製、4は土製である。3はSX301の上層から出土したもの（第17図上段）で、表裏面ともよく研磨されており、細かな擦痕が認められる。周縁部は自然面が残り、材質は赤色チャートである。大きさは直径が4.0cmで、厚さは0.7cmである。中央部は表裏面両方向から穿孔されており、孔径は0.8cmである。4はSF413から出土したもの（第14図上段）で、大きさは4.8×4.5×1.3cmである。3は古墳時代前期、4は弥生時代後期のものである。

第48図－5は土玉で、SF403から出土した。ソロバン玉状を成し、直径と厚さが約2cmで、中央部には0.3cmの穿孔がある。弥生時代後期のものである。

第48図6～15は包含層や各遺構などから出土した土錘である。土錘はこれらの他にも多量に出土しているが、できるだけ形態の異なる、残りの良い資料を図示した。時期は平安時代以降のものが多いと考えられる。大きさは、6が3.8×0.9cm、7が4.5×1.7cm、8が5.0×1.5cm、9が4.7×1.0cm、10が5.4×1.5cm、11が5.3×1.5cm、12が4.6×1.4cm、14が4.0×1.4cm、14が4.1×1.4cm、15が4.5×1.0cmで、長さは5cm前後、太さは1.5cm前後である。

第48図－16～18は鉄製品で、全て小穴から出土している。16はP4002から、17はP4010から、18はP4100から出土したものである。形態は、16が刀子状が、18が鉇状を成している。16と18はかなり深い小穴から出土しており、弥生時代後期から古墳時代前期に属するものと考えられるが、17は浅い小穴からであり、雁又形の鉄鏃と仮定するとかなり新しいものとなる。こうした鉄製品の小穴からの出土は、建物の建造に際して、何らかの祭祀的な行為に関連するものであるかもしれない。

第48図－19はSX301の下から出土した銅鏃である（第17図上段）。ただし、遺構に伴うものではなく、山中式段階の台付甕や高坏の破片と共に出土した。鏑は不明瞭で、翼端部は丸く、あまり丁寧に仕上げられていない。

この他、洪武通寶や寛永通寶などの銅銭も少量出土している（図版28－128）。

表－10　出土土器観察表(1)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は 推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
20-1 SF 403	壺	口7.5	比較的小型、口縁は短く外反・口唇部は丸く調部は長胴	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は縦位・斜位ハケメ、内面は横位ナデ	黄橙色／白○ 黒○橙◎赤△	胴上半1／2残存 胎土精選
20-2 SF 403	甕		口縁部は直立気味に立ち、口唇部はヘラ状工具による面取り	口唇部はヘラ状工具によるキザミ、口縁部外面斜位ハケメ、他内外面横位ハケメ	黄褐色／精選 白◎橙△黒○	破片
20-3 SF 403	高坏	口(23.7) 高21.9 脚(16.4)	坏部は内彎気味に開き、口縁部で外反、口唇部は面取り、脚部は外反して開き、端部は肥厚	口縁部外面に櫛描波状文、坏部外面は斜位ハケメ→横なでメ、内面はミガキ(左→右順)、脚部に三方透し、外面はハケメ→ミガキ、内面は横位ナデ・ハケメ	黄橙色 白△橙◎黒◎	口縁・脚部1／2欠損
20-4 SF 403	高坏	口(15.9)	比較的小型で、坏部は浅く、口唇部面取り	坏部外面は斜位ハケメ→横位ミガキ	黄橙色 白◎橙◎黒◎	坏部1／5残存
20-5 SF 403	高坏	口(23.7)	口縁部は直線的に開き、口唇部は面取り	口唇部外面は横ナデ、口縁部内外面は横位ハケメ→縦位ミガキ	黄橙色 白◎橙◎黒○	坏部1／4残存
20-6 21-63 SF 406	壺	口14.1 大17.4	口縁部は短く直立気味に立ち、ハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は横ナデ、内面は横位ハケメ、内面は横位ヘラナデ(右→左順)、胴部外面は斜位ハケメ、内面は横位ヘラナデ(右→左順)	黄褐色 白○黒○砂◎	胴部上半1／2残存
20-7 21-64 SF 406	高坏	口(19.6)	坏部は深く、口縁部は内彎気味に開き、口唇部は尖る、脚部の開きは直線的	坏部の内外面は斜位ミガキ、端部は横ナデ、脚部外面は縦位ミガキ、内面は縦位ヘラナデ	黄橙色 白○橙◎黒○	口縁・裾部一部残存
20-8 SF 407	壺	口(15.1)	口縁部は胴部から外反気味に開き、端部は折り返し	口唇部内外面横ナデ、口縁部内外面横ナデ調整、一部ハケメ、胴部内面に指頭痕	黄橙色／精選 橙○黒△石○	口縁部1／2残存
20-9 21-65 SF 407	甕	口(22.0)	口縁部はゆく字状に開き、端部は面取り、胴部最大径はやや上位にあり、やや長胴	口唇部は幅広のキザミ、口縁部は内外面横ナデ、胴部外面は横位ハケメ、内面はケズリ状の横位ハケメ(右→左順)	黄褐色 白○橙◎黒◎	胴部上半1／4残存
20-10 SF 407	壺	口(17.0)	口縁部はゆく字状に開き、端部は尖る、胴部は球形？	口縁部内外面は横ナデ、端減が著しいが明瞭外面は横位ハケメ	黄橙色 白◎大橙◎黒△	口縁部1／2 肩部1／6残存
21-1 20-57 SF 404	壺	口(11.0) 器21.9 底(5.4) 大18.9	口縁部は胴部から直立気味に立ち上がり、口唇部は面取り、胴部はなだらかで最大径は下位にある、底部は不安定	口縁部内外面は縦位ミガキ、胴部外面は横位ミガキ、内面は横位ヘラナデ、胴部内面には指頭痕	黄橙色 白△橙△黒◎	2／3欠損
21-2 SF 404	壺	口(9.4)	比較的小型で、口縁部はゆく字状に開き、口唇部は面取り	口縁部内外はハケメ→横ナデ、胴部外面はハケメ→ヘラナデ、内面は指頭痕	黄橙色 白◎黒△	口縁部1／3 肩部2／3残存
21-3 SF 404	壺	口(8.9)	比較的小型で、胴部は張り、口縁部は内彎気味に開き、口唇部は面取り	口縁部に押文(施文2ヶ所)、内外面横ナデ、胴部外面ハケメ、内面指頭痕	黄橙色 白○黒△礫○	口縁部1／2残存
21-4 SF 404	壺	口(19.2)	口縁部は内彎気味に大きく開き、端部は面取り	口縁部外面は上位に斜位ハケメ、下位と内面は縦位ミガキ、胴部に凸帯	黄橙色 白◎橙△黒△	口縁部1／6残存
21-5 SF 404	壺	口(20.2)	口縁部はゆく字状に開き、端部は肥厚してやや内彎、面取り	口唇部に櫛刺突文、口縁部外面は斜位ハケメ、内面は横位ハケメ、端部は横ナデ	黄橙色 白◎黒◎	口縁部1／6残存
21-6 SF 404	壺	口(22.0)	口縁部は外反気味に開き、端部は折り返し	口唇部は櫛刺突文、口縁部外面は斜位・横位ハケメ、内面は横位ハケメ→ミガキ	黄橙色 白◎黒△　精選	口縁部1／6残存
21-7 SF 404	壺		口唇部は面取り	口縁部外面に凸帯、内面はハケメ、端部は横ナデ	黄褐色／白△黒△ 大橙△礫◎	破片
21-8 SF 404	壺	口(25.7)	比較的大型で、口縁部は受け口状を呈し、口唇部は面取り	口縁部に4本一単位の櫛状押文、内外面はハケメ、外面は横→口縁部横、内面は右→左順	黄橙色 橙◎黒○　精選	口縁部1／6残存
21-9 20-58 SF 404	鉢	口(12.0) 高15.0 大15.6 底6.5	坏部が広く、口縁部は短く直立気味に立ち上がり、口唇部は面取り、胴部最大径は中位にあり、丸い鉢をもつ、底部は凹底	外面はおよそ3段の縦位ミガキ、下段のミガキは左→右順、内面は横位により不明、底部は木葉痕の上をミガキ	黄橙色 白◎橙○黒○	口縁～胴部1／3欠損
21-10 SF 404	壺	大(12.9) 底(5.8)	胴部はソロバン玉状を呈し、胴部が張る、底部は平底	胴部外面は縦位・斜位ミガキ、内面は斜位・横位ハケメ(右→左順)	黄橙色 黒◎石◎	胴～底部1／3残存
21-11 SF 404	壺	口(11.3)	口縁部は内彎気味に開き、端部に丸味	口唇部外面にヘラ刺突状文、口縁部内外面は縦位ミガキ	黄橙色／白△橙△ 黒◎　精選	口縁部1／4残存
21-12 SF 404	壺	底2.3	底部は丸く、凹底	底部内面に指頭痕	黄橙色 白◎黒△	底部のみ残存
21-13 SF 404	甕	口(16.8) 大(17.6)	口縁部は直立気味に開き、口唇部はハケ状工具による面取り	口唇部はヘラによるキザミ、内外面は2種類のハケメ、外面は斜位、内面は横位(右→左順)	黄橙色 白◎礫◎黒△	口縁～胴部1／4残存

表－11　出土土器観察表(2)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
21-14 21-60 SF 404	壺	口13.0 大16.2	胴部はやや長胴で、台部が付く、口縁部はく字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外側は横ナデ、外面は斜位ハケメ（右→左原）、内面は横位ハケメ（右→左原）、底面は放射状のヘラナデ	黄褐色 白◎黒◎	口縁部1／3と台部欠損
21-15 SF 404	壺	底(7.8)	壺部と台部の接合部に粘土紐痕	台部外面は斜位ハケメ（左→右原）、内面は横位ハケメ（右→左原）、底面はヘラナデ、下半は斜位ハケメ	黄褐色 白◎橙◎黒○	台部残存
22-1 21-61 SF 404	壺	口(18.5) 大(23.1)	胴部が張り、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は面取り	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面はハケメ→横ナデ、頸部外面は斜位ハケメ、内面は横位ハケメ（右→左原）、底面は痕跡の扇状のヘラナデ	黄褐色 白◎橙◎黒◎雲○	口縁～頸部1／2残存
22-2 21-59 SF 404	壺	口17.3 大18.7	口縁部はゆるく、く字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、頸部は球形で、台部との接合部に粘土紐痕	口唇部はハケ状工具によるキザミ、内外面は2箇所のハケメ、外面は斜位→縦位ハケメ、内面斜位→横位ハケメ（右→左原）、底面は痕跡の扇状のハケメ、台部内外面は斜位ハケメ	黄褐色 白◎橙◎黒△雲◎	台部欠損
22-3 SF 404	高坏	口(24.4)	坏部中位に稜をもち、口縁部は大きく外反	口縁部外面は8本一単位の櫛描波状文、内面は斜位ミガキ	黄褐色 白△黒◎	坏部破片
22-4 SF 404	高坏	裾(12.0)	脚部は直線的に開き、裾端部は肥厚	脚部三方透し、脚部外面は斜位ハケメ→縦位ミガキ、内面は斜位ヘラナデ、脚部内外面横ナデ	黄褐色 白◎橙◎黒△	脚部2／3残存
22-5 21-62 SF 404	高坏	裾13.9	脚部は中位で折れて直線的に開く、裾端部は肥厚	脚部に三方透し、脚部外面はハケメ→縦位ミガキ、内面は上位がヘラナデ、下位は横ナデ	橙色 黒◎石○　精選	脚部残存
22-6 SF 404	高坏	裾(12.2)	裾部は外反	脚部に三方透し、中位に櫛描横線文、脚部外面は縦位ハケメ→縦位ミガキ、内面中位に絞り痕、下位に横位ハケメ	黄橙色 白◎黒○　精選	脚部破片
22-7 SF 404	高坏		脚部は柱状	脚部下位に三方透し、上中下位に櫛描波状文、脚部外面は縦位ミガキ、内面はヘラナデ	黄橙色 黒◎石○　精選	脚部上半残存
22-8 SF 404	高坏	裾(10.9)	脚部は直線的に開き、端部はやや肥厚	脚部上位に三方透し、脚部外面は縦位ヘラミガキ、内面は斜位ハケメ、裾部内外面は横ナデ	黄橙色 白◎大橙△黒◎	脚部残存
22-9 SF 404	高坏	裾(17.0)	裾部は外反気味に開き、端部は肥厚	裾部外面は縦位ミガキ、内面は横位ミガキ	黄褐色　白△橙 △黒◎石○	裾部1／4残存
22-10 SF 404	高坏	口(19.3)	口縁部は内傾して開き、口唇部に内傾面	坏部外面は斜位ハケメ→横ナデ→縦位ミガキ、内面は横位ハケメ→斜位ミガキ	黄橙色 白◎橙◎黒○	坏部上半1／4残存
22-11 SF 404	高坏		脚部と坏部の接合部は厚く、坏部下位に稜い稜	脚部上位に三方透し、坏部と脚部外面は縦位ミガキ、坏部内面は縦位ミガキ	黄橙色 白△大橙◎黒◎	坏部下半～脚部上半残存
22-12 SF 404	高坏	裾(12.0)	裾部はやや内傾気味に開き、端部はやや肥厚	脚部中位に四方透し、脚部外面は縦位ミガキ（左→右原）、内面は斜位ハケメ（左→右原）	橙色 白○黒○	脚部下半1／3残存
23-1 SF 410	壺	大(17.3)	胴部は下位に稜のある倒花鼎形	胴部外面は斜位→横位ヘラナデ、内面は斜位ハケナデ	黄褐色 白△橙◎黒◎	胴部1／3残存
23-2 22-66 SF 410	壺	口23.7 大24.9	口縁部はゆるく、く字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、頸部は浅く、中位に最大径	口唇部はヘラによる縦長のキザミ、口縁部外面は斜位ハケメ→横位ハケメ（左→右方向、右→左原）、口縁部内面は横位ハケメ、胴部内面はヘラナデ（右→左原）	黄褐色 白○大橙△黒◎	口縁～胴部残存
23-3 22-67 SF 410	高坏	口(29.2)	坏部は直線的に開き、口縁端で段をなし、やや外反して開く、口縁端部は折り返し	口唇部は粗いハケメ、下端に指頭痕、坏部内外面は横いし斜位ハケメ→横位ミガキ（左→右原）	黄褐色 白◎橙◎黒◎	坏部1／4残存
23-4 22-68 SF 410	台	上(7.6) 高5.1 底(9.0)	上面はやや凹み、端部は直線的に開き、端部は内側に肥厚	内外面に指頭痕	黄褐色 砂◎黒△石◎	1／3残存
23-5 SF 413	壺	口(12.0)	比較的小型で、口縁部は外反気味に開く単純口縁	口縁部外面は斜位ケメ→横ナデ、内面は横位・縦位ヘラナデ、頸部内面はハケメ及び指頭痕	黄褐色 白◎大橙△黒◎	
23-6 23-79 SF 413	壺	口18.7 大21.7	口縁部はゆるく、く字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、外面は斜位ハケメ、内面は横位ハケメ（右→左原）、頸部内面は粗いハケメ	黄褐色 白◎	口縁～胴部残存
23-7 23-80 SF 413	高坏	口(22.5)	坏部は中位に稜をもち、口縁部は外反して開く、口唇部は面取り、脚部は柱状	脚部に櫛描横線文と刺突文が施文され、三方透しを有し、坏部外面の上位は横ナデ、下位は縦位ヘラナデ一部分的に縦位ミガキ、内面は縦位ミガキ（右→左原）、脚部内面は縦位・横位ナデ	黄橙色 白◎黒◎砂◎	坏部1／2と裾部欠損

表－12　出土土器観察表(3)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は 推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
23-8 23-77 SD 407	壺	大(22.4) 底8.9	台部は直線的に開き、胴部はかなり薄く、球形	胴部外面上位は斜位ハケメ、下位と台部外面は縦位のハケメ、台部内面はヘラケズリ?→斜位ヘラナデ(右→左順)	黄褐色 白◎橙◎黒◎	台部と頸部1／3残存
23-9 23-81 SD 407	高坏		比較的小型で、坏部は垂直気味に開き、口縁部で外反、脚部は柱状で、裾部で外反	坏部内外面は縦位ミガキ、脚部には縦位の細形成が残り、外面は斜位ミガキ	黄橙色 白◎橙◎黒◎ 精選	坏部1／4と脚柱部残存
24-1 23-75 SD 408周辺	壺	口23.0	比較的大型で、口縁部は受け口状を呈し、口唇部は面取り	口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦位ハケメ→横ナデ	黄橙色 白◎大橙◎黒◎	口縁～胴部残存 内面に煤付着、転用か？
24-2 SD 408周辺	壺	口(12.2)	口縁部はゆるく、ラッパ状に開く単純口縁	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケメ、内面に絞り痕	黄橙色 白◎橙◎黒◎	口縁部破片
24-3 SD 408周辺	壺	口(20.6)	口縁部は外反気味に開き、端部は薄く折り返し	口唇部に又状の擬刻痕文、内面には上L R 縄文、口縁部内外面ハケメーナデ(内面ヘラ右→左順)	黄褐色 大橙◎黒◎砂◎	口縁部1／4残存
24-4 SD 408周辺	壺	口(24.2)	比較的大型で、口縁部は外反して開き、端部は厚く折り返し	口唇部内外面に又状の擬刻痕文、口縁部外面は斜位ハケメ、内面は右→左順の横位ハケメ	黄褐色 大橙△黒◎砂◎	口縁部1／2残存
24-5 SD 408周辺	高坏		脚部は柱状で、裾部はやや外反	脚部上位に2段の擬似横線文、下位に三方透し、脚部外面は縦位ミガキ、内面に絞り痕	黄褐色／精選 橙◎黒◎石◎	脚部2／3残存
24-6 SD 408周辺	高坏		脚部は柱状で、裾部はやや外反	脚部上位に3段の擬似横線文、下位に三方透し、脚部外面は縦位ミガキ、内面は縦位ナデ	黄褐色／精選 橙△黒◎	脚部2／3残存
24-7 SD 408周辺	高坏		坏部と脚部の接合部は厚く、裾部は内彎	脚部上位に三方透し、脚部外面は斜位ミガキ、内面は左→右順の横位ハケメ	黄橙色／精選 橙◎黒◎石◎	脚部1／4残存
24-8 SD 408周辺	高坏		坏部と脚部の接合部は厚く、坏部底面は内彎	脚部上位に三方透し、脚部外面は斜位ミガキ、内面はナデ、坏部内面斜位ミガキ(右→左順)	黄橙色 白△橙◎黒◎	坏部と脚部の接合破片
24-9 SD 408周辺	高坏	裾(14.4)	裾部は直線的に開き、端部は肥厚	裾部外面は縦位ミガキ、内面はハケメ、脚部内外面横ナデ	黄橙色／精選 大橙◎黒◎	裾部破片
24-10 23-82 SD 408周辺	鉢	口(13.6) 高11.7 大(13.6) 底4.3	坏部は広く、鉢形を呈し、口縁部はゆるく、ラッパ状に開き、口唇部は丸い、底面は凹底	外面は縦位・斜位ミガキ、胴部内面は不定方向であるが、横位ヘラナデ状の痕跡	黄橙色／精選 橙◎黒◎	口縁～胴部3／4欠損
24-11 SD 408周辺	鉢	口(9.4) 高(7.2) 大(10.4) 底(4.2)	小型で、最大径は胴部にあり、口縁部は短く外反	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は横位・斜位ミガキ、内面は斜位ヘラナデ(右→左順)	黄橙色 白◎大橙△黒◎	口縁～胴部1／4残存
24-12 SD 408周辺	壺	大(9.4) 底3.8	小型で、胴部は最大径が中位にありソロバン玉形	胴部外面は縦位ミガキ	黄橙色 黒◎石△　精選	胴～底部残存
24-13 22-74 SD 408周辺	坩	大(9.0) 裾(9.6)	内彎気味に大きく開く脚部が付き、口縁部は「く」字状に開き、胴部は最大径が上位にあり、球形	脚部上位に三方透し、胴～脚部外面は縦位ミガキ、胴部内面は斜位ミガキ、脚部内面は斜位ヘラナデ	黄褐色 精選 橙◎黒◎石◎	口縁部と脚部1／2欠損
25-1 SF 416	壺		坏部は直立し、口縁部は直線的に開き、端部で直立	磨滅が著しいが、口縁部外面は上位が横位→縦位ハケメ、下位は斜位ヘラナデ、内面はハケメ	橙色 橙◎黒◎　精選	口縁部破片
25-2 SF 416	壺	口(15.6)	口縁部は直線的に開き、端部は薄く折り返し	磨滅が著しいが、口唇部にキザミ、口縁部内面はハケメ～2段の横ハケ、外面はナデ	黄橙色 橙◎黒◎　精選	口縁部1／5残存
25-3 22-69 SF 416	壺	口15.7	口縁部はゆるく、ラッパ状に開き、端部は外反し、厚く折り返し	口唇部は LR 縄文、口縁部内面は上端S字状結節文の RL 縄文を2段施文、胴部外面は櫛歯状沈文を2段施文、胴部外面は横ナデ、胴部外面は斜位ミガキ、内面には指頭痕	橙色 白◎橙◎黒◎	口縁～胴部1／5残存
25-4 22-71 SF 416	壺	大(24.3) 底6.0	胴部に対して底部はかなり小さく、胴部は extending 形	磨滅が著しいため不明な点が多いが、胴部外面は斜位ハケメ、外面に一部ミガキ	橙色 黒◎　精選	胴～底部破片、内側より焼成後底部穿孔
25-5 22-70 SF 416	壺	大(22.0) 底7.9	胴部は最大径が下位にあり、無花果形	胴部外面は斜位ハケメ、胴部外面は横位ミガキ、内面は斜位ヘラナデ、底面に木葉痕	橙色／精選 大橙◎黒◎	胴～底部残存
25-6 22-72 SF 416	壺	口(18.7) 大(20.5)	口縁部はゆるく、ラッパ状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は斜位ハケメ→ヨコナデ、胴部外面は縦位ハケメ→横ナデ、胴部内面は斜位ハケメ、内面は斜位ハケメ(右→左順)	黄褐色 大橙◎黒◎	口縁部2／3と胴部1／3残存

表－13　出土土器観察表(4)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
25-7 SF 416	壺	底9.2	台部は直線的に開き、台部と壺部の接合部に粘土組	台部外面は斜位ハケメ、内面上半は斜位ヘラナデ、下半は横位ハケメ、接合部は指頭痕	黄褐色 白◎大橙◎黒◎	台部残存
25-8 SF 416	壺	大8.8 底5.0	口縁部はくく字状に開き、胴部は最大径が中位にあり、球形	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦位斜位ハケメ→斜位ヘラナデ	黄橙色 白△黒○	口縁部一部欠損
25-9 22-73 SF 416	鉢	大8.3 底4.5	比較的小型で、上面中央部に長いつまみが付き、底面はすぼまる、寸胴	上面にはハケメ、底面に木葉痕	黄褐色 白○橙◎黒○	つまみ部一部欠損
26-1 16-29 SF 418-9	壺	口30.2	比較的大型で、坏部は直立し、口縁部は内彎して開く、複合口縁で口唇部に内傾面	口縁部外側は3段以上の櫛刺突羽状文、斜位ハケメ(右→左順)、頸部外面は凸帯、横ナデ	黄褐色 白○大橙○黒△	口縁～胴部残存 口縁部内面に煤付着、転用か？
26-2 16-30 SF 418-9	壺	口24.0	頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部で開く複合口縁で口唇部は面取り	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦位ハケメ→横位ナデ、胴部内面に指頭痕	黄褐色 白◎大橙○黒◎	口縁～胴部残存
26-3 16-28 SF 418-9	壺	口16.2	頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部で開く、口唇部に内傾面	口縁部外面は5本一単位の櫛状押文が3ケ所、その下位には凸帯が巡り、胴部には3個一単位の円形押文、その上下に櫛描横走文と櫛刺突文、頸部外面に凸帯の貼痕、口縁部内外面は縦位ハケメ、胴部内面には指頭痕	橙色 精選 白○橙○黒○	口縁部と胴上部1／4残存
26-4 16-27 SF 418-9	壺	口14.8	口縁部は外反気味に開き、頸部は折り返し、口唇部は丸ヤスリ状工具による面取り	折り返し部に指頭痕、口縁部外面は斜位ハケメ→横位ナデ、口縁部内面は斜位ハケメ、頸部内面は斜位ナデ、胴部内面は斜位ナデ、胴部内面に指頭痕	黄褐色 白○橙◎黒○	口縁～胴部残存
26-5 16-25 SF 418-9	壺	口(11.5) 高13.1 大13.3 底5.2	比較的小型で、口縁部内傾気味に開く単純口縁で、胴部は最大径が下位にある鮪花崩形	口唇部は縄文もしくは櫛刺突文、口縁部外面は櫛刺突羽状文、口縁部外面は斜位ハケメ、胴部外面は斜位ハケメ→横位ヘラナデ、底部内面は横位ハケメ	黄橙色 白◎黒△砂◎	口縁部1／2欠損 口縁部内面と外面赤彩
26-6 SF 418-9	壺	口縁部はくく字に開き、比較的小型	口縁部内外面は斜位ハケメ→縦位ミガキ、頸部外面斜位ハケメ→胴部外面ミガキ、内面ナデ	胴部外面は斜位ハケメ→横位ミガキ	黄橙色 白○橙○黒◎	口縁部1／2と胴部下半欠損
26-7 16-26	壺	口15.4	口縁部はくく字状に開き、口唇部でやや内彎	頸部外面に低い凸帯が巡り、口縁部外面は右→左回縦位ミガキ、内面は左→右順ミガキ、口唇部は内外面横ナデ、胴部外面は横位ミガキ、内面には指頭痕が顕著、胴部内面はハケメ→ヘラナデ	橙色 白◎黒◎	口縁部と胴部1／4残存
26-8 SF 418-9	壺	口9.3	口縁部は直立し、口唇面は面取り	口縁部内外面は横ナデ、胴部内面は指頭痕	橙色／精選 白△橙◎黒◎	口縁～胴部残存
26-9 19-48 SF 418-9	壺	口11.6 高13.0 大14.1 底3.1	比較的小型で、頸部は広く、口縁部は短く直立気味に開き、口唇部は尖る、最大径は胴部にあり、底面は狭く不安定	口縁部内外面は縦位ミガキ、胴部外面は横位ミガキ(右→左順)、胴部内面は斜位ヘラナデ(右→左順)、胴部内面に指頭痕、胴部内面に粘いハケメ	黄橙色 白◎大橙△砂◎	口縁部1／3欠損
26-10 19-47 SF 418-9	壺	大9.0 底3.4	小型で、口縁部は「く」字状に開き、胴部はソロバン玉形	器面は磨滅して不明瞭だが、胴部外面は縦ミガキ、内面はヘラナデ、底面には木葉痕	橙色 白○大橙◎黒◎	口縁端部欠損
27-1 16-24 SF 418-9	壺	口13.7 高(27.5) 大(25.0) 底(9.2)	口縁部はく」字状に内傾気味に開き、胴部はなだらかで、胴部は最大径が下位にあり、下膨れ形	口縁部外面は横ナデ、内面は横位ミガキ(右→左順)、胴部外面は横位ミガキ、内面は斜位ヘラナデ(右→左順)、胴部内面に指頭痕	黄褐色 白△大橙◎黒◎	底部と胴部一部欠損
27-2 SF 418-9	壺	大(17.5) 底(7.2)	比較的小型で、胴部はやや長くて膨れ形、底面は凹面	胴部外面は横位ミガキ(右→左順)、内面はヘラナデ(右→左順)、底部外面には横ハケメが残り、内面は粗い放射状ハケメ(左→右順)	黄褐色 白△大橙○黒◎	胴部1／4と底部残存
27-3 19-46 SF 418-9	壺	大29.6 底8.1	頸部は直立気味に立ち上がり、胴部は最大径が下位にあり、下膨れ形	頸部外面に凸帯が巡り、胴部外面と頸部内面は櫛刺突文を施文、胴部外面は斜→横位ミガキ、内面は斜→横位ヘラナデ(右→左順)	黄橙色 白◎大橙◎黒◎	口縁部欠損 底面に木葉痕
27-4 17-34 SF 418-9	壺	大(11.5) 底5.2	胴部中位が張らんだ小型の壺	胴部外面は、縦・横位ミガキ、内面は斜位→横位ナデ、胴部内面に指頭痕	黄褐色 白◎大橙○黒◎	胴部1／3と底部残存
27-5 18-45 SF 418-9	皿	口(13.4) 高3.3 底5.6	口縁部は直線的に大きく開き、底面は凹底	口縁端部内外面は横ナデ、体部外面は斜位ハケメ→ナデ、内面は斜→横位ハケメ→ナデ、底面に木葉痕	黄褐色 精選 橙◎黒◎石△	体部1／3と底部残存

表－14　出土土器観察表(5)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
28－1 16－31 SF 418－9	壺	大29.4 底7.5	胴部は最大径が下位にあり、下膨れ形をなすが、底面は比較的小さく不安定	胴部外面には縦排横線文(右→左方向)と櫛歯波文が施文され、胴部外面は横位ミガキ、内面上位はヘラナデ、下位はハケメ、底面に木葉痕	橙色 白◎橙△黒◎	胴部と底部残存
28－2 17－32 SF 418－9	壺	大(26.0) 底9.4	胴部は無花果形で下位に膨	胴部外面に強い凹凸帯、胴部外面は斜位ハケメ→横位ミガキ、内面は斜位ハケメ(上位細かく、下位粗い)、底部外面横位ミガキ(左→右調整)	橙色 白○大橙◎黒○	胴部１／２と底部残存
28－3 17－33 SF 418－9	壺	大(29.8)	胴部は下膨れ形	胴部外面に櫛描横線文(右→左方向)、擬縄状(左→右調)と羽状(右→左調)の擬縄状突文、内面に指頭痕、胴部外面は斜位ハケメ→横位ミガキ？内面は斜位ハケメ	黄橙色 精選 白△橙○黒○	胴部１／２残存 器面はかなり剝離
28－4 18－41 SF 418－9	甕	口12.9 大14.5	比較的小型で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部はハケ状工具による面取り、台部が付き、胴部は長胴	口唇部にはハケ状工具によるキザミ、外面は下→上段の２種類の斜位ハケメ(口縁部左→右調、胴下部右→左調)、内側は粗いハケメ(口縁部は左→右調)→ヘラナデ(右→左調)	黄褐色 白○大橙○黒○	台部欠損
28－5 17－35 SF 418－9	甕	口(18.0) 大(19.5)	口縁部は直立気味に開き、口唇部には小さな面取り、胴部は球形	口唇部にはハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は縦位ハケメ(左→右調)、内面は細い横位ハケメ(右→左調)、胴部外面はハケメ、内面は２種類の斜位ハケメ(右→左調)	黄褐色 白△大橙◎黒◎	口縁部１／２と胴部１／３残存
28－6 SF 418－9	甕	口(11.9) 大(14.9)	比較的小型で、口縁部は直立し、頸部は面取り、胴部は球形	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面はハケ→ナデ→斜位ハケメ(右→左調)、内面は斜位ヘラナデ	黄褐色 白○大橙◎黒◎	口縁～胴上部１／５残存
29－1 17－36 SF 418－9	甕	口19.6 高28.6 大21.4 底10.0	台部が付き、胴部は長胴で最大径は上位にある、口縁部はく，字状に開き、口唇部は面取り	口唇部は斜位キザミ、口縁部外面は斜位ハケメ→横ナデ、内面は粗いハケメ(左→右調)、胴部外面は斜位ハケメ(右→左調)、内面は斜位ヘラナデ(右→左調)、台部外面は斜位ハケメ→端部横ナデ、内面は横ナデ	黄褐色 白○黒△石◎	ほぼ完形
29－2 17－37 SF 418－9	甕	口16.1 高23.7 大17.0 底8.6	比較的小型で、口縁部はく，字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、台部が付き、胴部はやや長胴	口唇部にはハケ状工具による斜位キザミ、外面は斜位ハケメ、口縁部内側は横位ハケメ(右→左調)、胴部内面は上部が斜位ハケメ(右→左調)、下部は粗い横位ハケメ、台部外面ナデ	黄褐色 橙◎黒○石◎	ほぼ完形
29－3 18－40 SF 418－9	甕	口17.7 大22.1	口縁部は直立し、端部は面取り、胴部は球形、内外面３ケ所に焼成前補修痕(下図)	口唇部にハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は横ナデ、外面は斜位の粗いハケメ→細かいハケメ、内面はヘラナデ→斜位ハケメ(右→左調)	黄褐色 白○橙△黒△	口縁部と胴部上半２／３残存
29－4 18－39 SF 418－9	甕	口（17.6 ） 大(22.0)	口縁部は内傾し、口唇部は面取り、胴部は最大径が上位にあり、長胴	口唇部にはハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は縦位ハケメ、内面は粗い横位ハケメ、胴部外面は斜位ハケメ(右→左調)、内面上部は斜位ハケメ(右→左調)、下部は指ナデ状のハケメ	黄褐色 白◎大橙○黒◎	口縁部１／６と胴部２／３残存
29－5 SF 418－9	甕	口(19.0) 大(22.3)	口縁部は“く，字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り	口唇部にはハケ状工具によるキザミ、外面は斜位ハケメ、口縁部内面は横位ハケメ	黄褐色 白◎砂◎	口縁部１／２と胴部１／４残存
30－1 17－38 SF 418－9	甕	口17.4 大20.3	台部が付き、口縁部は外反気味に開き、端部は丸い、胴部は球形	口唇部にはハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は２種類の斜位ハケメ(細い肌、右→左調)、内面はヘラナデ、底面は放射状のハケメ(右→左調)	黄褐色 白◎橙○黒△	台部欠損
30－2 SF 418－9	甕	口(20.0) 大(23.8)	頸部は真が張り、口縁部は直立し、口唇部は尖鋭	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ状の横位ハケメ、胴部外面は斜位ハケメ(右→左調)、内面上部はキザミ状のハケメ、下部は蜘蛛の巣状ハケメ	黄橙色 白◎大橙◎黒△	口縁～頸部１／４残存
30－3 SF 418－9	甕	口(28.8) 大(29.6)	比較的大型で、胴～口縁部は直立気味に立ち、口唇部は面取り	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦位ハケメ(左→右調)、内面は横位ハケメ(右→左調)	黄褐色 白△橙△黒△	口縁～胴部破片
30－4 19－49 SF 418－9	高坏		杯部下位に稜をもち、口縁部は直線的に開く、杯部と脚部の接合は厚く、胴部で外反	脚部中位に三方透し、杯部内外面と脚部外面は縦位ミガキ	橙色 精選 橙◎黒◎	口縁端部と脚部欠損
30－5 SF 418－9	高坏	底(12.6)	器厚から判断すると、もう少し長脚になる、脚部は直線的	脚部外面は縦位ミガキ、内面は斜位ハケメ(左→右調)、端端部内外面は横ナデ	橙色 白△黒◎　精選	脚下部１／２残存

表－15　出土土器観察表(6)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 （　）内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
30-6 18-43 SF 418-9	高坏	口19.7 高18.7 底12.2	坏部は開く、下位に稜をもち、口縁部と脚部は内湾気味に開き、口唇部に内傾面	脚部上位に三方透し、口縁部外面は縦位ミガキ（右→左原）、内面は縦位ミガキ（左→右原）、脚部外面は縦位ミガキ、内面は斜位ハケメ	黄橙色 精選 黒◎石◎	一部欠損
30-7 18-44 SF 418-9	高坏	口21.3	坏部は開く、下位に稜をもち、口縁部は直線的に開き、端部で内湾	脚部上位に三方透し、口縁部内外面は斜位ミガキ（外面右→左原）	黄橙色 白◎大橙△黒◎	脚部欠損
30-8 SF 418-9	高坏	底(11.7)	脚部はやや内湾	脚部上位に三方透し、脚部外面は縦位ミガキ、内面上位はヘラナデ、下位はハケメ（左→右原）	橙色 白△橙◎　精選	脚部１／２残存
30-9 SF 418-9	高坏	底(13.4)	脚部は大きく開き内湾	脚部外面は縦位ミガキ、内面は横位ハケメ	橙色／裾◎ 白△大橙◎黒◎	脚部２／３残存
31-1 12-2 SD 412	壺	口(22.6)	大型で、頸部は内傾し、口縁部で水平に外反。胴部はなだらかで無花果形？	口唇部は凹線をあけてのちヘサギと密なヘケ状工具によるヘサギ。胴部には凸帯が巡り、X状の櫛状突文、口縁部外面はハケメ、頸部外面は横位ナデ、胴部外面は斜位ハケメ（左→右原）	灰褐色 白△黒◎灰色小礫◎	口縁～胴部上半１／２残存 搬入品 最下層出土
31-2 12-3 SD 412	壺	口(12.3) 大(20.9)	口縁部は「く」字状に開き、口唇部は丸い。胴部は球形	口縁部外面は斜位ハケメ→横ナデ、内面は横位ハケメ→横ナデ。頸部外面上位は斜位ハケメ→一部ミガキ、下位は横位ミガキ、内面は斜位ハケメ→ヘラナデ（右→左原）、胴部内面に指頭痕	黄橙色 白◎橙◎黒◎	口縁～胴部１／３残存 底部穿孔？
31-3 13-6 SD 412	壺	口(12.0) 大(22.4)	頸部はやや狭く、口縁部は「く」字状に開き、口唇部は丸く、胴部は球形？	口縁部内外面は横ナデ→縦位ミガキ、胴部外面は斜位ミガキ（右→左原）→横位ミガキ、内面は斜位ハケメ、胴部内面に指頭痕	橙色 白△黒◎　精選	口縁部１／２と胴部上半残存
32-1 12-5 SD 412	壺	口(13.8) 大(23.4)	口縁部はやや外反気味に「く」字状に開き、胴部は最大径の下位にあり、下膨れ形	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦位ミガキ（左→右原）→横位ミガキ、内面は横位ハケメと指頭痕、頸部外面に ミガキ→横位ナデ	黄橙色 白◎大橙◎	口縁部２／３と胴部１／２残存
32-2 12-7 SD 412	壺	口(10.5) 大(20.3)	胴部は最大径が中位にあり、やや寸詰まりの感があり、口縁部は直線的に開き、口唇部はハケ状工具による面取り	口縁外面は横ナデ、内面は横位ハケメ→横ナデ、胴部外面は斜位ハケメ→斜位ミガキ、内面は斜位ハケメと指頭痕	橙色 白◎大橙△黒◎	口縁部１／６と胴部３／４残存
32-3 13-10 SD 412	壺	口8.6 高(14.0) 大11.7 底(5.2)	比較的小型で、口縁部は「く」字状に開き、口唇部は面取り、胴部は最大径が中位にあり、やや扁平。底面に焼成後の内側からの穿孔	胴部外面は凸帯が巡り、その下位に櫛描波状文が施文され、口縁部外面はハケメ→横ナデ、胴部外面は斜位・横位ミガキ、内面は横位ヘラナデ	黄橙色 白◎大橙△黒△	底部一部欠損
32-4 12-4 SD 412	壺	口15.7 高25.9 大(25.0) 底6.6	口縁は「く」字状に開き、端部は薄く折り返し、口唇部は面取り、胴部は球形で、底部は比較的小さく平安定で凹底	胴部外面は櫛描波状文・横線文（左→右方向）が施文され、その下位に逆S字状のヘラ描き、口縁部外面は斜位ミガキ、端部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位・横位ミガキ、底面に木葉痕	橙色 白◎黒◎	ほぼ完形
32-5 13-8 SD 412	壺	口16.2	口縁部は外反気味に開き、端部折り返し	口唇部と口縁部内面に付加縄文、口唇部の９ケ所に棒状浮文（２本ヨケ用、３本１ケ用）。頸部外面に凸帯が巡り、その上位は横ナデ	黄橙色 白△橙◎黒◎	口縁部残存
32-6 SD 412	壺	大(12.7) 底(5.2)	比較的小型で、胴部は最大径の下位にあり無花果形	胴部外面は横位ナデ、胴部外面は斜位ハケメ、内面は指頭痕と軽微な横ナデ調整で、底面粗いハケメ	黄褐色／裾◎ 白◎大橙◎黒◎	胴部１／２と底部残存、搬入？
32-7 13-11 SD 412	壺	大30.3	胴部は最大径が下位にあり、胴部がやや張る下膨れ形	胴部外面は櫛刺突羽状文が２段施され、３個一単位の円形浮文が２ケ所、胴部外面は横位の２条の粘土帯があり、そこを境に上位は斜位ハケメ、下位はヘラナデ、内面は上位がヘラナデ、下位はハケメ（右→左原）、胴部内面に指頭痕	黄褐色 橙◎黒◎石◎	口縁部と胴部下半欠損
33-1 13-12 SD 412	壺	大(25.1)	胴部は胴部がなだらかな無花果形？	胴部外面は下端に５条沈線間文のあるLR縄文→櫛刺突文（左→右原）、胴部外面は斜位ハケメ→一部ヘラナデ、内面は横位ハケメ（右→左原）、頸部外面は斜位ハケメ→横ナデ	黄褐色 黒◎石△　精選	胴部上半１／２残存
33-2 13-9 SD 412	壺	大22.1 底7.4	胴部は球形で、底部は凹底	胴部外面は櫛描横線文（右→左方向）と櫛刺突文は（右→左原）が施文され、胴部外面は横位ミガキ、内面は縦位・斜位ハケメで底面は放射状のハケメ（左→右原）、底面に木葉痕	浅黄橙色 白◎黒◎	胴～底部残存

表－16　出土土器観察表(7)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
33-3 SD 412	壺		頸部は直立気味に立ち、口縁部で外反	口縁部内面には上端にS字結節文のあるRL縄文が施文され、円形押文が付く。外面は斜位ハケメ、頸部外面は横ナデ、内面は粗いハケメ(右一左扱)	灰白色 白△礫◎	口縁下～頸部残存 搬入品
33-4 SD 412	壺	口(13.0)	比較的小型で、口唇部はたく、口縁部は内彎	口縁部は内外面縦位ミガキ	黄橙色／精選 白△橙◎黒◎	口縁部破片
33-5 SD 412	甕	口(28.2)	胴部は直立し、口縁部でやや開き、口唇部はハケ状工具による面取り	口唇部はハケ状工具によるキザミ、外面は斜位ハケメ(右一左扱)内面は横位ハケメ(右一左扱)	黄橙色 白○黒○	口縁～胴上部1／4残存
33-6 14-13 SD 412	甕	口(22.0) 高26.5 大24.6 底10.3	口縁部は直立気味に開き、胴部は丸みでいるが下位に張りあり、台部の付き、台部上端部の接合部は厚く、粘土紐底	口唇部はハケ状工具によるキザミ、頸部上位外面は斜位ハケメ(右一左方向・扇)、台部内外面は斜位ハケメ(左一右扱)、接合部は指頭痕	黄褐色 白◎大橙△黒◎砂◎	ほぼ完形
33-7 14-16 SD 412	甕	口14.3 大15.7	口縁部の小型で、口縁部は「く」字状に開き、胴部で外反しハケ状工具で面取り、胴部は長胴	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は横位ハケメ～胴部外面斜位ハケメ(右一左扱)内面は横位ヘラナデ(右一左扱)	黄橙色 白◎大橙◎黒◎石◎	台部欠損
33-8 14-17 SD 412	甕	口19.4 大21.9	口縁部は「く」字状に短く開き、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具による斜位キザミ、頸部外面は斜位ハケメ(左一右扱)、内面は斜位・横位ハケメ、底面は放射状のハケメ	黄褐色 白○大橙△黒○	口縁～胴部1／2残存
34-1 14-14 SD 412	甕	口(21.7) 大(24.4)	口縁部は「く」字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部はキザミ、口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は狭い斜位ハケメ(左一右扱)、内面は斜位ヘラナデ	黄褐色 白◎大橙○黒◎	口縁～胴部1／2残存
34-2 14-15 SD 412	甕	口(18.8) 大(21.6)	胴部は張んでいるが球形に近く、口縁部は「く」字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は斜位ハケメ、内面は斜位・横位ハケメ(底面は右一左扱)	黄褐色 白◎大橙◎黒△	口縁部1／3と胴部2／3残存
34-3 SD 412	甕	口(24.0) 大(28.5)	比較的大型で、口縁部は「く」字状に開き、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部は幅広のキザミ、口縁部外面は斜位ハケメ(右一左扱)～横ナデ、内面は横位ハケメ(右一左扱)頸部外面は斜位ハケメ(右一左扱)、内面は斜位・横位ヘラナデ(右一左扱)	灰白色 白△橙◎黒◎	口縁～胴部1／3残存
34-4 SD 412	甕	口(23.6) 大(28.2)	比較的大型で、口縁部は直立気味に開き、胴部は最大径の中位にあり、やや寸詰まり	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は斜位ハケメ～横ナデ、内面は横位ハケメ～ナデ、胴部外面は斜位ハケメ(右一左扱)、内面は斜・横位ヘラナデ	黄褐色 白◎橙◎黒△	口縁～胴部破片
35-1 14-18 SD 412	甕	口(28.6) 大(28.9)	比較的大型で、口縁部は外反気味に開き、口唇部は丸く、胴部は最大径が上位にある球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ハケメ(左一右扱)～頸部外面粗い斜位ハケメ(右一左扱)、内面は粗い横位ハケメ(右一左扱)	黄褐色 白△大橙△黒◎	口縁～胴部1／2残存
35-2 15-21 SD 412	壺	口6.8 高6.1 大6.9 底4.1	口縁部は直立気味に開き、口唇部は丸く、胴部最大径は頸部にあり、底部は回底	外面は縦位ミガキ(左一右扱)、口縁部内面は横ナデ、胴部内面は指頭によるナデ	黄橙色 精選 白○黒◎	完形
35-3 15-22 SD 412	壺	口7.3 高6.3 大6.6 底3.5	口縁部は直線的に開き、胴部は最大径が中位にあり球形	胴部外面は斜位ミガキ	黄橙色 精選 橙○黒◎石◎	ほぼ完形
35-4 15-19 SD 412	高坏	口21.5 高21.3 裾11.8	坏部の壁は開く、口縁部は直線的に開き、口唇部は丸い。脚部上位は粘状で、中位で屈曲	脚部中位に三方透し、外面は全て縦位ミガキ(左一右扱)、坏部内面は横位ハケメ～縦位ミガキ、脚部内面上部に絞り痕、下位にハケメ(左一右扱)～横ナデ	黄橙色 白◎橙◎黒◎	完形
35-5 15-20 SD 412	高坏	口21.8 高19.3 裾13.2	坏部の壁は強く、口縁部は外反して開く、口唇部は面取り、脚部は外反	脚部が剥離しており不明な点が多いが、外面は斜～縦位ハケメ～口縁部横ナデ、坏部内面は縦位ミガキ(右一左扱)、脚部内面上位は斜位ハケメ(左一右扱)～下位は横ナデ	黄褐色 白◎橙○黒○	口縁部1／2と裾部一部欠損
35-6 SD 412	鉢		坏部は浅く、口縁部で屈曲し、内彎気味に開く	坏部内外面はミガキ(内面は右一左扱)	黄橙色 白◎橙◎黒△	坏部1／4残存
35-7 SD 412	不明		把手状の部分に円孔が2ヶ所貫通		黄褐色 橙◎黒◎　精選	破片
35-8 SD 412	瓶		先端が尖り、断面形は円形		茶褐色 橙△黒◎石◎	破片 搬入品

表－17　出土土器観察表(8)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
36-1 24-83 SD 413	壺	大(22.8)	胴部は胴部がやや張り下位に稜を有する無花果形	胴部外面に凸帯？胴部外面は上位に斜位ハケメ、下位に横位ミガキ、内面は横位ヘラナデで、指頭痕や軸線痕が顕著	橙色／精選 橙△黒◎石△	胴部１／２残存
36-2 SD 413	壺	口13.7	比較的頸部が広く、口縁部はく字状に開き、やや内彎	口唇部内外面は横ナデ、口縁部外面はハケメ→横位ミガキ、内面は横位ミガキ	橙色 白◎黒◎　精選	口縁部１／５残存
36-3 24-85 SD 413	壺	口(17.8) 大(19.0)	口縁部はハケ状工具によるキザミ、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形？	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ハケメ(左→右順)、内面は上位が斜位ヘラナデ、下位は斜位ヘラケズリ(下→上方向、右→左順)	黄褐色 白◎黒◎小礫◎	口縁～胴部上半１／３残存
36-4 24-84 SD 413	壺	口(17.6) 大(17.7)	口縁部はく字状に開き、口唇部は丸く、胴部は最大径が上位にあり、やや長胴	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ハケメ(左→右順)、内面は粗い斜位ハケメ	黄褐色 白◎橙◎黒◎	口縁～胴部上半１／２残存
36-5 SD 413	甕	口(12.2) 大(11.9)	小型で、口縁部は内彎気味に開き、口唇部は面取り、やや長胴	口唇部はハケ状工具によるキザミ、胴部内外面はハケメ	黄橙色 白◎大橙△黒◎	口縁～胴部破片
36-6 SD 413	高坏	口(25.0)	坏部は深く、口縁部は直線的に開き、口唇部に内傾面	口縁部内外面は横位ミガキ(左→右順)	黄橙色 白◎橙◎黒◎	口縁部１／６残存
36-7 24-86 SD 413	高坏	口(19.3)	坏部下位に稜をもち、口縁部はやや内彎気味に開き、口唇部に内傾面	口唇部と稜部外面は横ナデ、口縁部外面はハケメ→斜位ミガキ、内面は横位ミガキ、杯底底面外面もミガキ	橙色 精選 白△橙◎黒◎	坏部１／５残存
36-8 24-87 SD 413	壺	大8.3 底4.9	口縁部はく字状に開き、胴部は下膨れ形で、底部は凹底	口縁部内外面は横位ミガキ、胴部外面は縦位ミガキ(左→右順)、内面は指頭による放射状のナデ	橙色 精選 橙◎黒◎石◎	口縁部欠損
36-9 SD 414	壺	口15.6	口縁部は内彎気味に開き、口唇部は面取り	口縁部外面は施刻横ナデ→斜位ハケメ→縦位ミガキ→施刻横ナデ、内面は横ナデ・横位ハケメ→縦位ミガキ	黄橙色 白◎橙◎黒◎	口縁部残存
36-10 SD 414	壺	口17.2	口唇部は丸く、口縁部はく字状に開き、頸部でやや内彎	口縁部内外面は横位ミガキ(内面左→右順)	黄橙色 白◎大橙◎黒◎	口縁部残存
36-11 SD 414	壺	口(13.5)	口縁部はく字状に開き、端部で外反し、口唇部面取り	口唇部は擬刻突文、胴部外面は凸帯が巡り、その下に擬刻突文、口縁部外面は縦位ミガキ	黄橙色 白◎大橙◎黒◎	口縁部１／４残存
36-12 SD 414	壺	口(20.7)	口縁部は大きく外反して開き、端部で薄く折り返し	口唇部は擬刻突文、頸部外面は凸帯が巡り、その上に擬刻突文状文、口縁部外面は粗い斜位ハケメ、内面は上位に横位ハケメ、下位へラナデ	黄褐色 白◎大橙◎黒△	口縁部１／４残存
36-13 SD 414	壺	口(19.3)	口縁部はく字状に開き、端部は薄く折り返し	頸部外面に凸帯が巡り、その上に擬刻突文、口縁外面は斜位ハケメ(左→右順)、内面は横位ハケメ(右→左順)	橙色 精選 橙◎黒◎石△	口縁部１／３残存
37-1 SD 414	壺	口(16.0)	比較的小型の複合口縁で、口唇部に内傾面	口縁部外面は縦位ミガキ	橙色 白◎橙◎黒◎	口縁部１／５残存
37-2 SD 414	壺	口(13.0)	比較的小型の二重口縁	口縁部内外面は横ナデ、後部外面に工具痕、その下位に斜位ハケメ	黄褐色 白◎大橙◎黒◎	口縁部１／４残存
37-3 SD 414	壺	口(23.8)	比較的大型で、頸部は直立気味に立ち、口縁部は受口状	口唇部と口縁部外面は擬刻突状文(外面は左→右順)、頸部外面は縦位ハケメ、内面は粗いハケメ(左→右順)	黄橙色 白◎黒◎	口縁部１／３残存
37-4 SD 414	鉢	口(22.0)	頸部は広く、口縁部は内彎気味に短く直立し、口唇部は面取り	口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦位ハケメ、内面は横位ミガキ、器面は磨滅	黄橙色 白◎橙◎黒◎	口縁部１／５残存
37-5 SD 414	鉢	口(19.0)	頸部は広く、口縁部は短く外反気味に開き、口唇部は面取り	口縁～胴部外面は斜位ハケメ、内面は横位ミガキ	黄橙色 白◎黒◎	口縁部１／４残存
37-6 24-89 SD 414	壺	大11.6 底3.8	胴部は球形で、底部は凹底	胴部外面は縦位ミガキ	黄橙色 白◎石◎	口縁部欠損
37-7 SD 414	甕	口(14.5) 大(18.0)	口縁部はく字状に開き、口唇部は肥取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は横ナデ、内面は横位ハケメ、胴部外面は斜位ハケメ(右→左順)、内面横位ハケメ(左→左順)	黄褐色 白◎大橙◎黒△	口縁～胴部１／３残存
37-8 SD 414	壺	底9.8	台部は直線的に開き、端部でやや内彎、接合部に粘土紐痕	台部外面上位は横位ナデ、下位は斜位ハケメ、端部横ナデ、内面は斜位ハケメ→斜位ナデ	黄橙色 白◎橙◎黒◎	台部残存

表－18　出土土器観察表(9)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は 推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
37－9 25－91 SD 414	片口	右欠参照	口(3.4)、注ぎ口含む×8.4 高4.9 底(5.4)×4.3	体部及び底面外面はミガキ	黄橙色 白○橙◎黒◎石○	1／3残存
37－10 24－88 SD 414	壺	口5.9 高7.0 大7.6 底4.4	小型で、口縁部は直立し、胴部は最大径が中位にあり、底部は凹底	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ヘラナデ(下位は右→左傾)、内面は指頭によるナデ(左→右傾)	黄橙色 精選 白△大橙△黒◎	完形 底面に木葉痕
37－11 SD 414	鉢	大(6.6) 底(3.8)	小型で、胴部は内傾気味に開き、口縁部は外反	器面は磨滅のため不明な点が多いが、胴部外面は縦位ミガキ	黄橙色 橙◎黒△石○	1／2残存 底面に木葉痕
37－12 24－90 SD 414	高坏	裾12.6	脚部は中位で折れ、裾部で内彎	脚部中位に三方透し、脚部外面は縦位ミガキ(左→右傾)、内面は上位ナデ、中位横位ハケメ(左→右傾)、下位横ナデ	黄橙色／精選 白△橙○黒◎石◎	脚部4／5残存
37－13 SD413・4	壺	口(11.0)	口縁部は短く「く」字状に開く、比較的小型	胴部外面に3条の沈線文、その下位に櫛描波状文、口縁外面は横ナデ、内面に横描波状文	橙色 白◎橙◎黒◎	口縁～胴部1／3 残存
37－14 SD413・4	壺	口(10.2)	比較的小型で、口縁部は短く直立し、口唇部で外反	口縁部外面は縦位ミガキ(右→左傾)、内面は横位ヘラナデ(右→左傾)	灰白色／精選 黒◎石△	口縁部1／2残存
37－15 SD413・4	高坏		口縁部は外反気味に開き、端部で水平となり、口唇部は面取り	口縁部は外面に櫛描波状文が施文され、内外面は縦位ミガキ	黄橙色 白△橙○黒◎	破片
37－16 SD413・4	高坏	裾(12.8)	脚部は直線的に開き、裾部で内彎	脚部外面は縦位ミガキ(右→左傾)、内面上位には放射状ヘラメ(右→左傾)、中位は横位ハケメ、下位は横ナデ	橙色 白○橙◎黒◎	脚部1／2残存
37－17 SD413・4	壺	口(9.8)	口縁部は直線的に開く、小型	口唇部横ナデ→口縁部内外面は縦位ミガキ(内外面左→右傾)	黄橙色 橙△黒△白◎	口縁部1／4残存
38－1 25－92 SD 415	壺	口14.0	口縁部は短く開き、やや内彎	口縁部外面は斜位ハケメ→横ナデ、内面は横ナデ	黄橙色 精選 白△橙◎黒◎	口縁部残存
38－2 SD 415	壺		胴部はやや張り、外面に段	段部に竹管文と櫛刺突羽状文が施文され、頸部外面は縦位ハケメ、胴部内外面は横位ヘラナデ	黄橙色 白◎橙◎黒△	頸～胴部1／4残存
38－3 SD 415	壺	口(15.8)	比較的小型で、口縁部内面に段があり、端部は折り返し	磨滅により不明な点が多いが、口縁部内外面は横位ナデ、内面は横位ハケメ	黄橙色／精選 黒◎石△	口縁部1／3残存
38－4 25－93 SD 415	鉢	口(11.4) 高9.8 大(12.3) 底6.4	小型で、口縁部は内彎気味に短く直立し、口唇部に内傾面をもち、胴部は球形で、底部は凹底	口縁部内外面は横ナデ、胴部内外面はミガキ	橙色 白◎大橙○黒◎	口縁～胴部1／3 欠損 底面に木葉痕
38－5 SD 415	壺	口(7.3) 高6.7 大(7.2) 底4.4	小型で、口縁部は「く」字状に開き、胴部がやや張り、底部は凹底	胴部外面は縦位ミガキ、内面は指頭による斜位・横位ナデ	黄橙色 白◎橙△黒△	口縁～胴部1／2 欠損
38－6 SD 415	高坏	裾(11.6)	裾部に段	裾部外面は縦位・斜位ミガキ	黄褐色 白○橙△黒△	裾部破片
38－7 25－94 SD 416	壺	口14.1 高25.8 大25.7 底(8.2)	口縁部は短く「く」字状に開き、口唇部は面取り、胴部は下膨れ形で、底部は焼成後穿孔	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は横ナデ、内面に指頭痕、胴部外面は縦位と斜位ミガキを上下に交互に施し(左→右傾)、内面は斜位ハケメで、底面は放射状のハケメ	黄橙色 白◎橙◎黒○	底部1／2欠損
38－8 25－95 SD 416	壺	大(19.0)	比較的小型で、胴部は最大径が下位にあり、下膨れ形	器面は磨滅しており不明な点が多いが、胴部外面は上段縄文、胴部外面は横位ミガキ、内面は斜位ヘラナデ	黄褐色	胴部1／3残存
38－9 25－96 SD 416	鉢	口15.3 高18.3 大19.6 底6.4	器形は広く、口縁部は短く外反し、胴部は膨部がやや張る下膨れ形で、底部は凹底	口縁部内面は横位ミガキ、胴部内外面は斜位ミガキ(右→左傾)	黄橙色 白◎大橙◎黒○	3／4残存
39－1 25－97 SD 416	鉢	口14.5 高21.0 大22.6 底7.1	口縁部はやや内傾して直線的に立ち上がり、口唇部に内傾面を持つ、胴部は球形	器面は磨滅しており不明な点が多いが、口縁部外面は斜位ミガキ、胴部外面は横位ミガキ、内面は斜位ミガキ	橙色 精選 白△黒◎	完形 底面に木葉痕
39－2 26－100 SD 416	鉢	口(16.8) 高20.9 大23.3 底5.0	口縁部は短く外反気味に開き、口唇部は面取り、胴部は球形で、底部は小さく不安定	口縁部内外面は横ナデ、外面には指頭痕が残り、胴部外面は、上位が斜位ハケメ(右→左傾)、中位が横位ミガキ、下位が横位ミガキ(右→左傾)、内面は斜位ハケメ→横位ミガキ(右→左傾)	黄褐色 白◎橙◎黒○	口縁～胴部一部欠損 胴部中位に焼成後の小穿孔

表－19　出土土器観察表(10)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 （　）内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
39-3 26-99 SD 416	壺	口(16.0) 大18.1	比較的小型で、口縁部は「く」字状に開き、胴部が張り、胴部と台部の接合部に粘土紐痕	口唇部はヘラによるキザミ、口縁部外面は横位ヘラナデ、内面は横位ハケ、胴部外面は斜～横位ハケメ（右→左原、中位は左→右方向）、内面は横位ヘラナデ（右→左原）、底面は鋸歯の基状のヘラナデ	黄褐色 白◎黒◎	頸部1／2と台部の一部残存
39-4 25-98 SD 416	壺	口(18.2) 大(17.8)	比較的小型で、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部外面は斜位ハケメ、内面は横位ハケメ、胴部外面は横位ハケメ（右→左原）、内面は斜位ヘラナデ（左→右原）	黄褐色 黒◎石◎	口縁部1／8と胴部1／4残存
39-5 SD 416	高坏		脚上部は柱状	脚部外面は、上位に櫛描横線文と櫛刺突文、中位は縦位ミガキ、内面は斜・横位ナデ（右→左原）、脚裾部位に三方透し	灰白色 精選 黒◎石◎	脚上部残存
39-6 SD 416	高坏	裾9.8	脚部は直線的に開く、比較的小型	脚部中位に三方透し、脚部外面は縦位ミガキ、内面は横位ハケメ→横位ヘラナデ	黄褐色 白◎黒○	脚部残存
39-7 26-101 SD 420	壺	口(9.4)	比較的小型で、口縁部は「く」字状に開き、口唇部は面取り	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ミガキ→横位ミガキ、内面には指頭痕	橙色 白◎橙○黒○	口縁部1／6と胴上部残存
39-8 SD 420	壺		比較的大型で、口縁部は受口状を呈し、口唇部は面取り	口唇部に櫛刺突文、口縁部外面に櫛刺突羽状文を施文	黄橙色 白◎大橙◎黒◎	口縁部破片
39-9 26-102 SD 420	鉢	口19.1 高15.8 大21.6 底6.8	口縁部は短く「く」字状に開き、口唇部は面取り、胴部は球形で、底面は凹底	器面は磨滅のため不明な点が多いが、口縁部外面は縦位ハケメ→横ナデ、内面は横ナデ、胴部外面は斜・横位ミガキ、内面は斜位ハケメ→横位ミガキ、底部外面はヘラケズリ	橙色 白◎橙△黒◎	口縁部一部欠損
40-1 SD 417	壺	口(15.6)	口縁部は外反気味に開き、頸部は折り返し	口唇部に櫛刺突羽状文、胴部外面に櫛描横線文、口縁部外面は横位ナデ、内面は横位ヘラナデ	黄橙色／精選 白△橙◎黒◎	口縁部1／4残存
40-2 SD 409	壺	大9.9 底5.0	小型で胴部はなだらかでやや長胴、底面は凹底	胴部外面は縦・斜位ミガキ、内面は斜位ナデ、底面中央に木葉痕	黄橙色 白◎橙△黒△	胴～底部1／2残存
40-3 SD 422	鉢	口(10.8) 高7.8 大(10.4) 底5.4	小型で、口縁部は「く」字状に開き、胴部がやや張り、底面は凹底	口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦位ミガキ（右→左原）、内面は斜位ナデ（右→左原）、底外面中央部はナデ	黄橙色 白△橙◎黒◎	胴～口縁部1／2欠損
40-4 SD 422	高坏		裾部はやや内彎	裾部外面に粗いハケメ、その下位に凸帯が巡り、内面はヘラナデ	橙色／精選 白△橙◎黒◎	裾部破片 大幅に推定復元
40-5 26-103 SD 423	壺	口(11.1) 高15.4 大13.3 底5.4	口縁部は長く内彎気味に開き、口唇部に内傾面、胴部は胴部のやや張る扁花扇形を呈し、底面は凹底	口縁部外面は縦位ミガキ、胴部外面は縦位ミガキ（右→左原）、内面は斜位ハケメ（右→左原）、底面はハケメ	黄橙色 白◎橙◎黒△	口縁部1／2欠損
40-6 26-104 SD 423	壺	大(14.5) 底(6.0)	比較的小型で、胴部は胴部のやや張る扁花扇形	器面は磨滅のため不明な点が多いが、胴部外面は縦位ミガキ、内面は斜位ハケメ（右→左原）、底面は鋸歯の基状のハケメ	黄橙色 精選 大橙△黒◎石○	口縁～底部3／4残存
40-7 SD 423	壺	口(8.1) 大(8.6)	口縁部は直線的に開く、小型	口縁部外面は2段の櫛刺突羽状文、胴部外面は縦位ミガキ、内面はナデ	黄橙色／精選 橙△黒○	口縁部1／3と胴部の一部残存
40-8 SD 423	高坏	口(23.3)	坏部は内彎気味に開き、口縁部で外反、口唇部は面取り	口縁部外面に櫛描波状文、内面は縦位ミガキ、坏部外面は斜位ミガキ	橙色 白◎橙△黒◎	坏部1／3残存
40-9 26-105	高坏	口(24.6) 高21.9 裾13.9	坏部は内彎気味に開き、口縁部で立ち上がり、端部で外反、胴部は直線的に開き、裾部で内彎	口縁端部は横ナデ、坏部外面は斜位ハケメ→斜位ミガキ、内面は縦位ミガキ、脚部上位に三方透し、その上下に櫛描横線文、下位外面は斜位ハケメ→斜位ミガキ、内面はヘラナデ、裾部内外面は横ナデ	橙色 白◎橙◎黒◎	坏部3／5欠損
40-10 23-78 SF 415	壺	口(17.3) 大(18.7)	口縁部は「く」字状に開き、口唇部は面取り、胴部は球形	口唇部はハケ状工具によるキザミ、口縁部内外面は斜位ハケメ、胴部外面は斜位ハケメ→斜位ミガキ、内面は横位ハケメ→横位ヘラナデ（右→左原）	黄褐色 白○大橙○黒△	口縁～胴部1／4残存
40-11 SD 408	高坏		脚上部は柱状	脚部中位に三方透し、脚上部外面は縦位ミガキ、内面は斜位ハケメ	灰白色／精選 橙○黒◎	脚上部残存
41-1 SF 404	壺			肩上部に細かな櫛描波状文、その上下に櫛描横線文、その下位に斜位ハケメ→ミガキ	黄橙色 白○黒△	肩部破片 拓影図

表－20　出土土器観察表(11)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
41-2 SF 404	壺			肩上部に櫛描横線文と雑な扇形文を数段施文	黄橙色 白△黒◎	胴部破片 拓影図
41-3 SF 404	壺			肩上部に櫛描横線文、その上下に櫛刺突文を施文	黄橙色 橙◎黒○石△	肩部破片 拓影図
41-4 SF 404	不明		破片のため形態は不明な点が多いが、他の土器とは異質	外面に凸帯が巡り、その上下に櫛描横線文、その下位に刺突文を施文	黄橙色 白△橙△黒○	破片 拓影図
41-5 SD 408周辺	壺		比較的大型で、口縁部はやや内傾気味に開く複合口縁	口縁部外面に櫛刺突羽状文を施文	黄褐色 白◎橙◎黒◎	口縁部破片 拓影図
41-6 SD 408周辺	壺			肩部下端に S 字状結節文を有する RL 縄文を施文、その下位はヘラナデ	茶褐色 白○黒△	肩部破片 拓影図
41-7 SD 408周辺	壺			肩部に雑な波状沈線文、その下位は斜位ハケメ	灰白色 橙◎黒○石△	肩部破片 拓影図
41-8 SD 408周辺	壺		折り返し口縁	折り返し部が欠損しているため、2段に施文されているかもしれないが、口縁部に竹管文	黄橙色 白△橙◎黒◎	口縁部破片 拓影図
41-9 SD 408周辺	壺			肩部に上から櫛描横線文、櫛刺突文、円形浮文、細かな櫛描波状文、櫛刺突文を施文	黄橙色／精選 橙◎黒△	肩部破片 拓影図
41-10 SD 409	壺			肩部に上端に S 字状結節文を有する LR 縄文を 2 段施文	黄橙色／精選 橙○黒◎	肩部破片 拓影図
41-11 SF 414	壺			肩上部にヤサラ状工具により、上から斜格子文、刺突文、横線文を施文	灰色 白△黒◎	胴部破片 拓影図
41-12 SD 412	壺		折り返し口縁	口縁部に「×」状の櫛刺突文	黄褐色 大橙◎黒◎石◎	口縁部破片 拓影図
41-13 SD 412	壺		口縁部は内傾して開き、口唇部は面取り	口縁部内外面は横位ミガキ	黄橙色／精選 橙○黒◎石○	口縁部破片 拓影図
41-14 SD 412	壺		口縁部は外反気味に開く折り返し口縁	口縁部内面は櫛刺突文が3段施文され、その下位は縦位ミガキ、外面は縦位ハケメ→横ナデ	黄橙色／精選 黒◎砂◎	口縁部破片 拓影図
41-15 SD 412	壺		折り返し口縁	口唇部に櫛刺突文、折り返し部に2本の棒状浮文	淡橙色 橙◎黒◎石○	口縁部破片 拓影図
41-16 SD 412	壺			肩上部に櫛描波状文、その上下に櫛描横線文を施文	黄橙色／精選 黒◎石△	胴部破片 拓影図
41-17 SD 412	壺			肩部に、櫛刺突横線文が3条、その下位に櫛刺突羽状文、その下位は縦位ハケメ	黄橙色 白◎橙○黒△	肩部破片 拓影図
41-18 SD 412	壺			肩上部外面に凸帯が巡り、その上に櫛刺突羽状文、その下位に櫛描波状文を施文	灰褐色 大橙○黒◎砂◎	肩部破片 拓影図、搬入品
41-19 SD 412	壺			肩部に櫛描横線文と櫛刺突文を3段に施文、その下位に横位ミガキ、内面は斜位ハケメ	黄橙色 白◎橙◎黒◎	胴部破片 拓影図
41-20 SD 414	壺			肩上部に、上から櫛描横線文、「ハ」状の櫛刺突文、櫛描波状文、櫛描横線文を施文	茶褐色／精選 白△橙○黒◎	胴部破片 拓影図
41-21 SD 414	壺		41-22と同一個体	肩部に円形浮文が付き、櫛描横線文と櫛刺突文を2段に施文	黄橙色 黒◎石○	肩部破片 拓影図
41-22 SD 414	壺		41-21と同一個体	肩部外面に凸帯が巡り、その下位に円形浮文、上から櫛描横線文、櫛刺突文、櫛描横線文施文		肩部破片 拓影図
41-23 SD 414	壺			肩上部に櫛刺突羽状文と櫛描波状文が施文され、その下位は縦位ハケメ	黄橙色 白◎黒◎	胴部破片 拓影図
42-1 20-51 SX 302	壺	口27.8 大(39.8)	大型で、口縁部は大きく開いた二重口縁で、口唇部はハケ状工具による面取り、胴部は算盤のややなだらかな球形	口縁部には、一単位3本の棒状浮文が6ヶ所、胴部には凸帯が巡り、その上には櫛刺突羽状文、その下位に櫛描横線文、櫛刺突横線状文、櫛描横線文、櫛刺突横線文を施文、一単位2個の竹管文のある円形浮文が指定3箇所に付く。口縁部内外面は縦位ミガキ、胴部外面は横位ミガキ、内面は斜位ハケメ	橙色 精選 黒◎ 白色粘土粒子◎	口縁部3／5と胴部1／3残存

表－21　出土土器観察表(17)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 （ ）内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
42-2 SX 302	壺	口(18.8)	頸部が直立気味に立ち上がる二重口縁	口縁部外面は斜位ハケメ→横ナデ、内面は横ナデ、頸部外面は斜位ハケメ(右→左環)、内面は横位ハケメ、肩部外面に刺突のある低い凸帯	茶褐色 精選 白◎橙○黒○	口縁～頸部1／2 残存
42-3 20-52 SX 302	壺	□24.0	頸部は直立し、口縁部で水平に開き、口唇部で短く直立	口唇部と一単位3本の櫛状浮文が3箇所と4ヶ所に付く、口縁部内面に櫛刺突羽状文。口唇部と頸部の外面に部分的にハケメ	黄橙色 精選 白△大橙△黒◎	口縁部2／3と頸部残存
42-4 SX 302	壺		比較的大型	肩部は欠損による有段羽状文	灰色 橙◎砂◎	肩部破片 拓影図、搬入品
42-5 20-53 SX 302	甕	口(18.1) 大(24.6)	口縁部はく字状に開き、口唇部は尖り、胴部は球形	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ハケメ、内面は斜位ヘラナデ(右→左環)	黄橙色 白○黒◎小橙◎	口縁～胴上半部1／3残存
43-1 SX 302	甕	口(14.6)	口縁部はく字状に開き、端部は尖り気味、比較的小型	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦位のハケメ、内面は横位ヘラナデ(右→左環)	黄褐色／大橙◎白○黒△砂◎	口縁～胴部1／4残存
43-2 SX 302	甕	口(17.2)	口縁部はく字状に開き、端部でやや外反	口縁部内外面縦位のハケメ(内面左→右環)→端部内外面横ナデ、胴部外面も幅広のハケメ	黄褐色／大橙◎黒◎砂◎（赤△）	口縁～胴部1／4残存
43-3 SX 302	甕	口(17.6) 大(20.2)	口縁部は短く外反気味に開き、口唇部は面取り、胴部は球形	口縁部外面は横ナデ、内面は横位ハケメ(左→右環)、胴部外面は斜位ハケメ、内面は斜位ヘラナデ(右→左環)	黄褐色 白△大橙◎黒○赤△	口縁～胴部1／4残存
43-4 SX 302	甕	口(20.4)	口縁部は直立し、口唇部は丸い、大型な推定だが、比較的大型	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦位ハケメ	黄褐色／白◎大橙△黒◎礫◎	口縁～胴部1／6残存
43-5 SX 302	甕	口(18.1)	胴部が張り、S字状口縁	口縁部内外面は横ナデ、頸部にはヘラによる沈線が巡り、胴部外面は斜位ハケメ(左→右環)	黄褐色 白△橙◎黒◎	口縁～胴部1／6残存
43-6 SX 302	甕		器厚は比較的厚く、S字状口縁		黄橙色 黒○赤△	口縁部片
43-7 SX 302	甕	口(39.6) 大(39.3)	比較的大型で、口縁部は直立気味に開き、端部は折り返し	口縁端部内面の横ナデを除き、口縁～胴部内外面は縦位の斜～横位ハケメ	黄褐色 白○大橙○黒○	口縁～片部破片 器形は大幅推定
43-8 SX 302	甕	底(9.0)	台付甕	胴下～台部外面は斜位ハケメ(左→右環)、台部内面は放射状のナデ(左→右環)、裾部横ナデ	黄褐色 黒○石△礫◎	胴下～台部残存
43-9 SX 302	甕	底3.2	底部は平底だが、小さく不安定	底部外面はヘラケズリ(下→上方向、右→左環)、内面は放射状のハケメ(左→右環)、底面ケズリ	黄橙色 白△橙△黒◎	底部残存
43-10 20-55 SX 302	高坏	口(23.0) 高16.3 裾13.4	坏部は比較的深く、口縁は内彎気味に開く、脚部は直線的に開き、裾部で外反	口縁端部は内外面横ナデ、坏部内外面は縦位ミガキ(外面左→右環、内面右→左環)、脚部外面も縦位ミガキ(右→左環)、裾部内外面横ナデ、脚上部に三方透し	黄橙色 精選 白◎橙△黒◎	口縁部1／2と底部1／3残存
43-11 20-54 SX 302	高坏	口12.9	比較的小型で、坏部は稜状を呈し、裾部は大きく外反	坏部内外面と脚部外面は縦位ミガキ(右→左環)、脚部内面は横位ハケメ(左→右環)、脚部上下2段の四方透し	黄橙色 精選 黒◎	口縁部の一部と裾部欠損
43-12 SX 302	器台	口(11.0)	器受部は鋭状	器受部外面は縦位ミガキ	黄橙色 白○大橙△礫◎	口縁部2／3と脚部欠損
43-13 SX 302	器台			脚部に三方透し、脚部外面は縦位ミガキ	黄橙色／精選 黒○石○	脚上部残存
43-14 20-56 SX 302	鉢	口11.8 高6.3 底3.6	小型で、口縁部は直線的に大きく開き、胴部は鋭状	口縁～底部外面横位ミガキ(胴部外面右→左環)、底面もミガキ	黄橙色 橙△黒○石○	ほぼ完形
44-1 27-107 SX 201	碗	口(15.2) 高3.8 底6.4	体部は浅く、口縁端部は強く外反、貼付け高台の断面形は三日月形	体部内外面は平滑に仕上げられており、体部内面には径6.4cmの重ね焼き痕	暗灰白色	底部5／8と体部1／8残存 灰釉陶器
44-2 27-108 SX 201	碗	口(14.0) 高3.2 底(6.8)	体部は浅く、口縁端部は弱く外反、貼付け高台の断面形は逆台形	体部内外面は平滑な仕上げ	灰白色	底部1／2と体部3／8残存 灰釉陶器
44-3 27-106 SX 201	碗	口(13.2) 高4.0 底6.0	体部は直線的に開き、口縁端部で弱く外反、底部は厚く、貼付け高台の断面形は逆台形	体部内外面は平滑に仕上げられており、内面に輪ナデ痕、底面に糸切り痕	灰黄色 黒色粒子○	体底1／4と底部残存 灰釉陶器
44-4 SX 201	碗	口(13.7) 高3.8 底(6.0)	口縁端部は強く外反、貼付け高台の断面形は逆台形	体部内外面は回転ナデ、内面に重ね焼き痕	灰黄色 黒色粒子○	体部の一部と底部1／3残存 灰釉陶器

表－22　出土土器観察表(13)

計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 （　）内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
44-5 SX 201	碗	底6.2	貼付け高台の断面形は逆台形	内面には重ね焼き痕があり、その内側は青灰色、底面に糸切り痕	灰白色	体部上半欠損 灰釉陶器
44-6 SX 201	碗	底6.6	底部は厚く、焼き膨れが認められ、貼付け高台の断面形は三日月形	内面には釉がけき、重ね焼き痕が認められ、底面には糸切り痕	灰黄色	体部3／4と高台2／3欠損 堅緻、灰釉陶器
44-7 SX 201	碗	底7.6	底部はやや厚く、貼付け高台の断面形は三角形	内面に重ね焼き痕があり、その内側は灰色	灰白色	底部残存 灰釉陶器
44-8 SX 201	坏	口(13.0) 高(3.6) 底(5.5)	口縁部は直線的に開き、口唇部は尖鋭	口縁端部外面は横ナデ、体部外面は緩位ナデ、内面は横位ヘラナデ	黄橙色 黒◎	体部1／5残存 土師器
44-9 SX 201	坏	口(11.6) 高3.7 底(4.6)	口縁部は直線的に開き、口唇部は尖鋭	口縁端部外面は横ナデ、体部外面には指頭痕と粘土紐痕、内面は横位ヘラナデ	黄橙色 黒◎	口縁～底部2／5残存 土師器
44-10 SX 201	坏	口(13.1)	口唇部は尖鋭	口縁端部内面に比較、口縁部外面は横ナデされ、粘土紐痕が残る、内面は横位ナデ	黄橙色 黒◎	口縁部破片 土師器
44-11 27-110 SX 201	皿	口(14.5) 高3.4 底(7.2)	高台は高く、口唇部は尖鋭	口唇部は横位ナデ、体部外面は指頭痕、内面はヘラナデ	黄橙色 黒◎輝石◎	口縁～底部1／4残存
44-12 27-109 SX 201	皿	口15.5 高3.7 底7.8	高台は比較的高く、口唇部は尖鋭	体部外面は緩位ヘラナデ→横位ナデ、内面は横位ヘラナデ	黄橙色 黒◎石○	体部1／2欠損 土師器
44-13 SX 201	瓶	口(9.4)	口縁部は直線的に開き、端部で強く外反	口縁部外面は平滑な仕上げ、内外面には釉がけ等	灰白色 黒色粒子○	口縁部1／4残存 灰釉陶器
44-14 SX 201	壺		口縁部は水平気味に短く外反	口縁部内外面は横ナデ	黄橙色 黒◎	口縁部破片 土師器
44-15 SD 102	皿	口(10.5) 高2.3 底(8.0)	高台の器厚は薄い、比較的小型	体部外面は丁寧なナデ、内面には重ね焼き痕、底面は回転ヘラケズリ、体部外面と内面上半部に赤茶色の鉄釉	赤褐色（断面黒色）	口縁～底部1／6残存
44-16 SD 102	壺		口縁中央部は凹む、大型		橙色 橙◎黒◎	口縁部破片 レンガ質
44-17 SD 210	鍋	口(22.4) 大(22.6)	口縁部は水平気味に開き、端部は内側に折り返し、器厚は非常に薄手	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は幅広の深い斜位ハケメ（右→左方向）、内面はハケ状工具による横位ナデ	灰褐色 精選 黒◎	口縁～胴部1／3残存 土師器
44-18 28-121 SD 210	羽釜	口(19.6) 大(24.2)	口縁～胴部は球形で、口縁部外面に鍔が巡り、口縁部は受孔され、器厚は非常に薄手	胴部外面は幅広の深い斜・横位ハケメ（左→右方向）、内面はハケ状工具による横位ナデ	黄褐色 精選 黒○	口縁～胴部1／2残存 土師器
44-19 SD 210	羽釜	口(26.4) 大(32.1)	口縁は外反気味に内傾し、端部で内側に折れる、外面には短い鍔が巡り、胴部は真の張る球形、器厚は非常に薄手	胴部外面は上位が斜位ハケメ、下位はヘラケズリ（右→左方向、右→左方向）、内面は上位がハケ状工具による横位ナデ（左→右方向）、下位はヘラケズリ（右→左方向）	黄褐色 精選 黒△	口縁～胴部1／6残存 土師器
44-20 SD 210	擂鉢	底(12.0)		内面には櫛目をあけて擂目が施され、底面には糸切り痕	茶褐色	底部1／5残存
44-21 SD 210	卸皿	底5.9		卸目はヘラによる斜格子、底面に糸切り痕、内外面に部分的に施釉色の灰釉付着	灰白色 白色粒子◎	底部残存 古瀬戸
44-22 28-120 SD 210	皿	口(11.2) 高1.9 底(6.4)	体部は直線的に開く、比較的小型	口縁部内外面に緑色の灰釉、底面に糸切り痕	灰白色 （内面黒色） 白色粒子◎	口縁～底部1／2残存 古瀬戸？
44-23 SD 210	碗	底(6.7)	貼付け高台の断面形は逆台形		灰色 石○	底部1／2残存 山茶碗
44-24 SD 210	碗	底(8.4)	貼付け高台の断面形は三角形、底部の器厚は薄い		灰白色	底部破片 山茶碗
45-1 28-119 SD 308	碗	口(15.3) 高6.1 底(7.6)	体部は直線的に開き、口唇部は丸く、貼付け高台の断面形は逆台形	体部内外面は回転ナデ、口縁端部外面と胴部内面を強く押さえ、底面には糸切り痕	灰白色 黒色粒子○	口縁～底部1／5残存 山茶碗
45-2 SD 210	碗	口(17.5)	口縁端部は僅かくびれ	口縁部内外面は回転ナデ	灰白色	口縁部破片
45-3 SD 211		底(6.8)	底部は厚手、貼付け高台の断面形は逆台形	底部内面に緑灰色の釉	灰白色	底部1／2残存
45-4 SD 212	碗	底6.6	貼付け高台は粗く作られており、底部は厚手	底面に糸切り痕	灰黄色／白色粒子○黒色粒子○	底部残存 山茶碗

表－23　出土土器観察表(4)

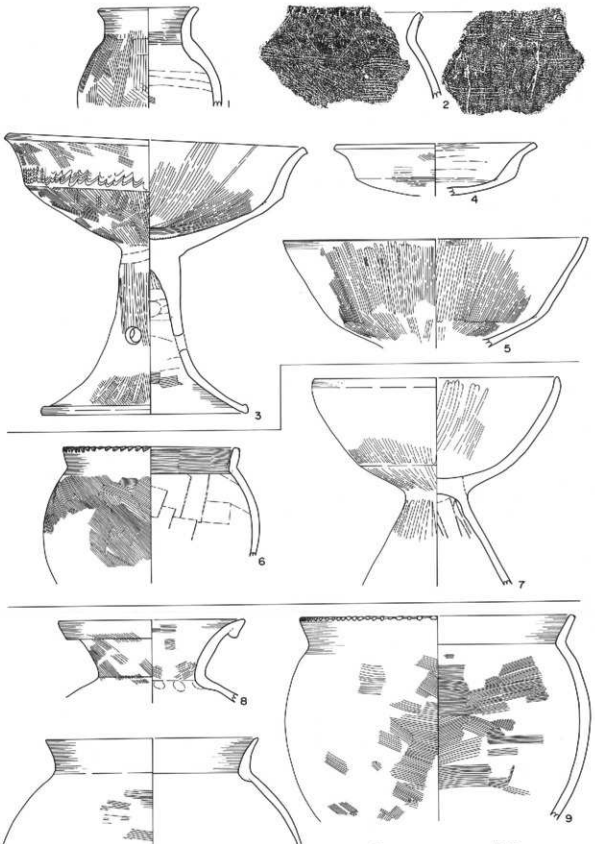
計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 ( )内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
45-5 SD 212	壺			胴部外面に2条の平行沈線が巡り、その上に緑色の灰釉	赤褐色	胴部破片 三筋壺
45-6 SD 212	擂鉢		口縁端部はやや外反し、口唇部は面取り	口縁部内外面に黒炭の鉄釉	黄白色 砂△	口縁部破片
45-7 SD 301	碗	底7.9	高台は「ハ」字形に開き、底部は比較的厚手	底部内面に黒炭？外面に糸切り痕	灰白色（高台部は青灰色）	底部４／５残存
45-8 SD 302	片口	口(11.4) 高3.1 底(4.7)	口縁部は指頭により注ぎ口をつくり、体部は内湾気味に開き、口唇部は尖鋭	内外面に指頭痕	橙色（断面黒色） 精選、橙◎黒◎	土師器
45-9 SD 302	壺	口(11.6)	口縁部は内傾し、口唇部で肥厚	口縁～胴部内外面は回転ナデで無光沢の鉄釉で、その上に白濁状の釉	黒褐色 白色粒子◎	口縁～肩部１／５残存、短頸壺
45-10 SD 303	碗	底(8.0)	貼付け高台は高く直立、底部は厚手	底部内面に重ね焼き痕、外面には使用痕（艾用硯？）	灰色	底部破片 灰釉陶器
45-11 SD 304	碗	底8.2	貼付け高台は高く「ハ」字状に開く、底部は厚手		灰白色（高台部は青灰色）	底部残存 灰釉陶器
45-12 SD 304	皿		体部は内彎	体部内外面は赤褐色の鉄釉	黒褐色 白色粒子◎	体部破片 初山焼？
45-13 SD 307	碗	底(8.0)	貼付け高台は高く、「ハ」字状に開く	底面に糸切り痕	灰白色 白◎	底部破片 灰釉陶器
45-14 SD 307	碗	底(7.0)	貼付け高台は低く、断面形は矩形、底部は厚手		灰白色 黒色粒子○	底部１／２残存 山茶碗
45-15 SD 308	鉢	口(32.5)	体部は内彎気味に開き、口縁端部は肥いくびれ	体部内外面は回転ナデ、体部外面に粘土紐接合痕、内面下位に釉	灰色 白色粒子△	体部破片
45-16 SD 308	碗	口(14.8)	体部は比較的強く、やや内彎気味に開き、口縁端部に弱いくびれ	体部内外面は緑色の灰釉、内面にピン跡	灰白色	体部１／４残存 古瀬戸平碗
45-17 27-113 SD 308	碗	口(15.7) 高6.4 底6.1	腰部に丸味を持ち、体部は直線的に開く、貼付け高台の断面形は逆台形	体部内外面は回転ナデ、口唇部と体部内面の一部に釉付着、底面に糸切り痕	灰白色 精選	体部１／３と底部残存 山茶碗
45-18 27-114 SD 310上層	碗	口(15.9) 高5.6 底(7.6)	体部は内彎気味に開き、口唇部は尖り、貼付け高台は略逆台形	口縁端部に輪花、口縁部に灰釉掛け掛け、体部内外面は回転ナデ	灰白色 精選	口縁～底部１／２残存 山茶碗
45-19 SD 310上層	碗	口(18.8) 高5.1 底(8.0)	体部は内彎気味に大きく開き、貼付け高台は低く、断面形は三角形	体部内外面は回転ナデ	灰色	口縁～底部１／２残存 山茶碗
45-20 SD 310上層	鉢	底(13.2)	貼付け高台は「ハ」字状に開き、体下部は直線的	体部内外面は回転ナデ、体部内面に白泥	緑灰色 白◎	体下～底部１／４残存
45-21 27-116 SD 310	碗	口(15.2) 高5.0 底7.0	体部は直線的に開き、口縁端部でやや外反、貼付け高台は小さく、断面形は逆台形	体部内外面は回転ナデ、底面に糸切り痕	灰白色 白○	体部１／２欠損 山茶碗
45-22 27-115 SD 310	碗	口15.3 高4.9 底6.5	体部は直線的に開き、底部は厚く、貼付け高台は低く、断面形は矩形	体部内外面は回転ナデ、底面に糸切り痕	灰白色 白△黒色粒子○	完形 山茶碗
45-23 27-117 SD 310	皿	口8.2 高1.7 底4.0	体部は直線的に開き、口縁部内面に稜、小型	口縁部内面に一部釉付着、体部内外面は回転ナデ、底面に糸切り痕	灰白色	完形 山皿
46-1 27-111 SD 310	碗	口15.9 高5.4 底5.2	腰部は丸味を帯び、口縁端は直線的に開く、高台はかなり低いが、断面形は逆台形	体部外面は強いナデ、内面は平滑	灰黄色 白△	口縁部１／３欠損 山茶碗
46-2 27-112 SD 310	皿	口8.7 高2.0 底6.1	小型で、体部は直線的に開き、口唇部は面取り	底面に糸切り痕、口唇部に鉄釉色の釉付着	灰色 石○黒色粒子◎	完形 山皿
46-3 SD 201・2	皿	口10.2 高2.2 底4.3	口縁部はやや内彎気味に開き、底面は丸味を持ち、比較的小型	内外面ナデ	黄橙色（断面黒色）／精選 橙◎黒△	口縁部１／５欠損 土師器
46-4 SD 201・2	瓶	底6.8	貼付け高台の断面形は矩形	底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、内外面に緑色の釉付着	灰色	底部残存 灰釉陶器
46-5 SD 201・2	碗	底(7.0)	貼付け高台の断面形は三日月形	底部外面に墨書、内面に重ね焼き痕、内外面は平滑	灰白色	底部２／３残存 灰釉陶器

表－24　出土土器観察表(15)

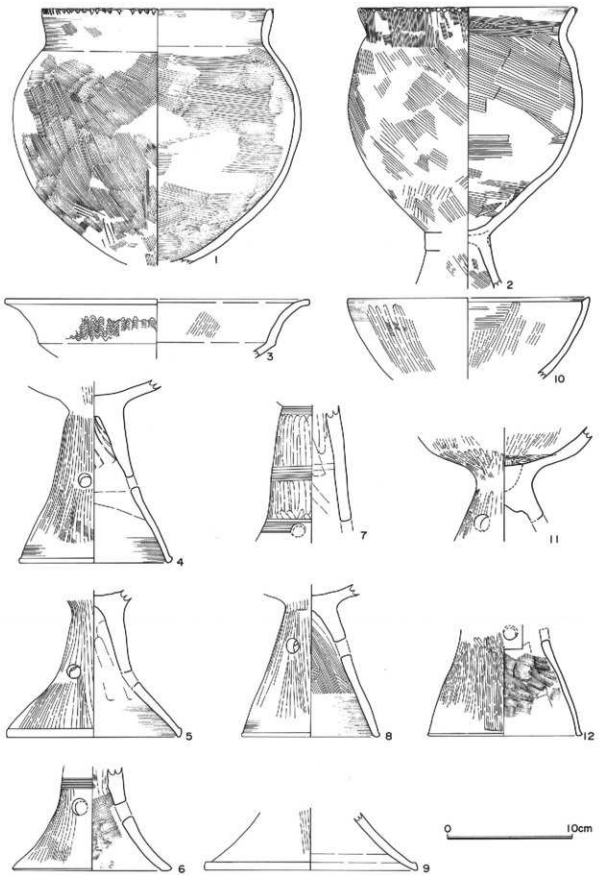
計測値の単位はcm

挿図番号 写真番号 出土遺構	器種	計測値 （　）内は推定値	形態の特徴	文様・調整の特徴	色調 胎土	備考
46－6 SE 1	碗	口(12.0)	腰部は丸く、口縁部で直立 (写真28－122)	体部内外面は光沢のある茶褐色の鉄釉で、口縁部内外面は白濁し、露胎部は化粧掛け	灰白色	体部１／２残存 尾呂形茶碗
46－7 SE 1	碗	口(12.7)	口縁部は緩やかに屈曲し、口唇部は尖鋭	体部内外面は茶褐色の鉄釉	灰白色	体部１／２残存 天目茶碗
46－8 SE 1	皿	口(10.2) 高2.0 底(6.2)	比較的小型で、腰部は丸く、削り出し高台	体部内外面は茶色の鉄釉	黒灰色 白◎黒色粒子◎	初山焼
46－9 28－123 SE 1	皿	口(11.8) 高2.5 底6.9	体部の開きは直線的	体部内外面は回転ナデ、底面には糸切り痕	黄橙色 白○橙◎黒△	体部１／４と底部残存 土師器
46－10 SE 1	擂鉢	口縁部は内側にやや肥厚		口縁部内外面は光沢のない赤褐色の鉄釉	黄白色 白△	口縁部破片 古瀬戸
46－11 SE 1	擂鉢	底(8.2)		底部内外面は光沢のない赤褐色の鉄釉	黄白色 白△	底部破片
46－12 SE 6	皿	口(7.8) 高1.8 底(3.0)	腰部は丸く、小型	体部外面は指頭によるナデ	黄橙色	口縁～底部１／２残存 土師器
46－13 SE 6	碗		底部の器厚は厚手		灰色 白△	底部残存 山茶碗
46－14 SE 7	皿	口(10.0) 高2.5 底(5.0)	口縁部はやや外反、底部は削り出し高台	体部内外面は回転ナデ	灰褐色	体部１／７残存 初山焼？
46－15 SE 7	皿	口(11.0) 高2.4 底(5.3)	腰部は丸く、口唇部は面取り	体部内外面は回転ナデ	黄橙色／精選 白△黒◎	体部１／３残存 土師器
46－16 SE 7	壺			胴部外面に緑灰色の灰釉が掛けられ、部分的に掛き目	赤褐色 白△黒色粒子△	胴部破片 常滑
46－17 SE 7	鉢		口縁部は直立し、口唇部に内傾面	口縁部内外面に光沢のない鉄釉	黒褐色 白◎	口縁部破片
46－18 SE 8	碗	底7.5	高台はやや高く「ハ」字状に開き、薄手	内面の一部に釉付着	灰白色	底部残存 灰釉陶器
46－19 SE 8	壺	口(32.4)	口縁端部は水平	口縁部外面に３条の沈線が巡り、口縁部内外面は光沢のない茶色の鉄釉	赤褐色 白○	口縁部破片 常滑？
46－20 SP 2052	碗	底3.2	高台は小さく不安定で、削り出し高台の断面形は矩形	底部内外面は黄白色の長石釉	黄白色	底部破片 白磁
46－21	碗	底6.4	腰部はやや丸く、貼つけ高台は低く撫れ、底部は厚手	体部内外面は回転ナデ、体部内面の一部に釉付着、底面に墨書	灰色 石△	口縁部欠損 山茶碗
46－22 SP 2013	皿	口(11.5) 高2.3 底(6.6)	体部は直線的に開き、口唇部に丸味のある面	体部外面に輪積目、底面に糸切り痕、口縁部内外面は緑色の灰釉、底部内面にピン跡状の釉付着	灰白色 白色粒子◎	口縁～底部１／４残存 古瀬戸
46－23 包含層	碗	底(9.4)	腰部は丸く、貼付け高台の断面形は矩形	体部内外面は平滑な仕上げ、底面中央部に糸切り痕、体部内面に黄褐色の灰釉もトチン痕	灰黄色 精選	底部破片 灰釉陶器
46－24 包含層	碗	底5.7	底部は厚手	底部内外面に褐緑色の釉、底面は輪ハゲ	灰色／黒色粒子◎ 白色粒子◎	底部破片 青磁
46－25 28－124 包含層	碗	口15.6 高6.5 底5.0	体部はやや内彎気味に開き、口縁端部は弱くくびれ、高台は削り出し高台	体下部外面はヘラケズリ、底面に糸切り痕、高台周辺を除き黄褐色の灰釉が施され、体部内面に５ケ所のピン跡	黄白色 精選	完形 古瀬戸平碗
46－26 包含層	碗	口(15.8)	口縁部は直線的に開き、端部は玉縁状	体下部外面はヘラケズリ、体上部と内面に灰白色の釉	灰白色	体部１／４残存 白磁
46－27	鍋	口(20.9)	口縁部は「く」字状に開き、内耳が付く、端部は薄く折り返し	口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜位ハケメ(右一左上)、内面は斜位ヘラナデ	黄褐色／精選 微黒◎	口縁～胴部１／５残存 土師器

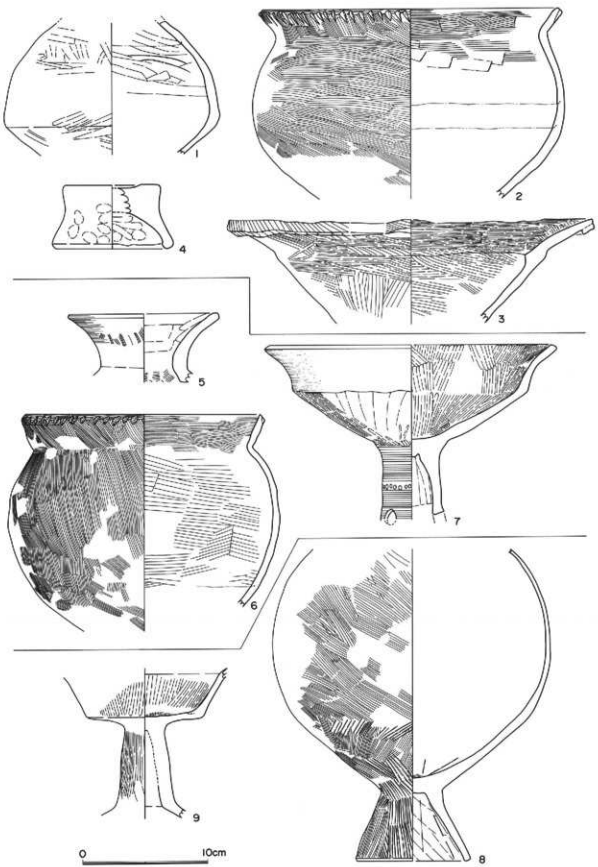


第20図　出土遺物実測図（1）

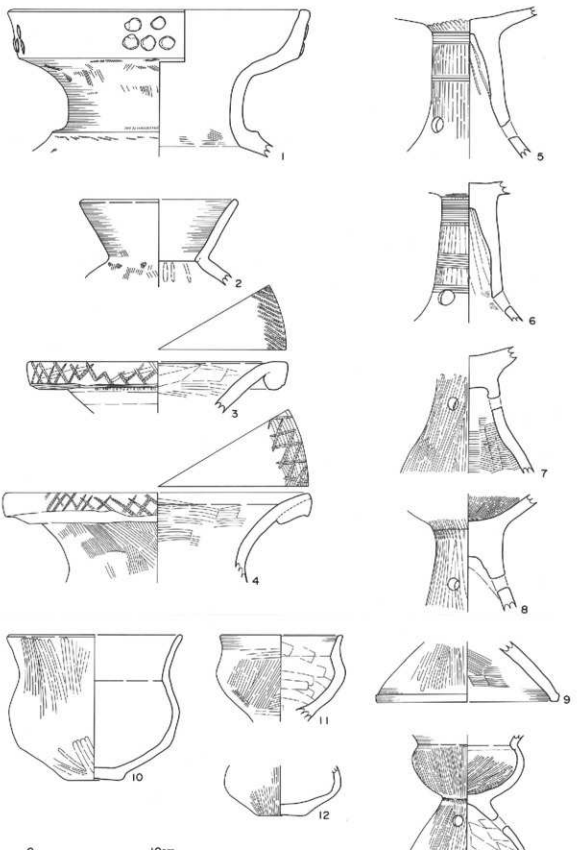
第21図　出土遺物実測図（2）



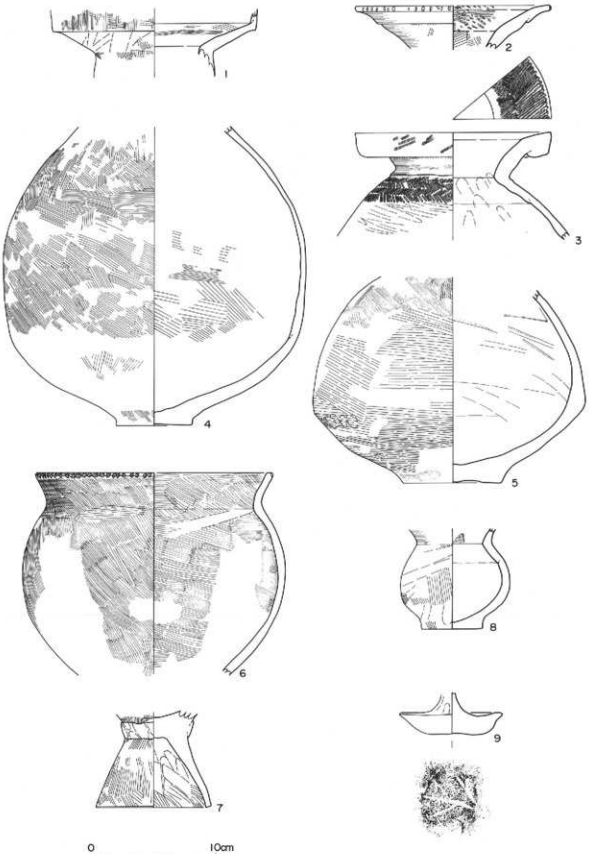
第22図　出土遺物実測図（３）



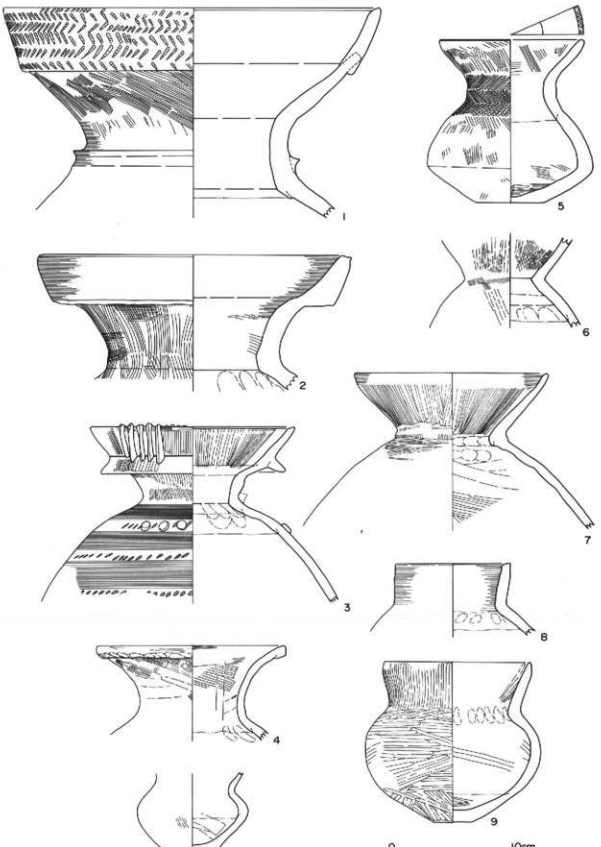
第23図　出土遺物実測図（4）



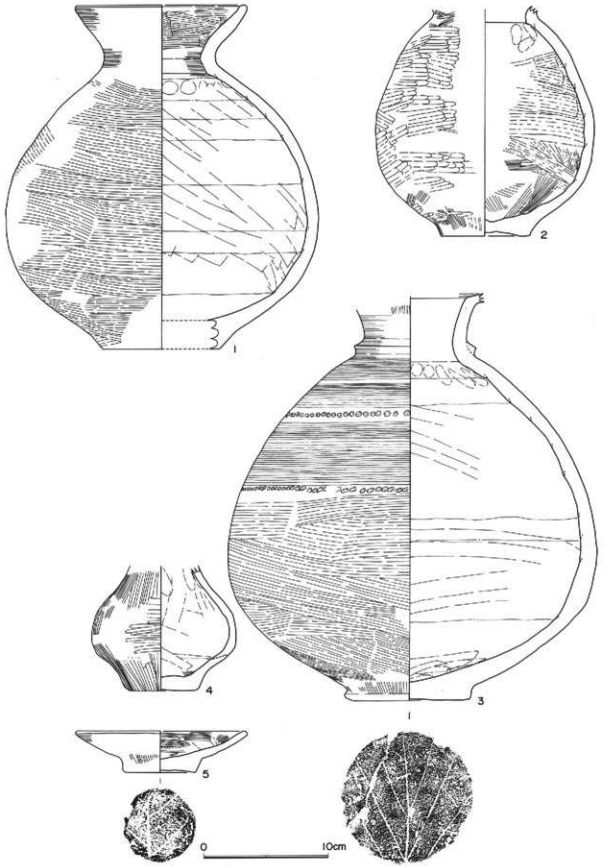
第24図　出土遺物実測図（５）



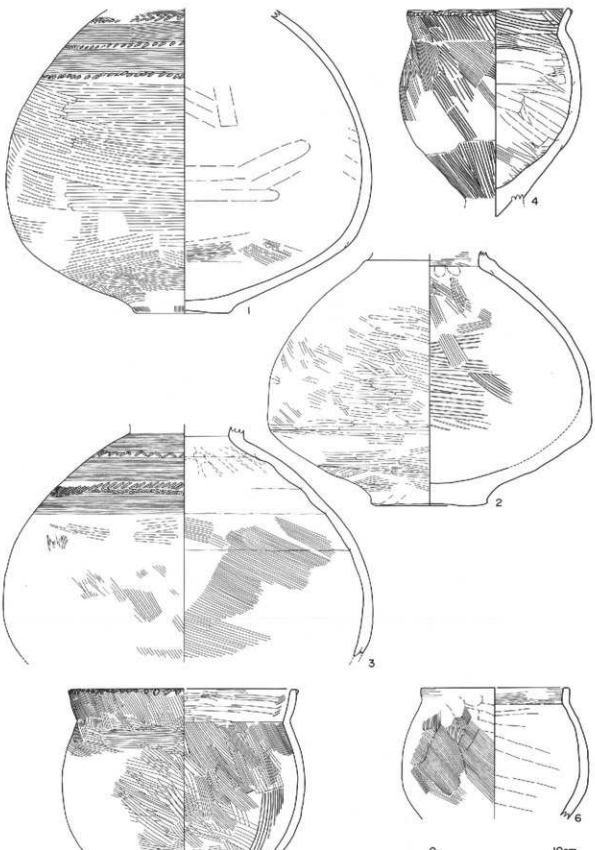
第25図　出土遺物実測図（6）



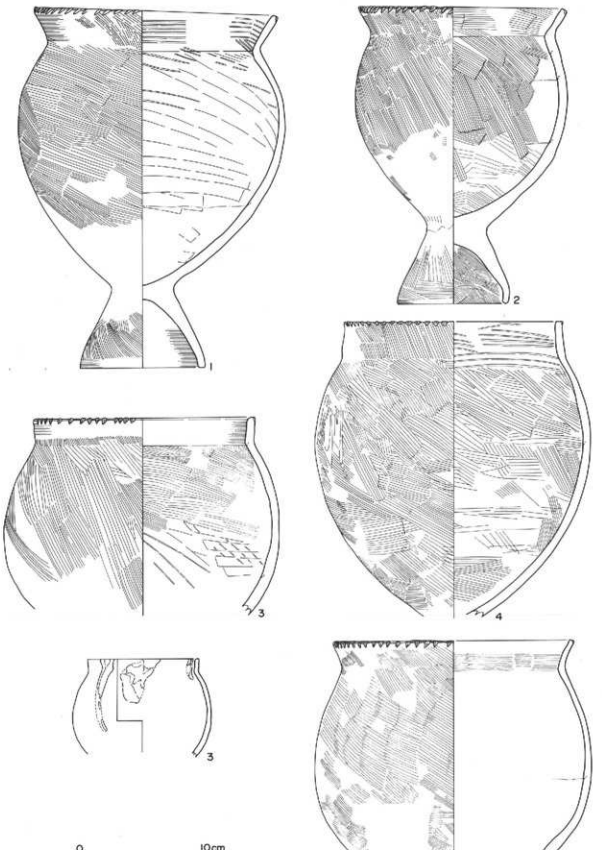
第26図　出土遺物実測図（7）



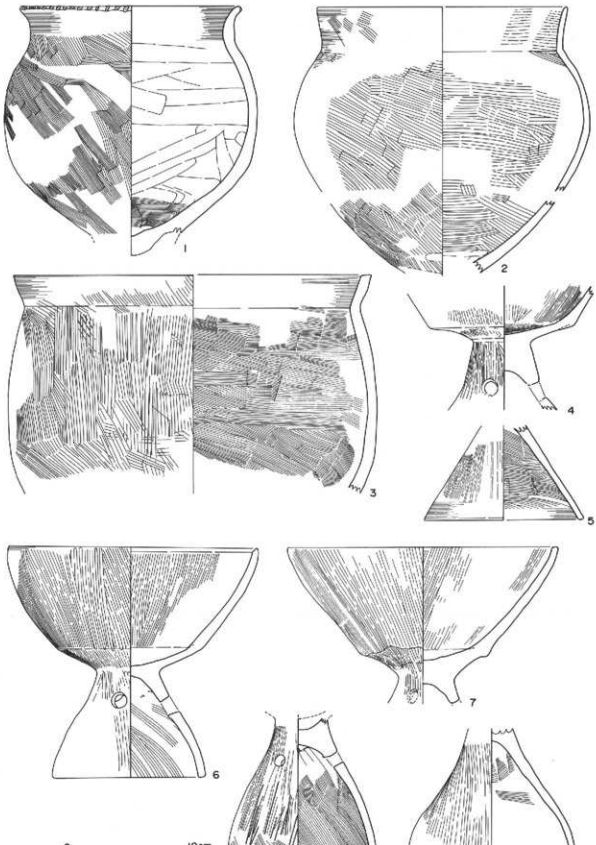
第27図　出土遺物実測図（8）



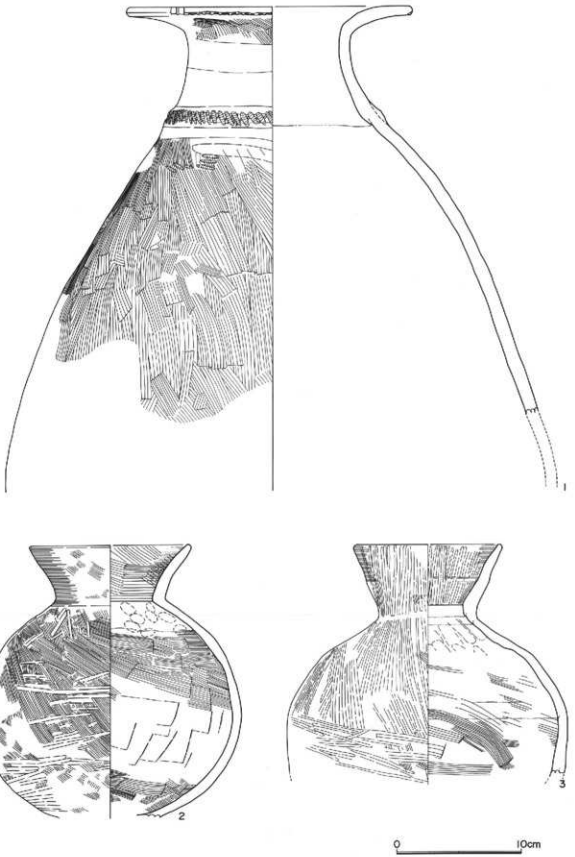
第28図　出土遺物実測図（９）



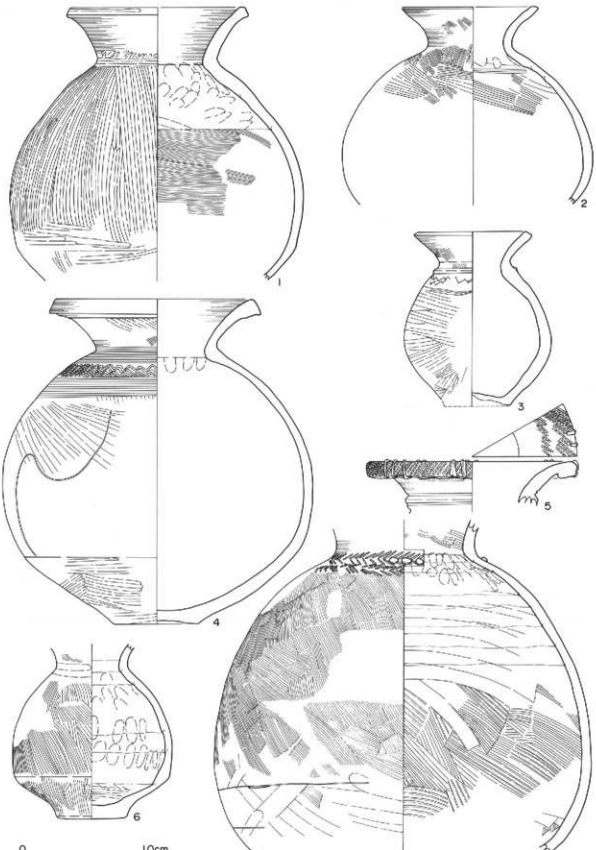
第29図　出土遺物実測図（10）



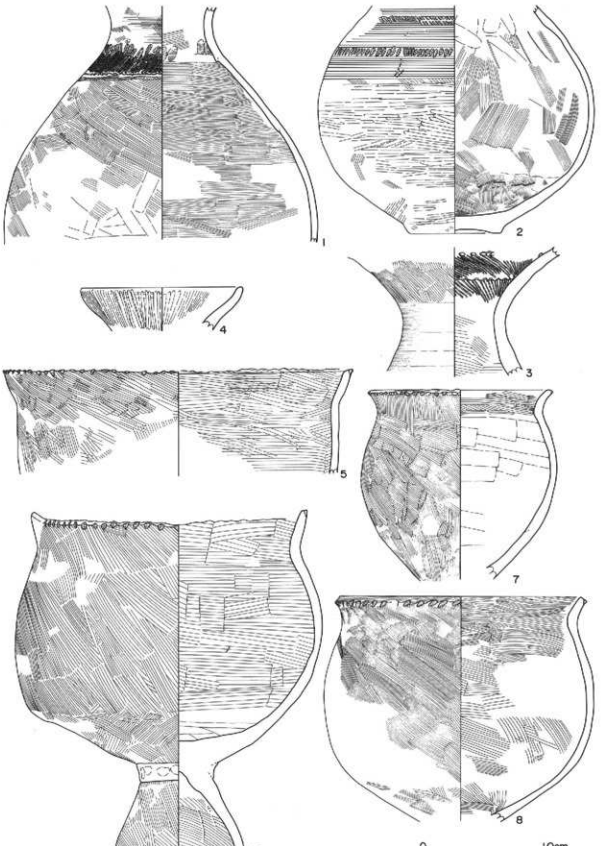
第30図　出土遺物実測図（11）



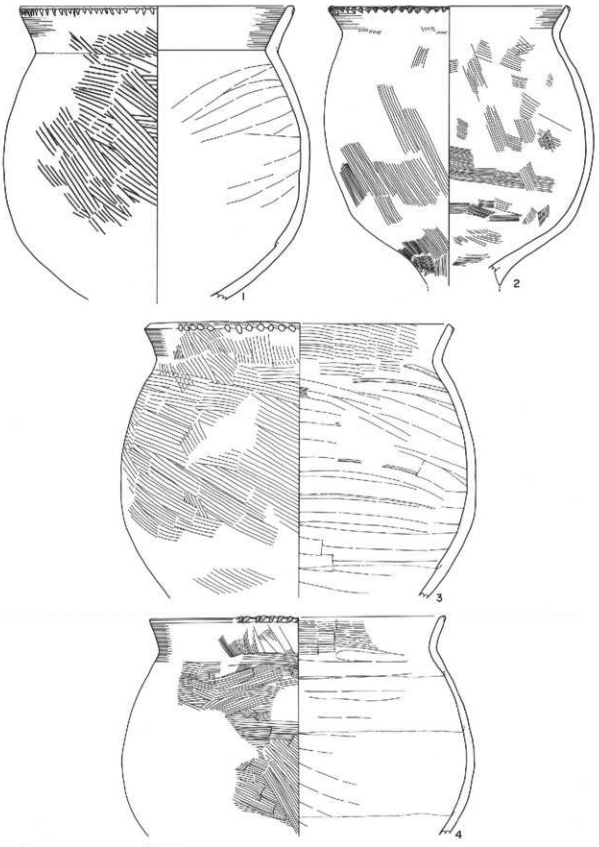
第31図　出土遺物実測図（12）



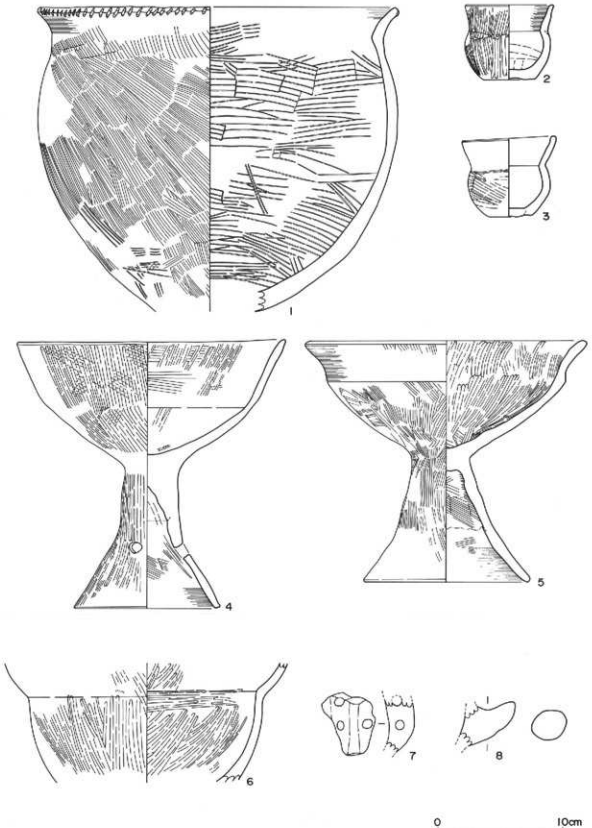
第32図　出土遺物実測図（13）



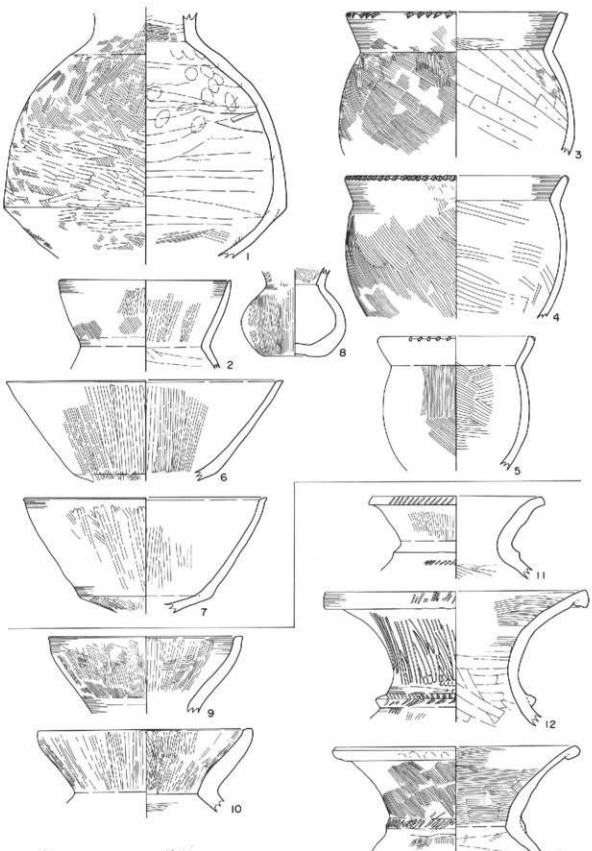
第33図　出土遺物実測図（14）



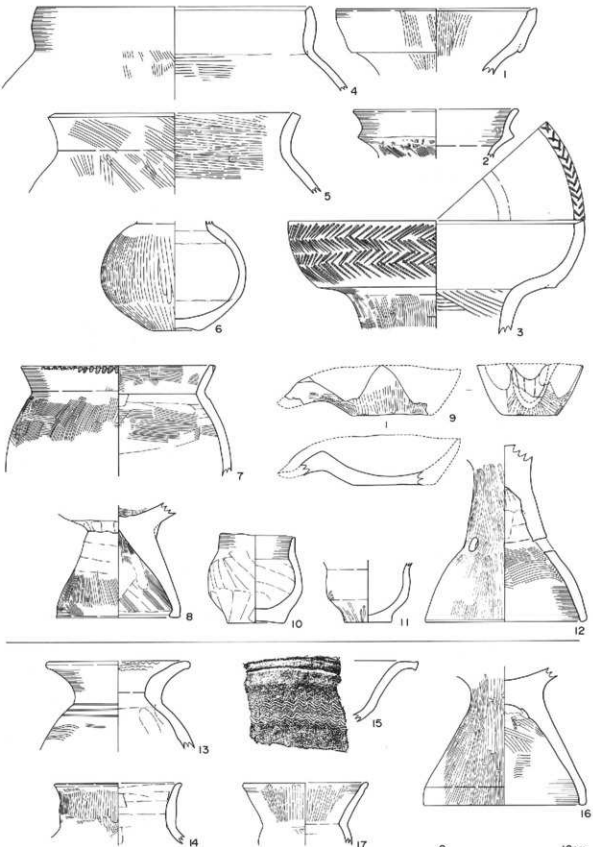
第34図　出土遺物実測図（15）



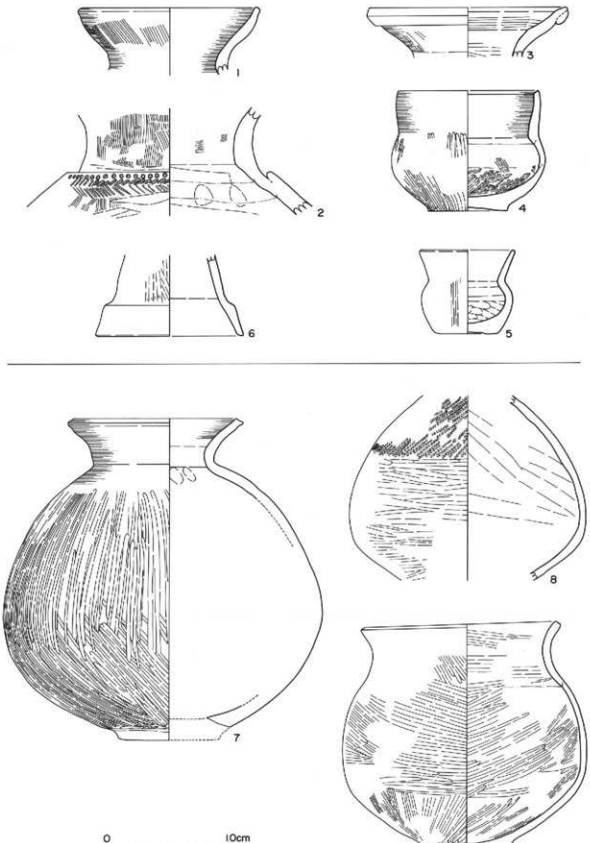
第35図　出土遺物実測図（16）



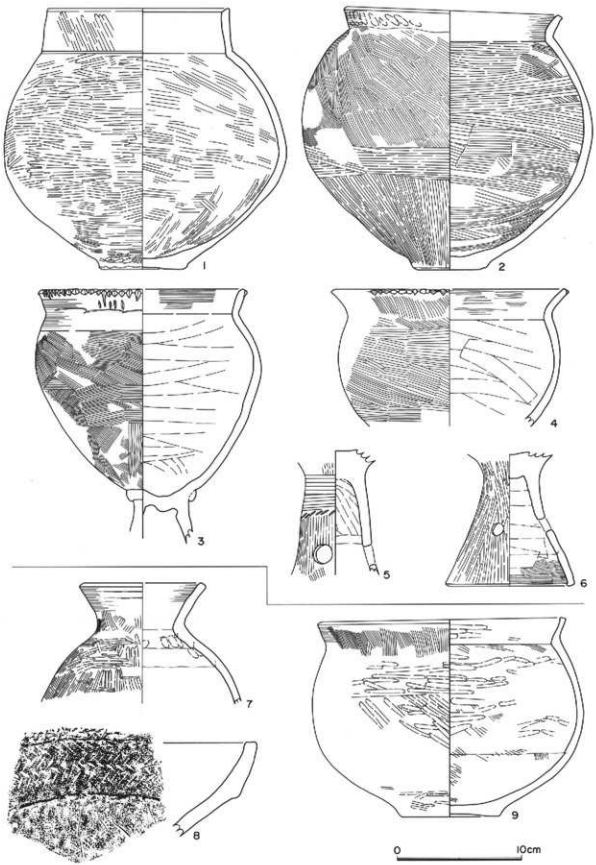
第36図　出土遺物実測図（17）



第37図　出土遺物実測図（18）

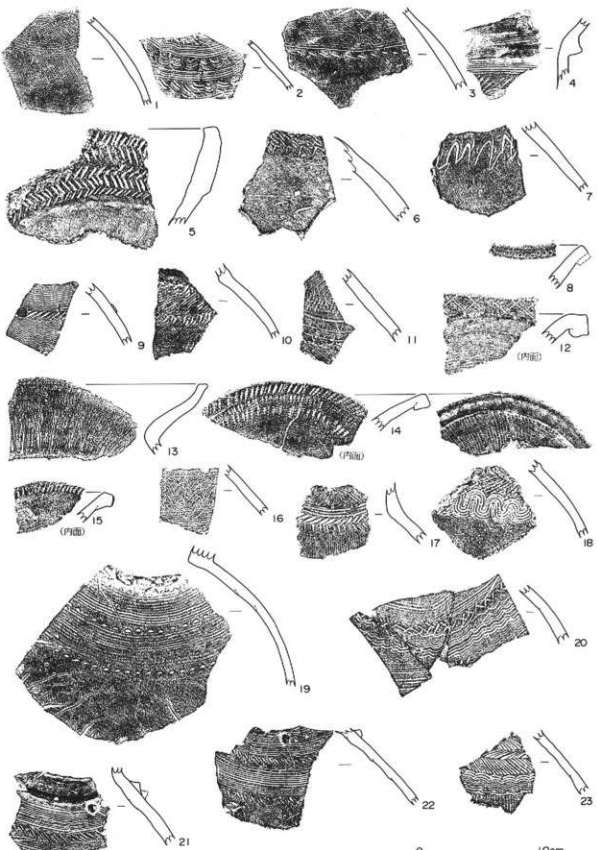


第38図　出土遺物実測図（19）

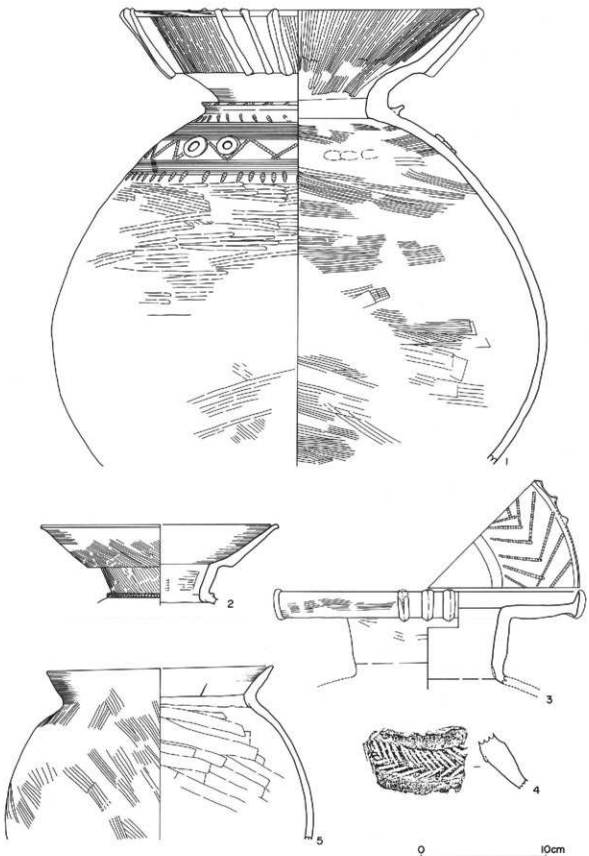


第39図　出土遺物実測図（20）

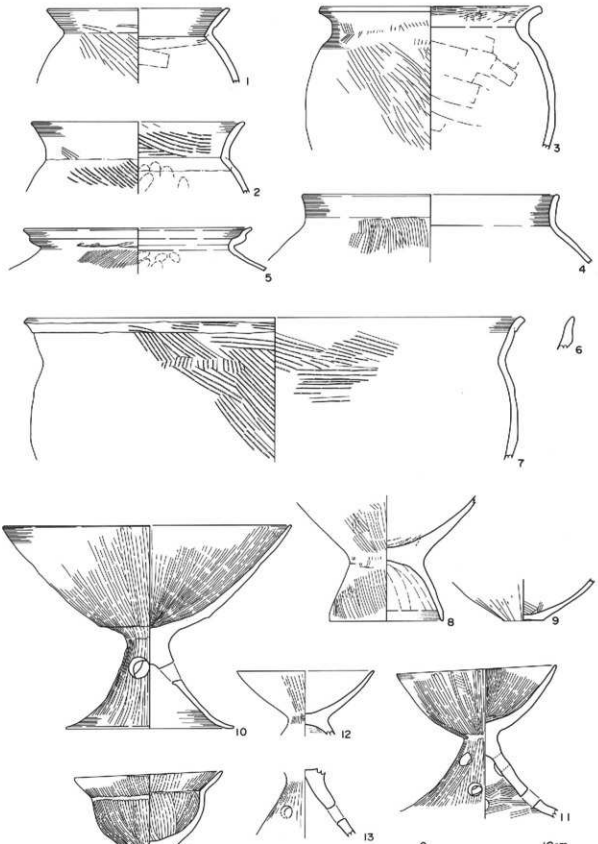
第40図　出土遺物実測図（21）



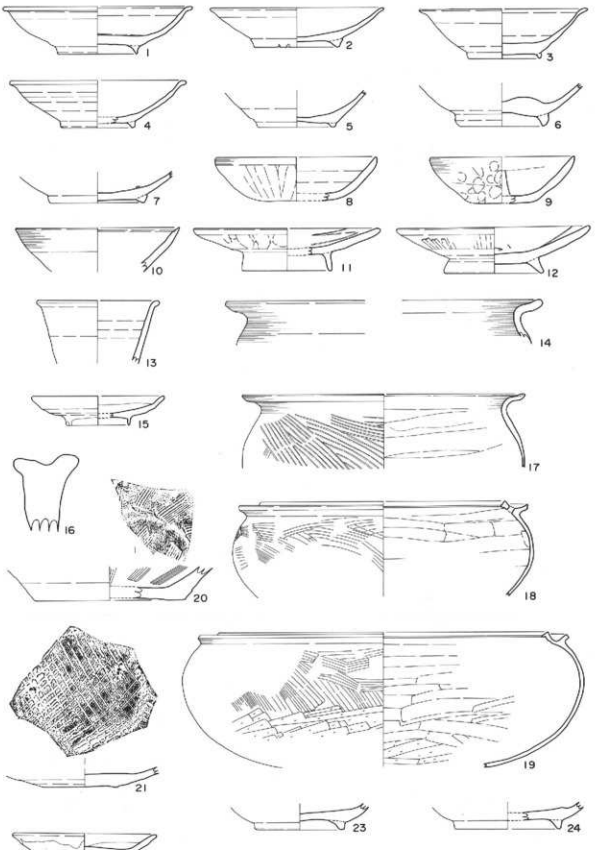
第41図　出土遺物拓影図



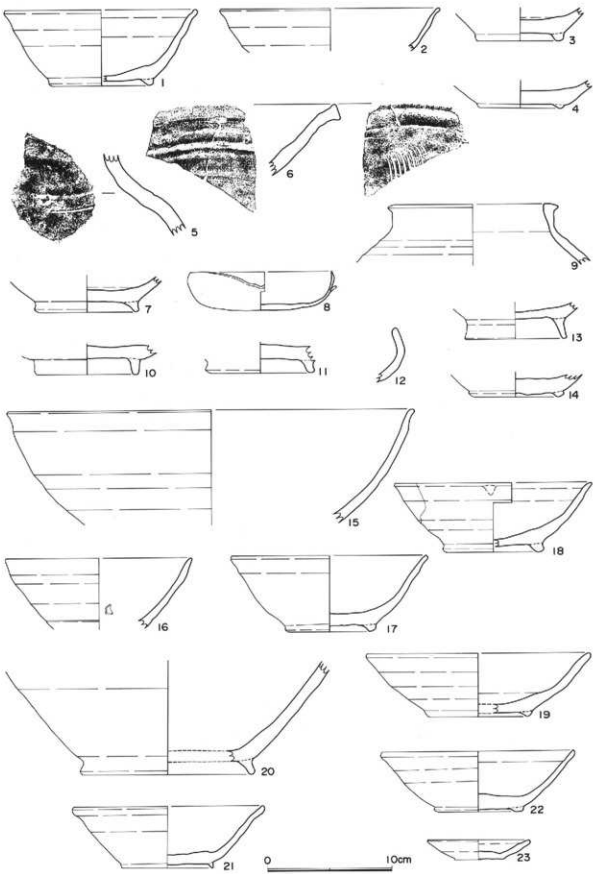
第42図　出土遺物実測図（22）



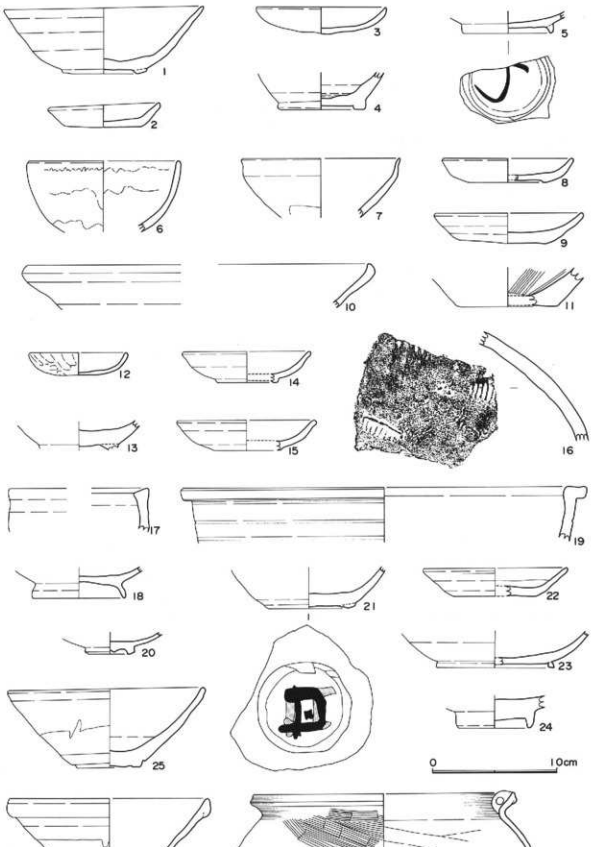
第43図　出土遺物実測図（23）



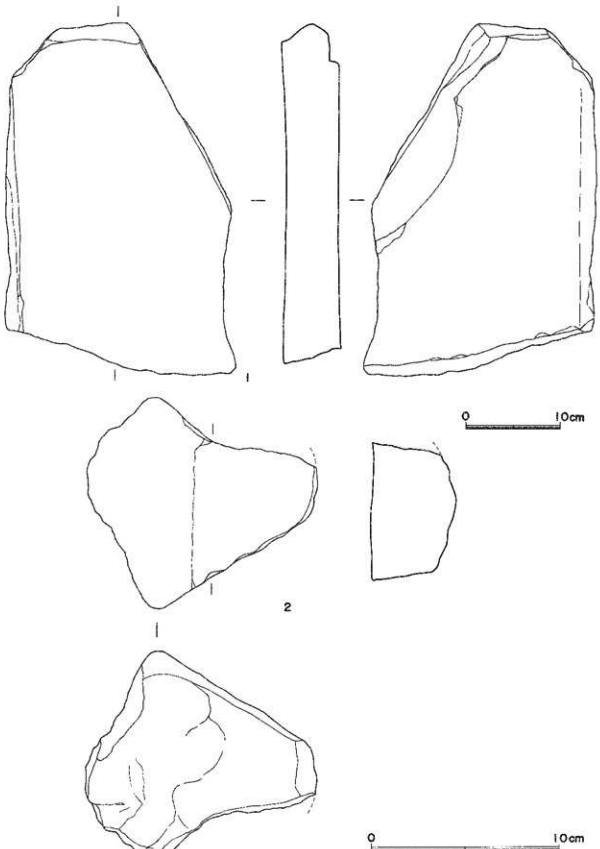
第44図　出土遺物実測図（24）



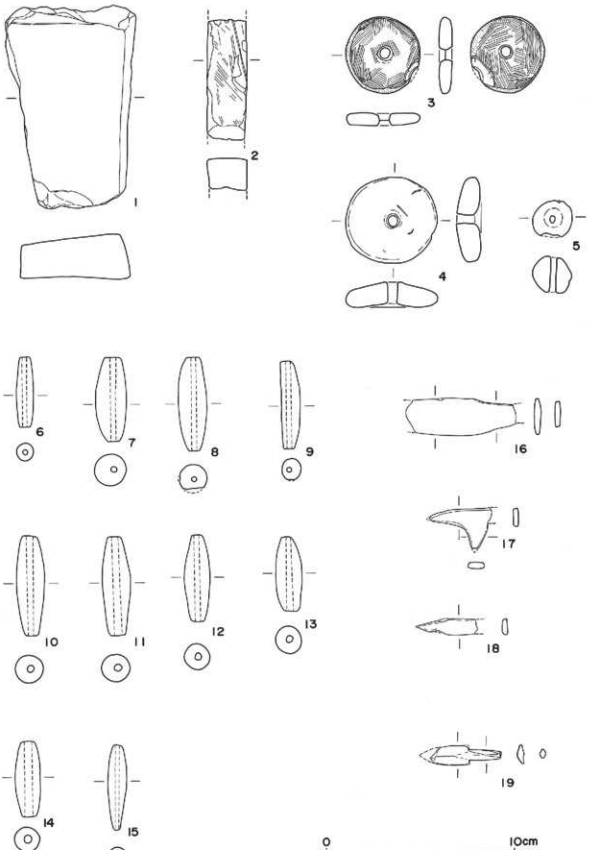
第45図　出土遺物実測図（25）



第46図　出土遺物実測図（26）



第47図　出土遺物実測図（27）



第48図　出土遺物実測図（28）

第5章　まとめ

第1節　弥生～古墳時代前期の集落跡

調査区の中央部には環濠（SD412）が走り、その東西で遺構の様相が異なる。東側には建物跡と土坑が集中し、西側には方形周溝墓と少数の建物跡がある。標高は、東側が6.7m、中央部が6.2m、西側が6.3mであり、微高地上の比較的高い地点に生活域があり、低い地点に墓域が配置されている。出土遺物からすると、環濠と方形周溝墓は、環濠の埋没後に方形周溝墓が構築され、西側の建物跡群と環濠との大きな時期差はないようであり、方形周溝墓の位置に、建物跡と推定される遺構も希薄なことから、当初から墓域が設定されていた可能性が高い。古墳時代前期の遺構は東側にまとまっており、標高値の高い地点に集中する傾向がある。

第49図の中・下段に、これまで発掘された当遺跡の様子の一部をまとめてみた。各調査区の位置は正確なものではなく、あくまでも概念的なものであるが、西端部に溝状遺構（SD420・423）に囲まれた掘立柱建物跡が、特異な存在として注目される。溝状遺構から弥生時代後期の土器が出土し、重複の状態からすると比較的長期にわたり、中央部には大型の建物跡が位置している。

弥生時代後期に掘立柱建物跡が集中する付近の類似した遺跡には、国鉄浜松工場内遺跡（現梶子遺跡）7次（浜松市遺跡調査会1983）があり、小穴群の集中地点のある堀越ジョウヤマ遺跡（白澤1991）もそうした可能性はあろう。

（1）　掘立柱建物跡

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の関係については、団子塚遺跡D地点（柴田稔1992）や古新田遺跡（柴田稔1992）では、ほぼ同数の建物跡が確認されており、掘立柱建物跡が竪穴住居跡に付属するかのように、有機的な関係が認められる。当遺跡では、東側に竪穴住居跡と掘立柱建物跡が混在し、西側に掘立柱建物跡のみの空間が存在し、大型の建物跡を含む点は、特殊な空間をも想像させるが、立地上浸水の危険があり、建物跡の用途は限定されるであろう。

大型の柱穴で柱間が狭く、梁間が1間の掘立柱建物跡の多くは、高床式倉庫になるものが多いと推定され、それらの集中する西側の建物群は倉庫群になるのではないかと思われる。そうした倉庫群を有する集落は、規模が比較的大きく、生産力が高く、経済的余裕のある集落に、そうした施設が設けられたのではないかと思われる。

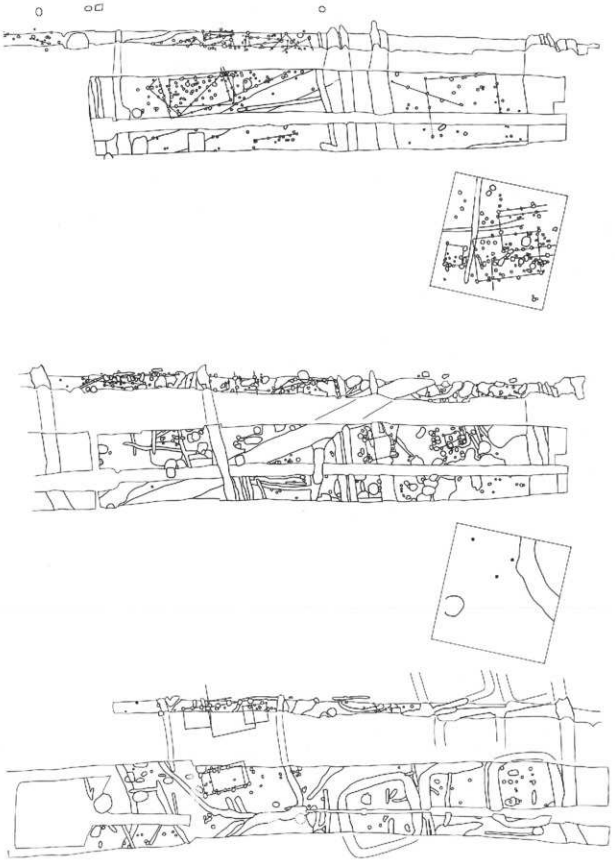
（2）環濠

1988年の埋蔵文化財研究会において、環濠集落についてのシンポジウムが開催され、静岡県の例は松井一明氏により、愛知県は石黒立人氏により集成された（埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会1988）。

松井氏によれば、県内の弥生時代後期の環濠は、後期前葉から中頃のものと、後期の中頃から後葉のものがあり、前者は「広範囲な拠点集落間の防禦的様相の強いもの」で、「巨視的に見ると、大和の後期初頭に出現する高地性集落に代表される畿内の緊張関係の地方波及」とし、後者は「拡大する新興集落が生活領域を確保するために生じてくる隣接地域の集落群との軋轢から生じたもの」とし、さらに、「後期末～古墳時代初頭に加えられた外圧」による可能性も示唆されている（松井1988）。

氏によれば、環濠が開削されるのは、在地集落間の紛争と西方からの外圧によるとされるが、説明としては万能過ぎるきらいがある。

石黒氏は、環濠集落を囲郭集落という用語で説明しており、「囲郭集落の存在意義はまさに閉鎖系を形成する事」とし、環濠の開削と埋没を周辺集落とのコミュニケーションシステムの開閉との関連で捉え



第49図　椿野遺跡遺構配置概念図（上：古代～中世、中・下：弥生～古墳時代前期、参考文献１～３を参考に作成）

ている。そして、「いわゆる山中式から欠山式へという流れは、型式的にみて中間的な移行過程をもたない。かなり不連続な部分が多い」とし、「いわゆるS字甕出現の背景として山中式から欠山式への移行に際して社会（政治）的変化はなかったか」としている（石黒1988）。

松井氏の集成以後、県内の環濠集落の調査例も増加しており、付近では、祝田遺跡（鈴木光1993）、梶子遺跡（鈴木敏1991）、山の神遺跡（佐藤1989）、松東遺跡（佐藤1990）や堀越ジョウヤマ遺跡（前掲書）などがある。

祝田遺跡の環濠は幅約6mと大規模で、山中式から欠山式段階の土器が多量に出土している。梶子遺跡からは、南隣の伊場遺跡の三重の環濠の外側に、さらに大規模な山中式段階の環濠が推定されている。山の神遺跡と松東遺跡も隣接した集落跡で、ほぼ同時期に、大小2つの環濠集落が存在していたようである。堀越ジョウヤマ遺跡では、菊川式でもやや古手の土器が出土している。

後期の集落には、環濠を伴うものとそうでないものがあり、環濠集落となるのは、比較的規模の大きい集落に多いようである。実際には、一部の大規模な拠点型集落を除き、その必要性が生じたのは、それ程長期には及んでいないものと考えている。出土遺物からは、時期的な限定はできないが、下層から山中式段階の土器が、上層からは欠山式段階の土器が出土する例が多い点は、環濠の埋没が短期間だと仮定すると、山中式から欠山式への移行はかなり急激になされている可能性がある。

（3）方形周溝墓

昭和58年度の調査区から、連接した方形周溝墓群が発見されており、約200m南の昭和59・60年度の調査時にも方形周溝墓が確認されており、当遺跡には相当数の方形周溝墓が存在しているものと推定される。

周溝内からは、多量の土器や砥石などが出土した。土器の器種には壺類が4～6割と比較的多いが、煤の付着した甕なども出土している。壺は底部を内側から穿孔され、周溝内からは打ち欠かれた底部（写真図版29-13）が出土しており、方台部上での葬送儀礼の一端が窺われる。

第2節　中世の集落跡

出土遺物には、平安時代や江戸時代の遺物も出土しているが、量的には中世の遺物がほとんどであり、遺構の主体も中世に属するものが多いと考えられる。

しかし、集落の時期的変遷を論究するまでの遺物は出土していない。また、調査区も狭く、遺構の細かな検討はできないが、巨視的に見ると、南北方向に走る溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡と井戸跡が5区画で認められる（第49図上段）。1区画が東西20～30mで、溝状遺構の集中する地点間は約50mの間隔となっている。

南西から北東に走るSD404は比較的古くに削削されており、仮に、南北どちらかに曲がっていれば南側に折れている可能性が高い。東側の掘立柱建物跡については、SD404と併存していたものがあれば、その棟方位は、おそらくSD404に規制されている可能性がある。よって、N－60°－E付近の棟方位の建物跡は古く、東西棟のものは新しい可能性があるが、今回の調査区では層位的な確認はとれなかった。

井戸跡は東西に直線的に配置されており、また、集中して発見される例が多く、その配置の計画性と水場の継続的、長期的使用が窺われる。これらは、集落および宅地が安定的に存在していたことを意味し、集落設計に際しては、長期的な展望のもとに計画されていたのではないかと思われる。

当遺跡は、史料上に登場する伊勢神宮領の都田御厨との関係が古くから指摘（川江1982）されている。都田御厨の成立は、11世紀以前に遡るが、遺構は12世紀以降のものが多く、年代的な不整合を生じている。このことに関しては、今後の調査の進展に期待したいと思う。

引用文献

1．浜松市遺跡調査会『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』1983
2．白澤崇『堀越ジョウヤマ遺跡』1991　袋井市教育委員会
3．柴田稔『団子塚遺跡Ⅰ』1992　浅羽町教育委員会
4．柴田稔『古新田遺跡Ⅰ』1992　浅羽町教育委員会
5．川江秀孝『椿野遺跡』1982　浜松市遺跡調査会
6．埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』1988　愛知考古学談話会
7．松井一明『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題Ⅱ』1988　愛知考古学談話会
8．石黒立人「伊勢湾沿岸地方の＜団郭集落＞をめぐる若干の問題」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題Ⅱ』1988　愛知考古学談話会
9．鈴木光一『祝田遺跡』1993　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
10．鈴木敏則『梶子遺跡Ⅷ』1991　（財）浜松市文化協会
11．佐藤由紀男『山の神遺跡』1989　（財）浜松市文化協会
12．佐藤由紀男『松東遺跡Ⅱ』1990　（財）浜松市文化協会

参考文献

1．川江秀孝『椿野遺跡』1982　浜松市遺跡調査会
2．足立順司『樽野遺跡Ⅰ』1984　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
3．佐野五十三「椿野遺跡」『年報Ⅰ』1985　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

特論

椿野遺跡の土層と環境の地学的検討

加藤芳朗　（静岡大学名誉教授）

1．環境の地学的背景

この遺跡の立地する平野は、都田川が浜松市都田地区の中古生層（秩父帯）の山地から浜名湖に流入する途中の半山間（谷底）低地である。半というのは、北に山地、南に三方原台地が迫るからである。都田川を下流からたどると、川口の細江町気賀地区で三角州、その上の同町中川地区で広い後背低地をひかえる自然堤防帯をなす。これは同地区瀬戸の狭窄部によって遮断され、かわりに、遺跡のある半山間（谷底）低地が現れる。中川地区までは標高３ｍ未満の低湿地であるが、遺跡のある半山間（谷底）低地では標高が６～９ｍと急に高くなる。

ここでは、微高地とその間をめぐる細長い線状の低地からなる（図１）。本遺跡は微高地の上に位置する。線状の低地は、図１のように、「谷状地形」、「旧河道Ａ、Ｂ、Ｃ」と命名された（浜松市遺跡調査会による）。「谷状地形」は図の東端、三方原台地から西流してきた加茂川の旧流路に、「旧河道Ａ」は都田川の旧流路に、それぞれ、あたるものと推定される。「旧河道Ｂ」は、後述の理由で、微高地を削ってできた浅い浸食谷であると解釈される。「旧河道Ｃ」は、発掘区の外にあるため、成因不明である。微高地は都田川の旧流路ぞいの自然堤防である。

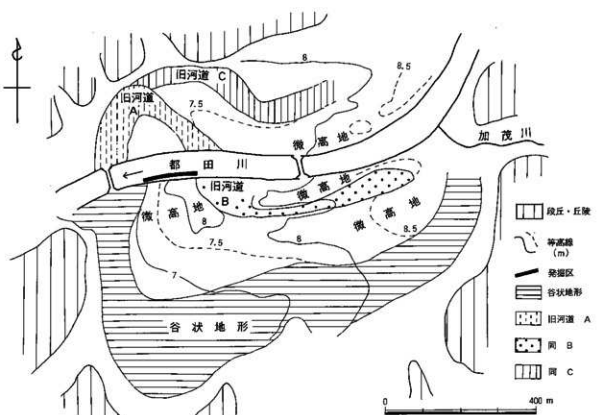


図１　発掘区周辺の地形（浜松市遺跡調査会「椿野遺跡」1985の第２図を簡略化）

2．土層の特徴

（1）標準土層

発掘区のほぼまん中での土層構成は図2のごとくである。全般的特徴として、①シルト質土層（シルト質粘土、シルトなど）が多い。これは自然堤防帯の自然堤防に普通な現象である。②自然堤防の常として地下水位が低いため、全層が酸化的である。ただし、土層が細粒でち密なため、水の内部浸透が不十分で局所的還元が起こり、灰色部分（弱い還元）と鉄・マンガンの酸化物の集積部分からなるまだら模様ができている。③最下位黄褐色のシルト質粘土層が発掘区全体を通じて認められる。④最上位の盛土下の土層が、青、緑を帯びた灰色で膜状斑鉄を有するのは、盛土内の浸透水が最下部にたまって酸素不足（還元）をもたらしたためと思われる。これも盛土の下でよく見掛ける現象である。②、④によって土層が、上位から、還元（帯青緑色）、酸化（褐色）、局所的還元（灰色と褐色のまだら）という順になっていることがわかる。

発掘区内では、西にゆくほど、灰色土層が、東にゆくと褐色土層が目立つ傾向がある。

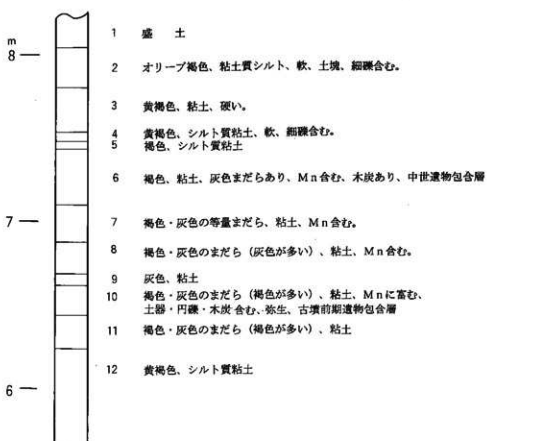


図2　発掘区中央の土層（No.1～No.12） Mnはマンガン斑

（2）土坑内覆土の還元化

発掘区の西端に顕著な実例が観察された。全体は褐色を呈する土坑覆土が、その下部だけ還元状態にある。たとえば、そこが青色味を呈し、還元化の検出試薬である$\alpha-\alpha'$ジピリジールに反応（赤変）すること、割目や根跡の穴の壁が褐色に酸化するなど、還元化の徴候が明瞭であった。その理由は、土坑底にち密な土層があるため、浸透した水が覆土の底にたまり、含まれる有機物の作用も加わって還元化が

おこったと解釈される。このような事例は発掘区内数カ所で見られた（SD205、302など）。

（3）谷跡

発掘区の東外れに大きなけずりこみが認められた。深さ2m以上（底は海抜5.5mより低い）、発掘区の延長方向でのみかけの幅が15mをこえる。攪乱や多数の土坑のため、西の方の土層との関連はつかむことができなかった。けずりこみのはじまる層準は、西の最下位層（黄褐色シルト質粘土層）の上端よりも低いので、この土層の中に含まれるものと思われる。覆土はシルト、時に小礫を含み、下部は還元化がいちじるしい。これらのことと、その位置から、1でのべた旧河道Bに相当する可能性が強い。都田川の旧流路だとすれば、覆土に礫層や砂層が含まれるはずである。これらがないことから、旧河道Bは、都田川の自然堤防（シルト質粘土からなる）を侵食してできた浅い谷ではないか、と解釈される。

おわりに、図の引用を許可された浜松市博物館にお礼申しあげる。

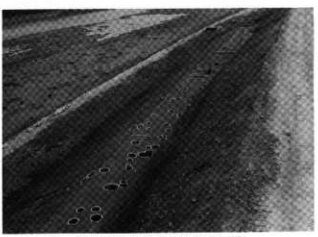
図　　版

遺跡周辺の現状（北西から）

第Ⅰ調査面全景（南西から）

第2調査面全景（東から）

SD102遺物出土状況（南西から）

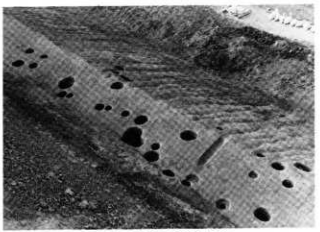


第2調査面東側全景（西から）

SP2001～2004（南東から）

SP2004西側古銭出土状況（西から）

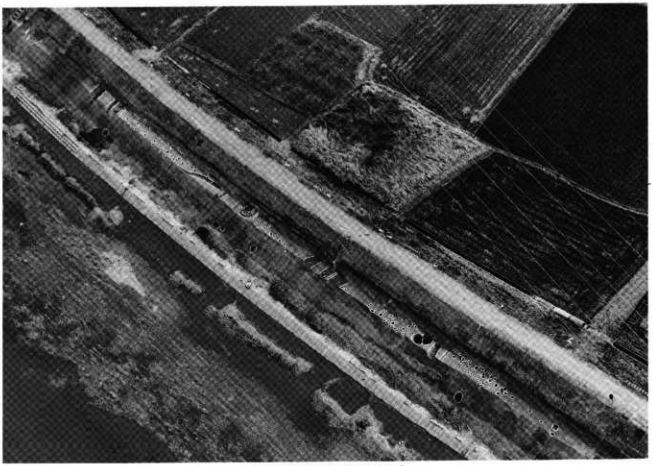
第２調査面中央東側小穴群（東から）



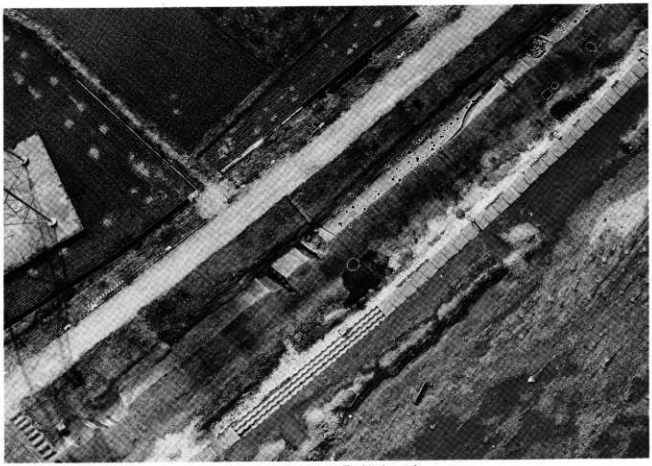
SP2034～2038（南東から）

SX202（南西から）

SD212遺物出土状況（南東から）



第３調査面全景（北西から）



第 3 調査面東側全景（北東から）

第 3 調査面西側全景（北東から）

SX201遺物出土状況（南西から）

SD301～303（南東から）

第3調査面中央東側小穴群（南東から）

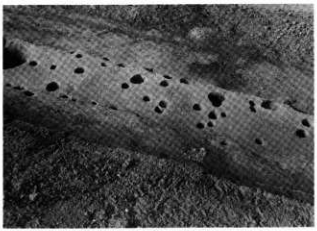
第3調査面SD304東側小穴群（南西から）

SD304（南東から）

SE1遺物出土状況（南から）

第3調査面西側全景（南東から）

SD306～310遺物出土状況（南東から）

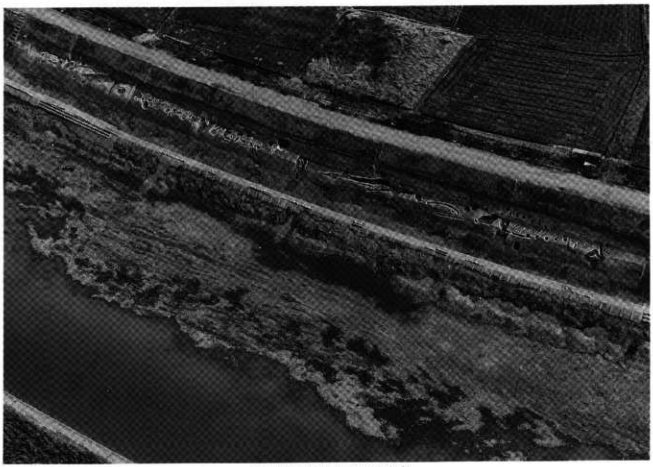


第3調査面SE6東側小穴群（南東から）

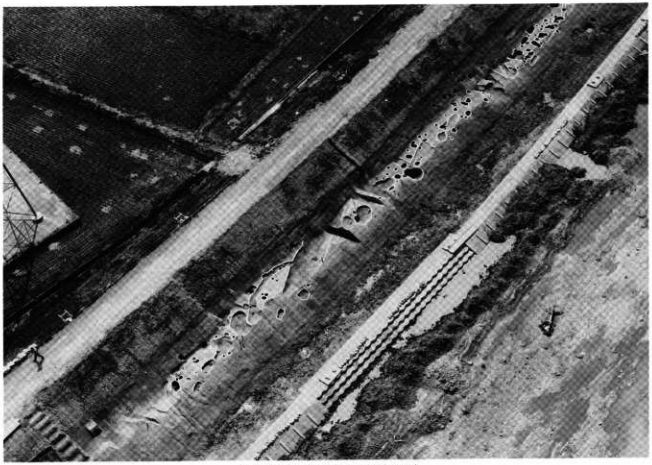
第3調査面西端小穴群（南東から）

SX301東（礫集中地点）・302（南西から）

SX302遺物出土状況（南西から）

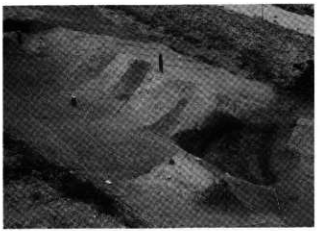


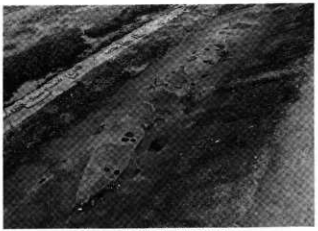
第4調査面全景（北西から）

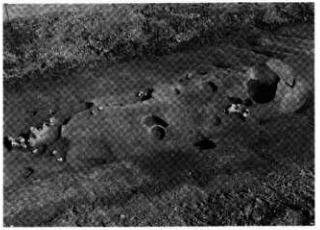


第 4 調査面東側全景（北東から）

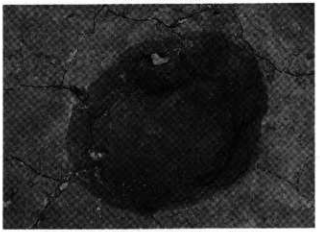
第 4 調査面西側全景（北東から）


第 4 調査面東端（南東から）


第 4 調査面東側（南西から）

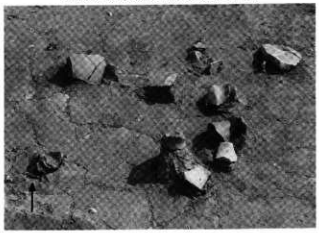

SX401（南西から）

SP4002 鉄製品出土状況（北から）


SP4010 鉄製品出土状況（北東から）

SF403・404 遺物出土状況（南西から）

SD403（南東から）


SX301 銅鏃出土状況（北西から）

第4調査面中央東側小穴群（東から）

第4調査面中央東側小穴群（南西から）

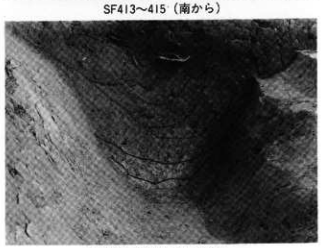
SP4030～4037（北から）

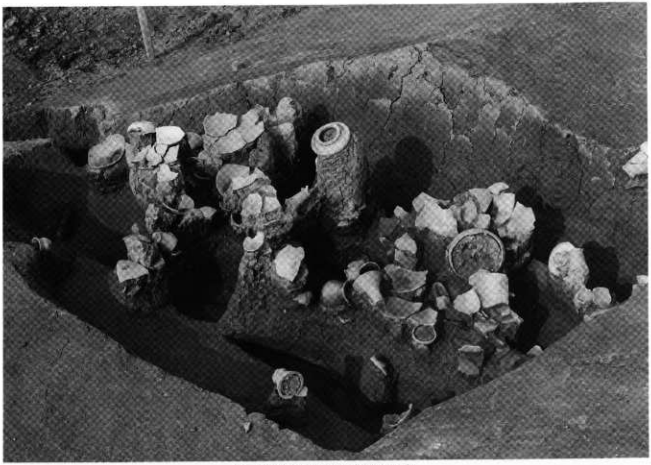
SF410遺物出土状況（北から）

SD407～409遺物出土状況（南西から）

SF413～415（南から）

SD412（南から）


SD412土層断面（北から）



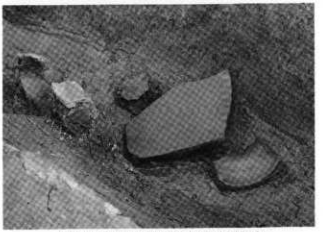
SD412遺物出土状況（南西から）

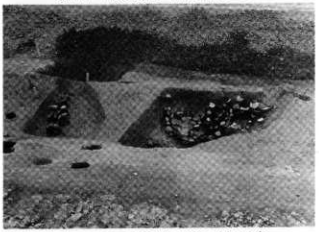
SF418・419遺物出土状況（西から）

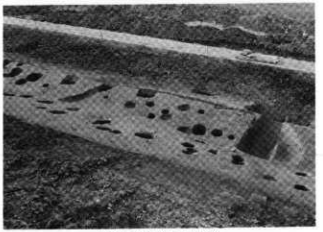
SD413～416遺物出土状況（南東から）

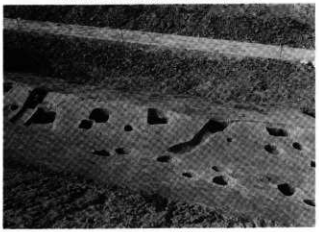
SD413～416（南西から）

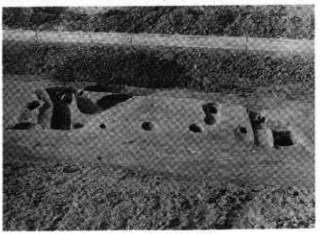
SD414～416遺物出土状況（南から）


SD414下層砥石出土状況（北西から）


SF418、SD420遺物出土状況（南から）


SD419・420（南東から）


SP4148～4152（南東から）


SD421～423（南から）

1. SD412

2

3

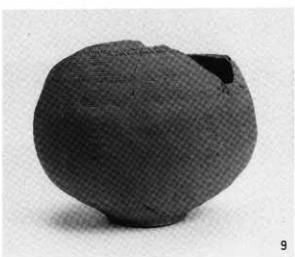
4

5

6

7

8


9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23. SF418・419

24

25

26

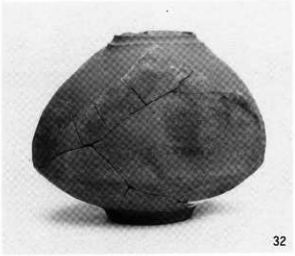
27

28

29

30

31


32

33

34

35

36

37

38

39

42

40

43

41

44

45

46

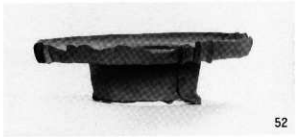
48

47

49

50. SX302

51


52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

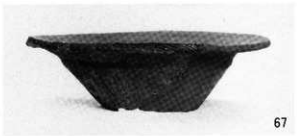
62

63

64

65

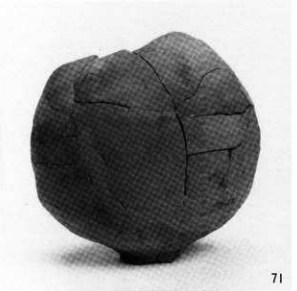
66


67

68

69

70


71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

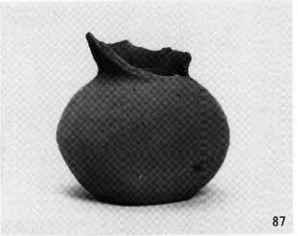
82

83

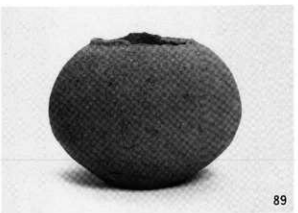
84

85

86


87

88


89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

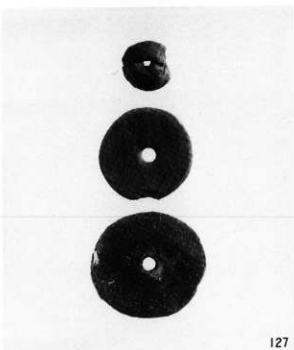
122

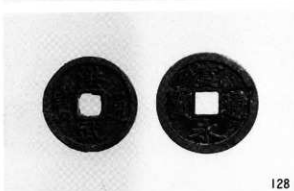
123

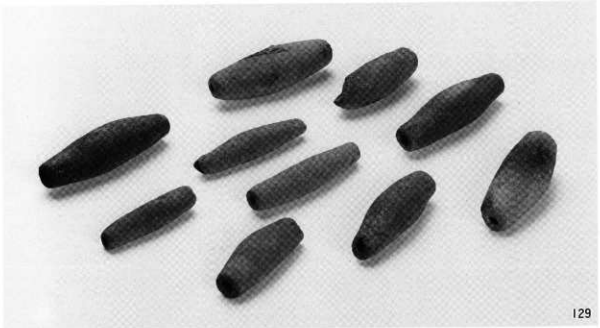
124

125

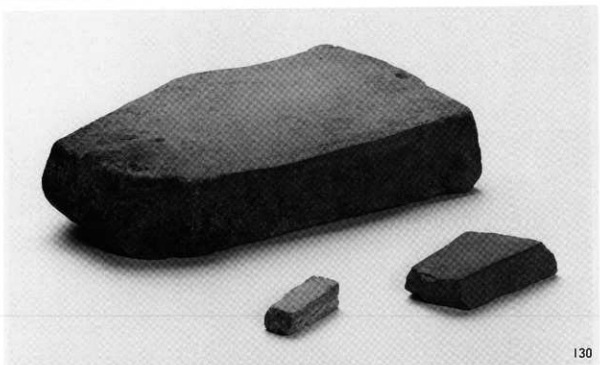
126


127

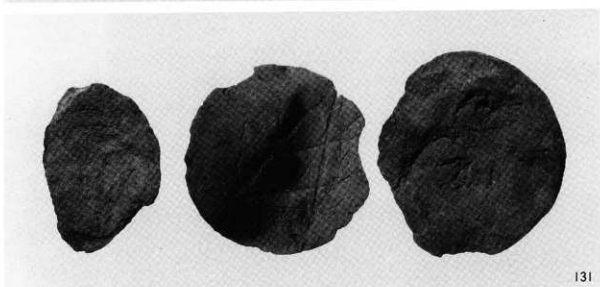

128



129



130



131

編集後記

今回の調査には様々な問題点があったが、調査はこれでひとまず完了することになる。自分の責を果たしたという安堵と発掘調査に至る経緯に多少の行き違いがあったことに対する無念の気持ちとが入り混じり、複雑な感情である。

この調査書が完了するまでには、多くの人々の御協力があった。

発掘調査にあたっては、柴田稔、川江秀孝、栗野克己、佐藤由紀男、栗原雅也、鈴木光一の各氏より物心両面にわたる御援助があった。とくに、記してお礼申し上げます。また、近隣の方々に現地作業をお願いし、真冬の寒風が吹き荒ぶ中を辛抱強く調査を補助していただいた。クリスマス・イブには、寒風と共に珍しく雪が舞ったが、今となっては良い思い出である。

整理作業では、島田整理事所の方々にお世話になった。初めて整理作業に参加された方が多く、私の教え方も悪く、悪戦苦闘の毎日であった。出土土器の量も予想をはるかに上回り、下野整理事務所の方々にも実測のお手伝いをしていただいた。

末筆ではあるが、御芳名を記して感謝の意を表したい。

〈発掘作業参加者〉

加藤　譲・澤田　治・瀬上一雄・藤川正一・松原　省・山村弥一・加藤むつ・北　史枝・澤田たけ
白柳豊子・鈴木やす・松本せつ子・村上かよ・松村記代子・辻村貞恵子・堀内さち子・山本さき子

〈整理作業参加者〉

鈴木くり子・三幡加寿子・秋山千春・増本祐子・鈴木圭子・大池真由美・白畑幸子・鷲塚宏子
松島智子・原　洋子・杉山豊子・鈴木まき江・佐野絹子・管沼まさ江・吉沢さと江・安藤尚子
中川里美・瀧　佳子・沼本京子・酒井敦子　　（順不同、敬称略）

（S.）

報告書抄録

ふりがな	つばきのいせき
書名	椿野遺跡
副書名	平成4年度二級河川都田川住宅宅地関連公共施設促進工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所報告
シリーズ番号	第52集
編著者名	柴田 睦
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18－5 TEL0543－67－1171
発行年月日	1993年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
椿野（つばきの）	静岡県浜松市（しずおかけんはままつし） 都田町（みやこだちょう）			34° 48′ 50″	137° 42′ 34″	19931201 ～ 19930930	延945㎡	堤防の護岸工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椿野	集落 墓	弥生後期 ～ 古墳前期	掘立柱建物跡 土坑 溝 方形周溝墓	弥生土器 土師器 銅鏃1 紡錘車2 鉄製品	環濠集落
	集落	平安後期 ～ 中世	掘立柱建物跡 溝 井戸跡	灰釉陶器 山茶碗 土師器 陶磁器 土錘 古銭	多数の掘立柱建物跡と井戸跡

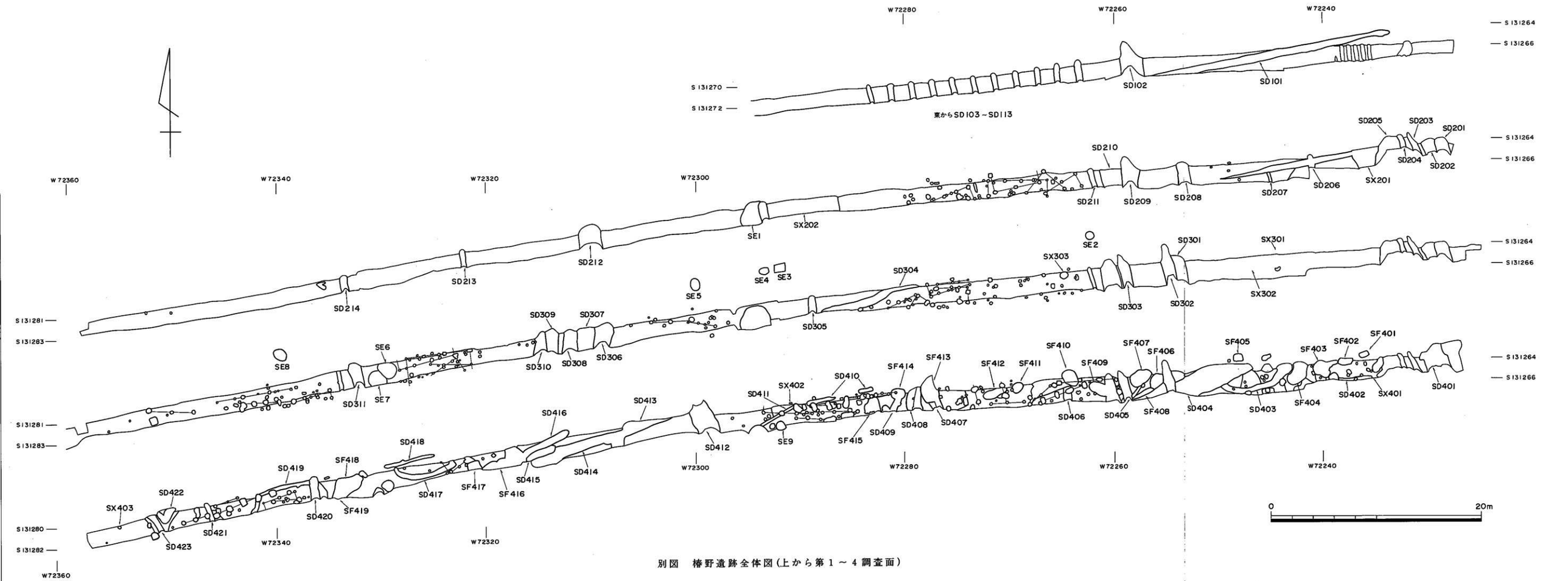
椿　野　遺　跡

平成4年度二級河川都田川住宅宅地
関連公共施設促進工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年9月30日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印　刷　株式会社　三　創
静岡市中村町166番地の1
ＴＥＬ（054）282-4031



別図　椿野遺跡全体図(上から第１～４調査面)